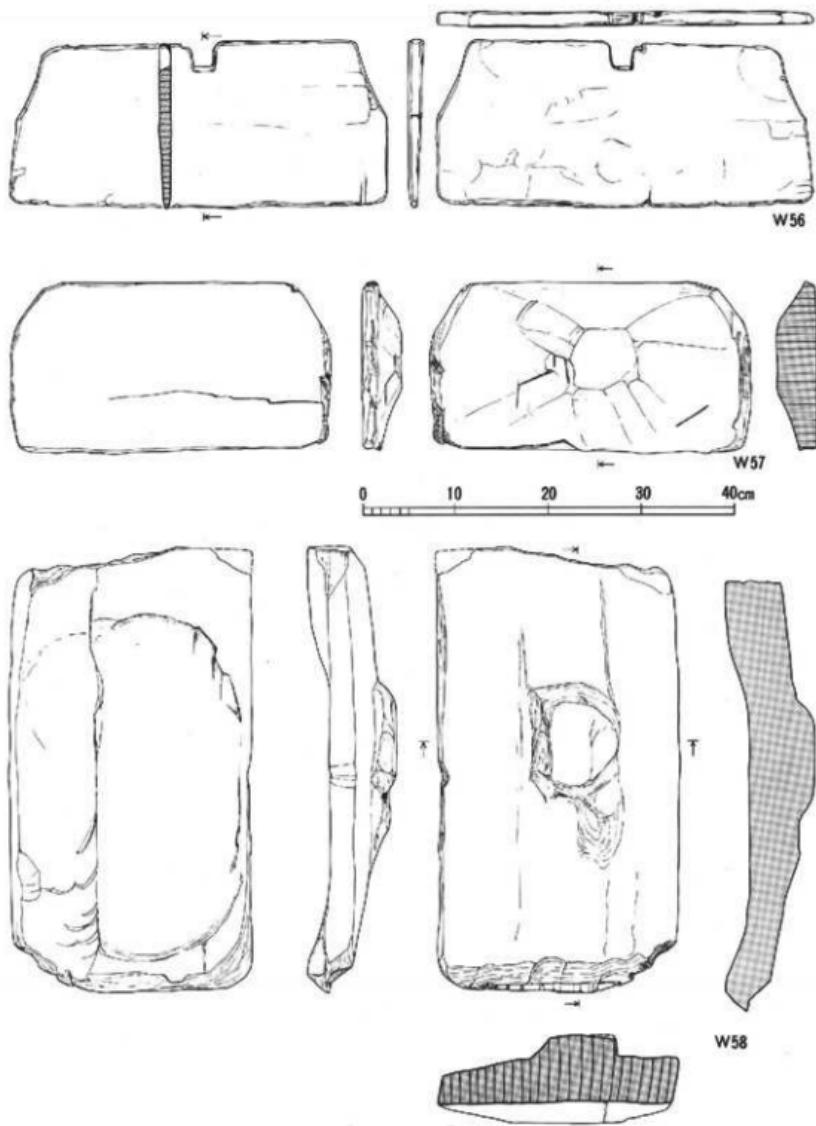
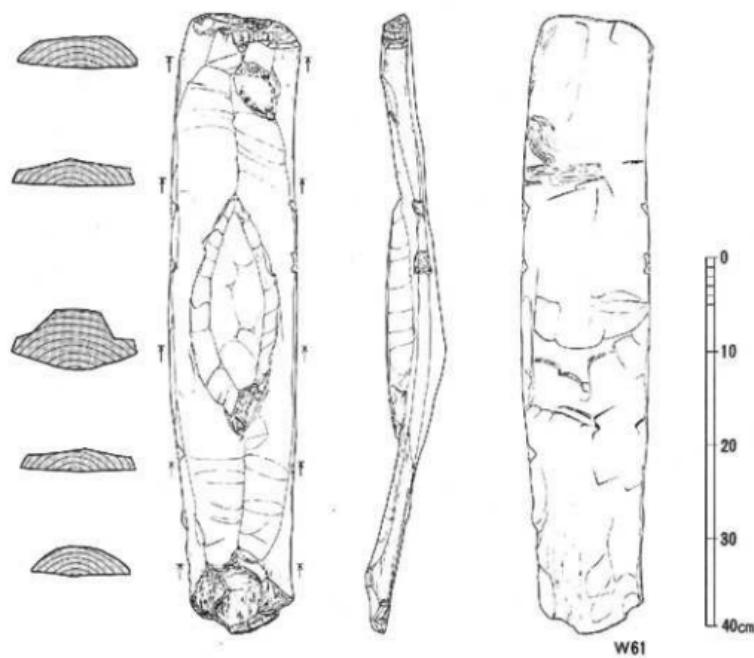
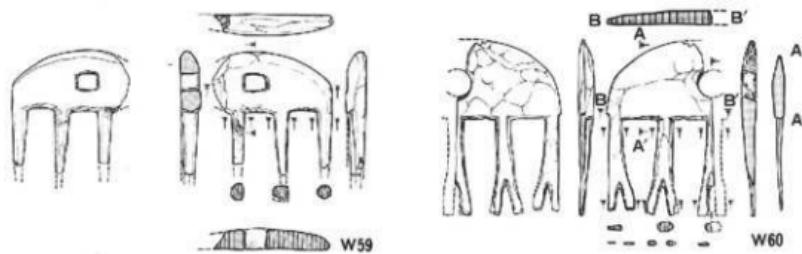


第123図 丸鍬実測図(14) 1:6



第124図 エブリ実測図(15) 1:6



第125図 叉鍬・諸手鋤実測図(16) 1:6

上辺中央に幅2.5cm・深さ2.5cmを測る柄挿着用の欠込みを施しており、その挿着角度は約60度である。

身厚はほぼ均等で約1.5cmを測る。

W57は略台形を呈すもので、中央に鋸線の不明瞭な隆起をもつ。

W58は短辺をやや傾斜をもたせて切断されているため、平面形は略台形となっている。片面に平面台形の隆起があり、もう一方の面はわずかに内割りが施されている。²⁶

又歛（第125図W59・60 図版135） いずれも身は平面形が半円形を呈すものである。中央には柄孔が貫通しており、W59は略方形、W60は円形となっている。

W59は下方にいくにしたがって細くなる歯が3本残存している。柄孔の位置を根拠に身幅を復元すると約16cm前後となり、歯の本数は元来4本であったと考えられる。

W60は歯が3本残存している。これも柄孔の位置を根拠に身幅を復元すると22cm前後の大きさとなり、歯の本数は元来5本であったと考えられる。この歛の大きな特徴としては歯の端部が中央よりやや下方で2支に分岐することである。この歯は端側のものを別とすれば、基部は断面六角形を呈し、先端は板状となっている。

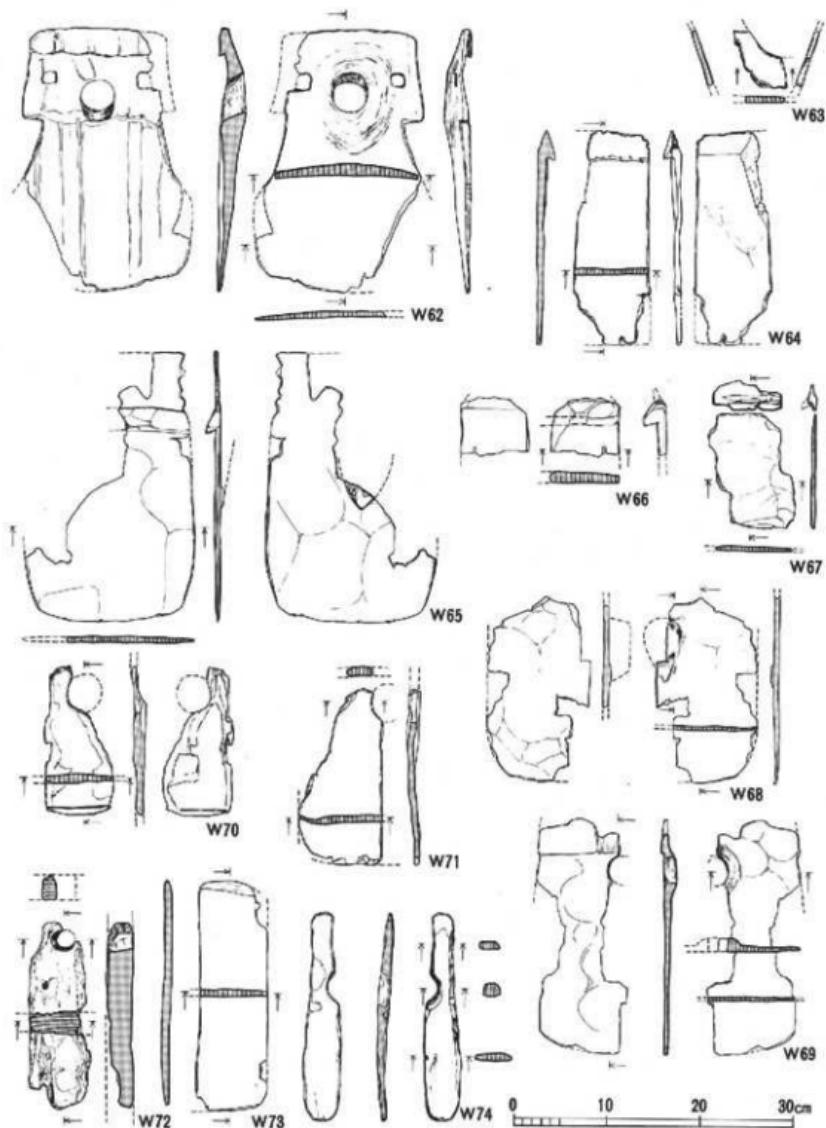
諸手鎌（第125図W61 図版135） 諸手鎌の未成品で、側面から見ると「く」の字形に屈曲する身をもつものである。船形隆起は内面に削り出されている。この鎌は内湾する側が木表となるように木取りされており、この面の両端付近には自然面が残されている。このことからすると直徑15cmを測る桟材のあての屈曲部をそのまま諸手鎌の曲面に利用したことがうかがえる。

このような木取りをする例は以前当遺跡から出土したものにもあることが報告されている。²⁷ それは内湾する側が木裏となるように木取りされており、外面中央部分に自然面が残されている。このことから両者は、①器種が同じであること。②あてによって生じた幹の自然曲線をたくみに利用していること。③以前出土したものと長さがほぼ同じであること。④木取りを検討すると互に対応すること。⑤原木の直徑が両者とも15cm前後と推定されること。この5点が共通することから調査年次、出土地点は異なるものの1本の原木のあての部分を概割にしたものであろうと考えられた。

広鎌（第126図W62 図版136） 身の上半部両辺に逆「L」字状のえぐりを入れることによって、上端部は台形を呈し、下半は櫻形となっている。内面の上辺には、それに沿って断面三角形を呈す突帯が削り出されている。この加工は柄孔の下端あたりから上方に向けて行われており、他の広鎌と比較して広範であることが注意される。外面は柄孔の周囲が隆起するが、鋸線は不明瞭となっている。

台形を呈す上端部には柄孔をはさんで、方形の貫通孔が認められる。これは所謂の丸鎌を固定するための孔であるが、広鎌W28・34、丸鎌W51と比較するとかなり大きい孔であることが知られる。

いずれにしろ、これまで当地方では見かけない形態の鎌である。



第126図 各種銭類実測図(17) 1:6

W63は広鎌A₁aの上端のえぐり加工されている部分の破片と推定される。

W64は内面上端に断面三角形を呈す突帯があり、上辺右肩には小さな鋸歯状の加工が認められる。

また側辺は直線をなす。外面上端は斜めに削ぎ下されていることからすると、広鎌A₁bの一部と推定される。

W65はかなり欠損しているが、内面には上方に断面三角形を呈す突帯がある。側辺は直線をなし、その上端付近には鋸歯状の加工が認められる。外面中央には船形隆起の下端が残存している。船形隆起の位置を考慮して身幅を復元すると約18cmとなり、広鎌A₁bの特徴と類似する。ただし、内面の突帯から上辺までの長さが6cmを測り、趣きを異にしている。

W66・67は上端に断面三角形を呈す突帯が認められる破片である。おそらく広鎌A₁の一部であろう。

W68は断面二角形を呈す突帯部分を欠損しているので判定はしがたいものの、側辺は直線をなすので広鎌A₁bの一部であろう。

W69は側辺が下方へ行くにしたがって、やや開き気味となっていることから広鎌A₁aに含めておきたい。

W70・71・73はかなり磨滅しており、外面の船形隆起及び内面の突帯は認められないが、欠損してしまった可能性も考えられる。

W72は厚さ2.6cmを測るもので、上方に円形の貫通孔の一部が認められる。他の鎌と比較すると厚みがかなりあることや、貫通孔の径が小さいことから、鎌でないことも考えたが貫通孔が傾斜しているので一応ここに含めておいた。

W74は長さ22.1cm、幅4cmを測るもので、片方の側辺中央よりやや上方に半円形の割り込みが認められる。これは鎌の柄孔中央から割れたものをヘラ状に再利用したものと推定される。

W75は広鎌の未成品で、長さ27cm、幅18.5cmを測るものである。内面は平坦で、上端に突帯を削り出そうとした痕跡は認められない。外面には中央やや上方に、平面が略三角形を呈す加工途中の隆起が認められる。

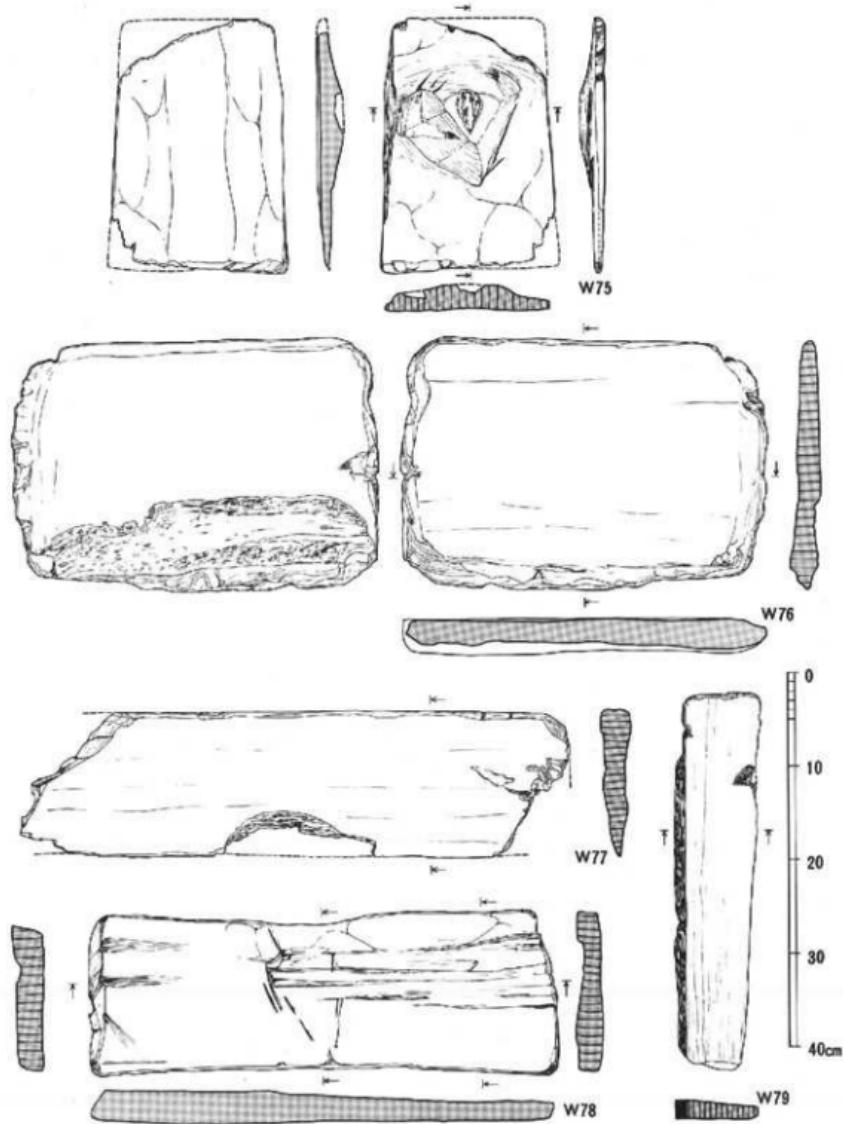
W76は長さ39.1cm、幅26.4cm厚さ3cmを測る板状の未成品である。全体に磨滅が著しい。

W77・79・80はミカン割り段階のもので、W79には樹皮が残存している。

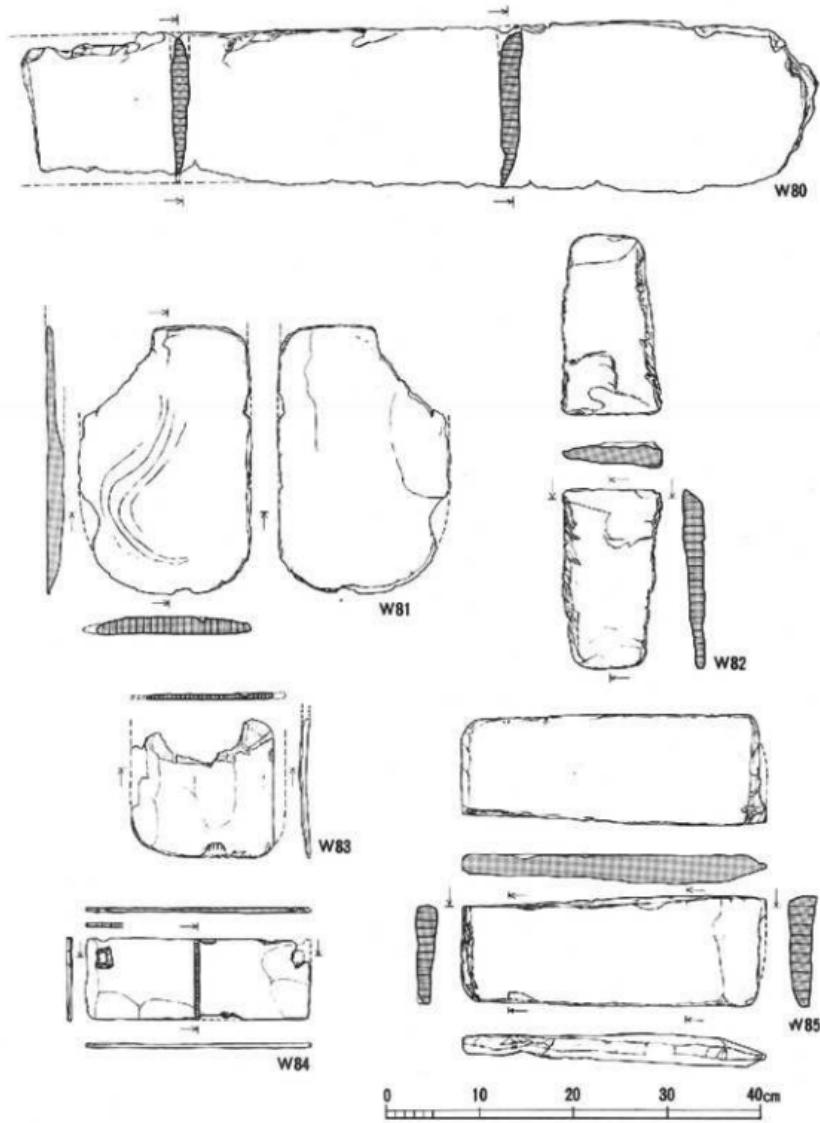
W78は長さ50.1cm、幅17cm、厚さ3.5cmを測るもので、各辺には刃物痕跡があり、両面には手斧によって肌が整えられている。ミカン割り段階から次の段階へ進んだものと言えよう。

W82はかなり磨滅しているが、両木口には整状工具によったと考えられる切断痕が認められる。これは木取りの際の余材と考えられる。

W81・83は着柄跡の部分の可能性も考えられる。



第127図 錘・板状未成品実測図(18) 1:6



第128図 板状未成品実測図(19) 1:6

W84は長さ24cm、幅9cm、厚さ0.5cmを測る板状の木製品で、上端両隅に一辺1.5cmの方形貫通孔が穿たれている。上端右側隅は欠損しているが、左隅の上辺には方形孔に平行する形に削り込みが施されている。

W85は長さ32.6cm、幅11.6cm、厚さ2.9cmを測る板状の未成品である。一方の木口は斜めになるよう削ぎ下されている。

鋤（第129図～第133図 図版137～140）

ここで、木製鋤として扱ったものの中には、柄、鋤身ともに一本から彫り出す長柄鋤と称される西川津遺跡分類の鋤A類と鋤身と柄を別木で作り、後で組み合わせる鋤B類が出土している。

西川津遺跡では平面形がナスピの縦断面に似た形状を呈すナスピ形鋤と称されるものをまとめて鋤B₁としている。この種の鋤は身の下半が(a)一枚の舌状を呈するもの、(b)中央に二等辺三角形の透し孔をもつもの、(c)2支に分岐するもの、(d)3支に分岐するもの等様々な形態がある。そこで前記したような特徴を明示するために、鋤B₁の末尾にそれぞれa～d文字を付すこととした。

ただ問題となるのは、ここで鋤として扱ったB₁が柄の挿着次第では鍬ともなりうるものであって、その使用方法が限定しないことである。

現状では山陰地域で「L」字形を呈す膝柄が認められないで、一応鍬とし扱っておいた。

B₂とされているのは、舌状を呈し、上半がやや狭くなるので、中央に綾長の透し孔があるものである。

B₃は身の中央に上方から柄を挿入するための孔が斜めに裏へ貫通しているものである。

B₄は今回新たに分類を試みたもので、方形の身の中央に柄の下端部を固定するために2つの小孔が穿たれている。

B₅も今回分類を試みた木葉形を呈すものである。

以下これらの分類に従って出土した鋤の特徴を記すことにしよう。

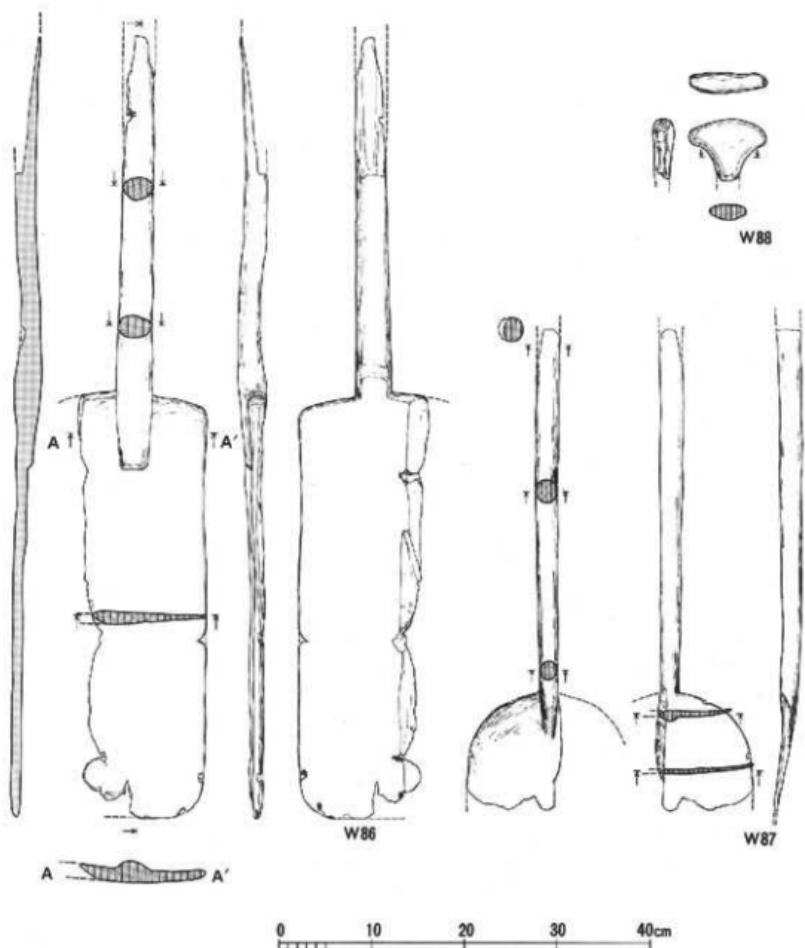
鋤A（第129図W86・87 図版137）としたものは柄、鋤身ともに一本から削り出すものである。

W86は長方形を呈す綾長のもので、身の長さ45cmを測る。肩部が水平となっているので、踏鋤と考えられる。W87は身の下半を欠損しているが、身幅は柄を中軸とし折り返した場合約20cmとなる。肩部はナデ肩で身はおそらくスプーン形であったと推定される。

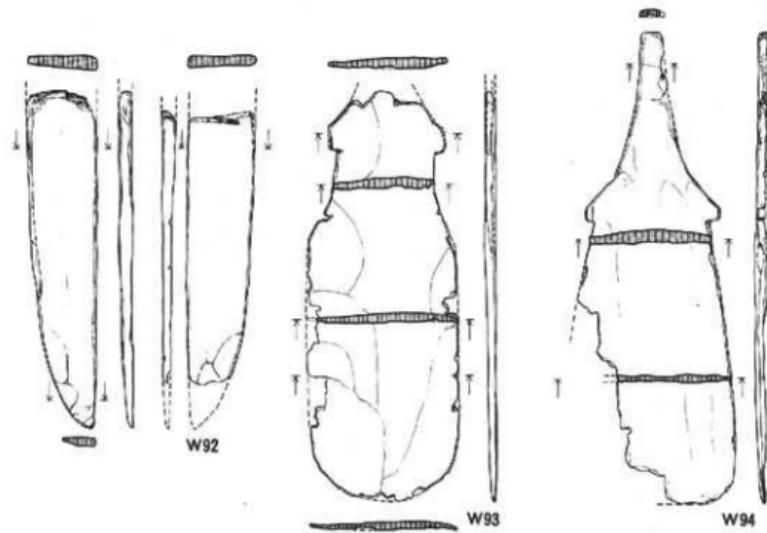
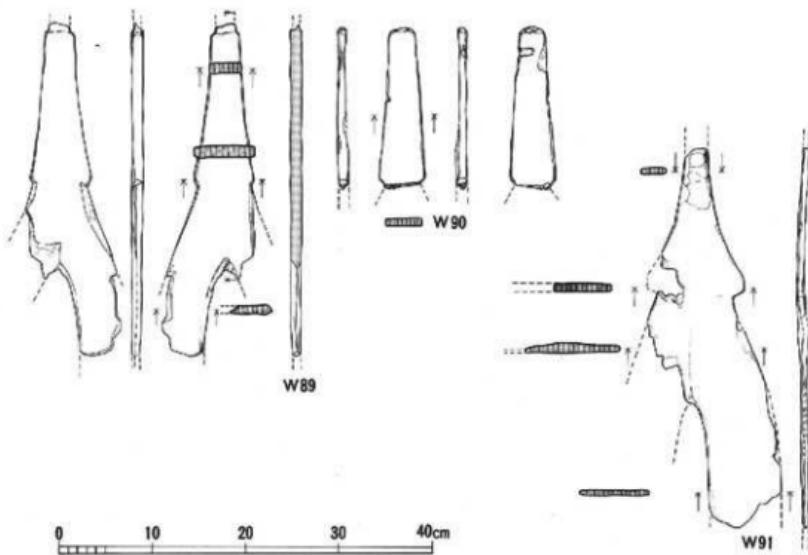
W88は柄尻の部分と考えられるものである。ただし、どの個体と組み合ひのかは不明である。

鋤B,c（第130図W89・91・92 図版138）はナスピ形鋤の身が2支に分岐するものである。W92は分離しているが出土状態や大きさから同一固体であろうと判断された。W90は鋤の柄を結束する頸部であるが、大きさ等から下半部もW89と同様な形態となるものと推定される。

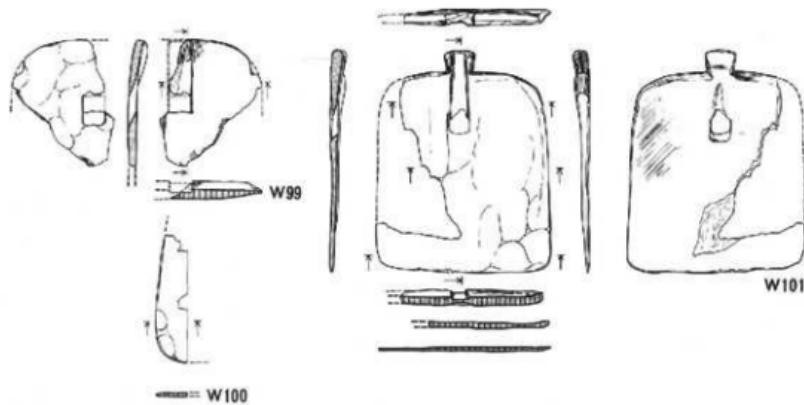
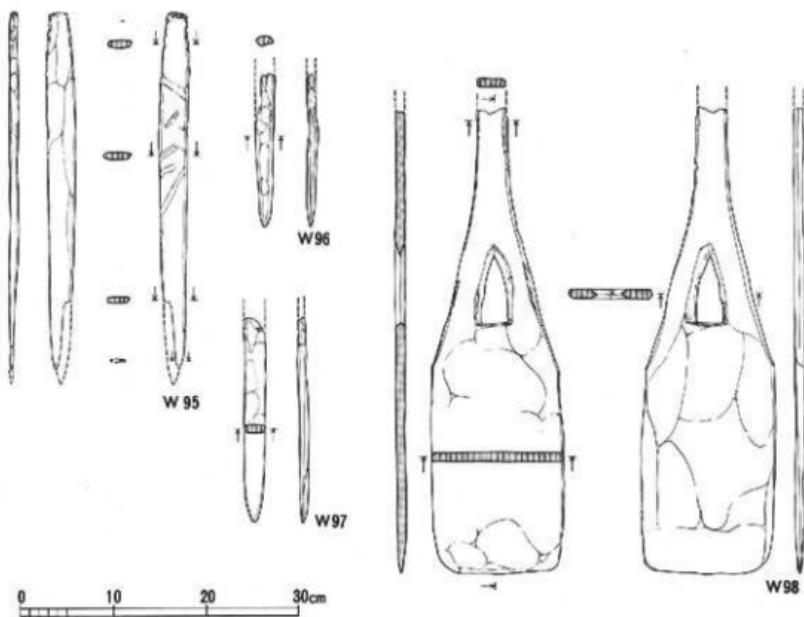
鋤B,a（第130図W93・94 図版138）はナスピ形鋤の身が一枚の舌状を呈するもので、内辺上方に



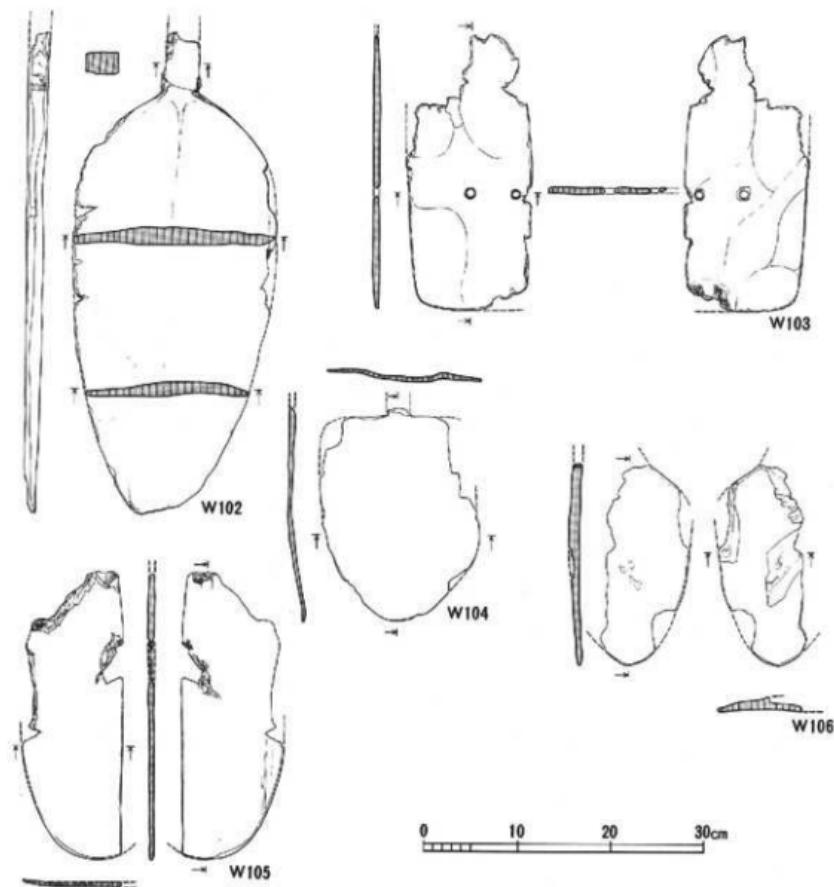
第129図 鋸A・把手実測図(20) 1:6



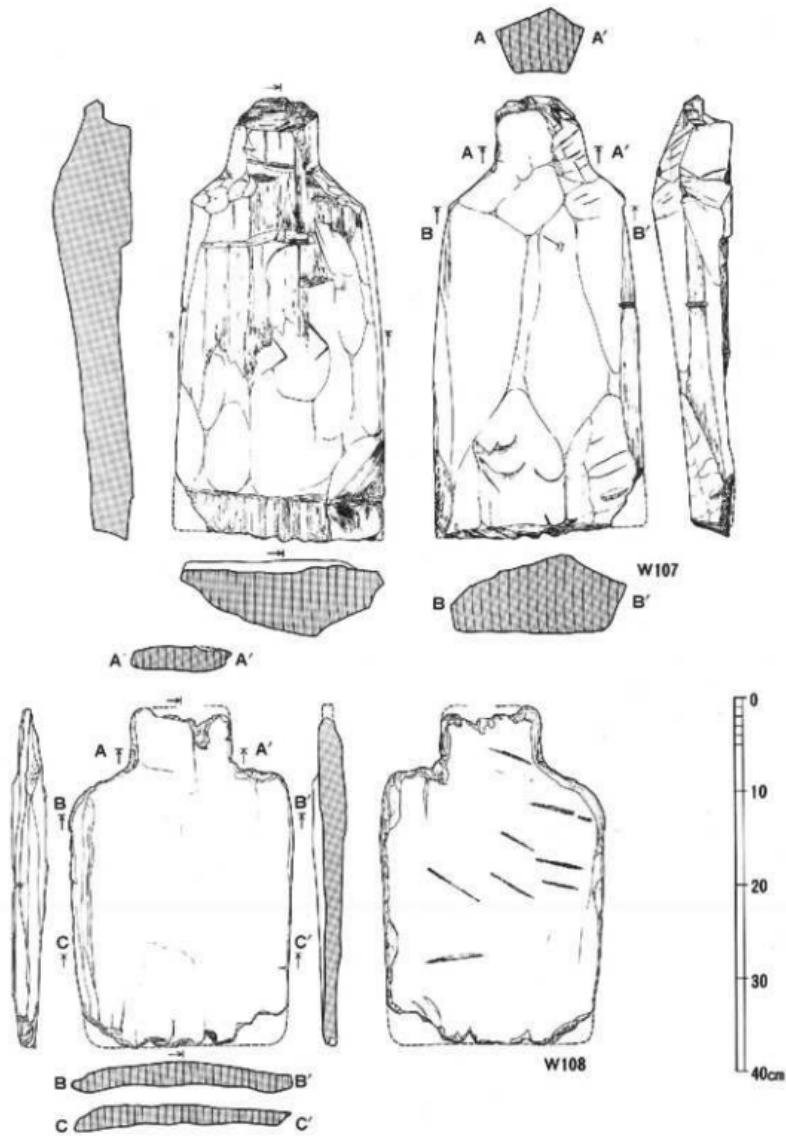
第130図 鋸B1実測図(21) 1:6



第131図 鋸B2・B3実測図(22) 1:6



第132図 鋸B4・B5実測図(23) 1:6



第133図 鋸B未成品実測図(24) 1:6

ある削り込みから下端までそれぞれ37cm, 30cmを測る。

鉤B,d (第131図W95~97 図版138) 分岐した先端部の破片である。ただしW95は上方のやや太い部分に結束した痕跡が認められることから再利用されたものと推定される。

鉤B,₂ (第131図W98 図版138) は下端部が方形板状を呈し、上半は上に行くにしたがって細く削り込まれ、ナデ肩となっている。中央よりやや上方に二等辺三角形の透し孔が認められる。

鉤B,₃ (第131図W99・101 図版138・139) は身の中央に柄を挿入するための孔が穿たれているものである。上辺がほぼ水平となる踏鉤で、両端はゆるやかな曲線を描いて下向している。W101の上辺中央には着柄軸とでも言うべき突出部が削り出されている。身の内面中央にある柄孔から着柄軸に向けて柄を固定するための施溝が認められる。

鉤B,₄ (第132図W102 図版139) は木葉形を呈すもので上端部を欠損するが、残存長51.5cm、最大幅22cmを測る。ナデ肩を呈し、着柄軸基部側面には枘を結束した痕跡が認められる。

鉤B,₅ (第132図W103 図版139) 方形板状を呈す身の中央に、柄を固定するための小孔一対を穿つものである。一対の小孔中央を中軸線と仮定すれば身幅は18cm前後であったと推定される。

その他の鉤片 (第131図W100, 第132図W104~106 図版139) これらは形状等から鉤の一部と考えられるが小片であり、分類のきめてを欠くものである。W106は鉤B,₃のような形態となる可能性もある。

鉤B未成品 (第133図W107・108 図版139・140) 鉤未成品の整形段階に入ったものである。W107は各面に粗い手斧痕が残存している。横断面は三角形を呈す。上端部は着柄軸を削り出すための突起が認められる。

W108は前者と比較すると全体に均等な厚さとなっている。両者は今の形状からすると鉤B,₃あるいは鉤B,₅になる可能性が考えられる。

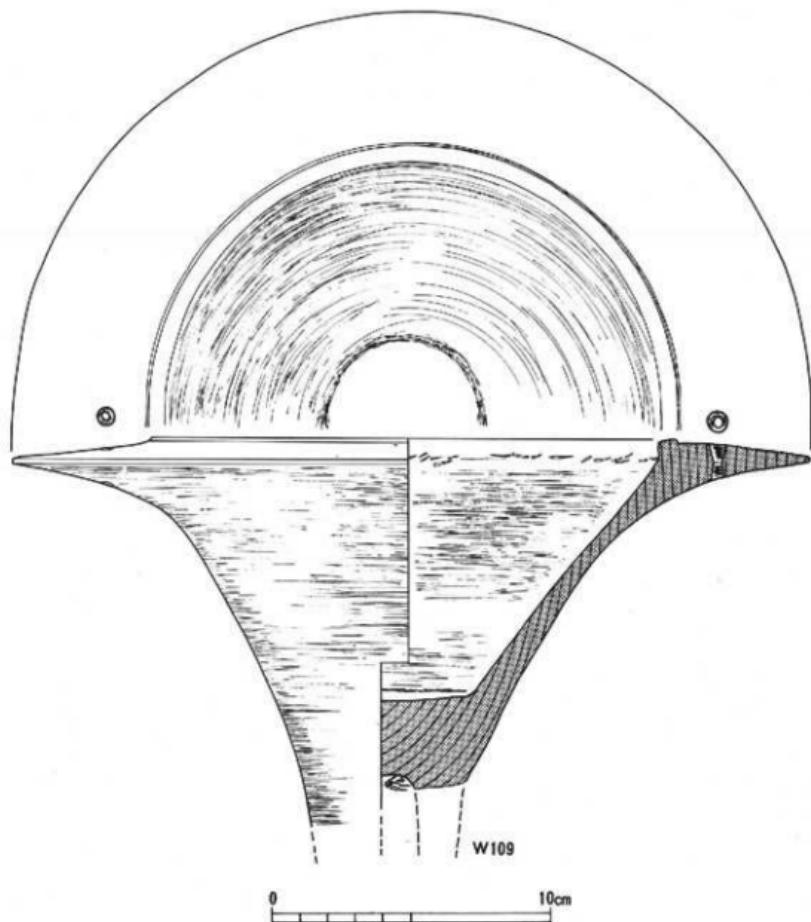
容器・飲食具 (第134図~第137図 図版140・141)

容器類としたものは食生活に関係すると推定される器物である。

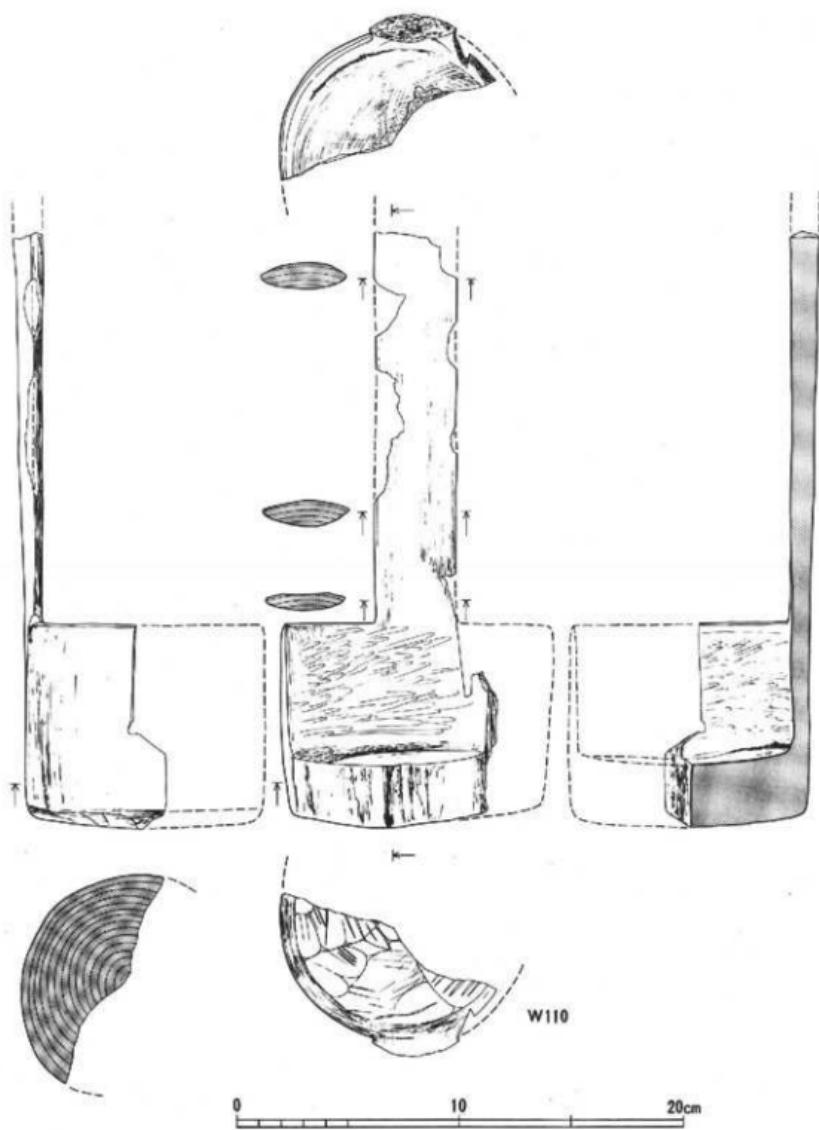
高环 (第134図W109 図版140) 逆円錐形を呈す環部である。¹¹脚であるところの下半部を欠損しているが、口縁部径28.5cm、残存高14cmを測る。口辺部には幅4.5cmの平坦な縁がめぐらされている。この縁の内側には幅1.4cmの突帯がめぐらされ、アクセントとなっている。前記した口辺部にめぐらされた縁上面には相対する小孔が2孔貫通している。この小孔は上下2方穿孔で、径1~1.4cmを測る。

器内は底部が5cmとやや厚いのに対し、他は比較的均等で約1.5cmを測る。内面には横方向に細かい刃痕がめぐる。一部に企みが生じているものの上面観は正円に近い形状を保っている。ここで注意しておかなければならぬのは内外面とも縦方向の器面調整の痕跡が認められないことである。

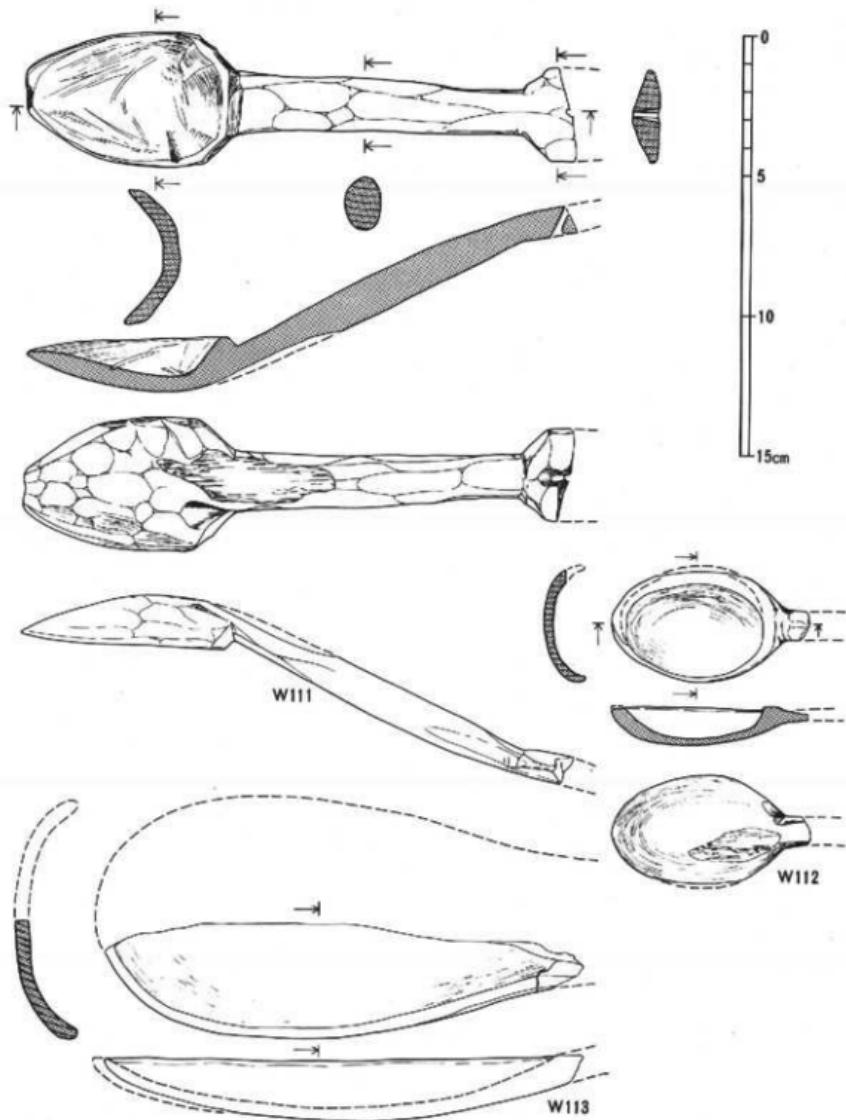
この点については後で他の容器と比較してみたいと考えているがロクロの使用を示唆する資料である。



第134図 高環実測図(25) 1:2



第135図 构子実測図(26) 1:2.5



第136図 鰐実測図(27) 1:2

杓子 (第135図W110 図版140) 木取りは芯持ち材を縦木取りとするもので、円筒形の身をもち、柄は縦方向に付く形となっている。柄の上端及び身の一部を欠損しているが残存高26.5cmを測り、口径は10cm前後であったと推定される。身は深さ6.5cm、器肉は0.4cmを測るが、底部厚は3cmとかなり厚くなっている。身の内面側壁には幅0.2~0.3cmを測る刃物痕が横方向に走っている。側壁下方及び内面底部にはワイヤー・ブランシで引っ搔いたような擦痕が認められ、底部付近の器面調整作業が困難であったことをよく示している。底部裏面は中央部がやや高くなっている。放射線状に削り加工時の稜線が認められる。身の外面及び柄は縦方向に入念な研磨が施され、刃物痕は認められない。柄は身の側壁から垂直に上方に伸びる。上方に行くにしたがって幅と厚みをまし、断面はレンズ形を呈す。

匙 (第136図W111~113 図版141) いずれも平面倒卵形あるいは船形を呈す身をもち、横方向にのびる柄が共木から削り出されたものである。

W111は身が平面倒卵形を呈すもので、凹部には粗い刃物痕が残存していることから、器面調整の段階までいっていないものと判断された。柄は尻の部分を欠損しているが残存長12cmを測り、断面は梢円形を呈す。柄尻は楔形に開き、その中央に径0.2cmを測る円形孔が上面から下面へ貫通している。

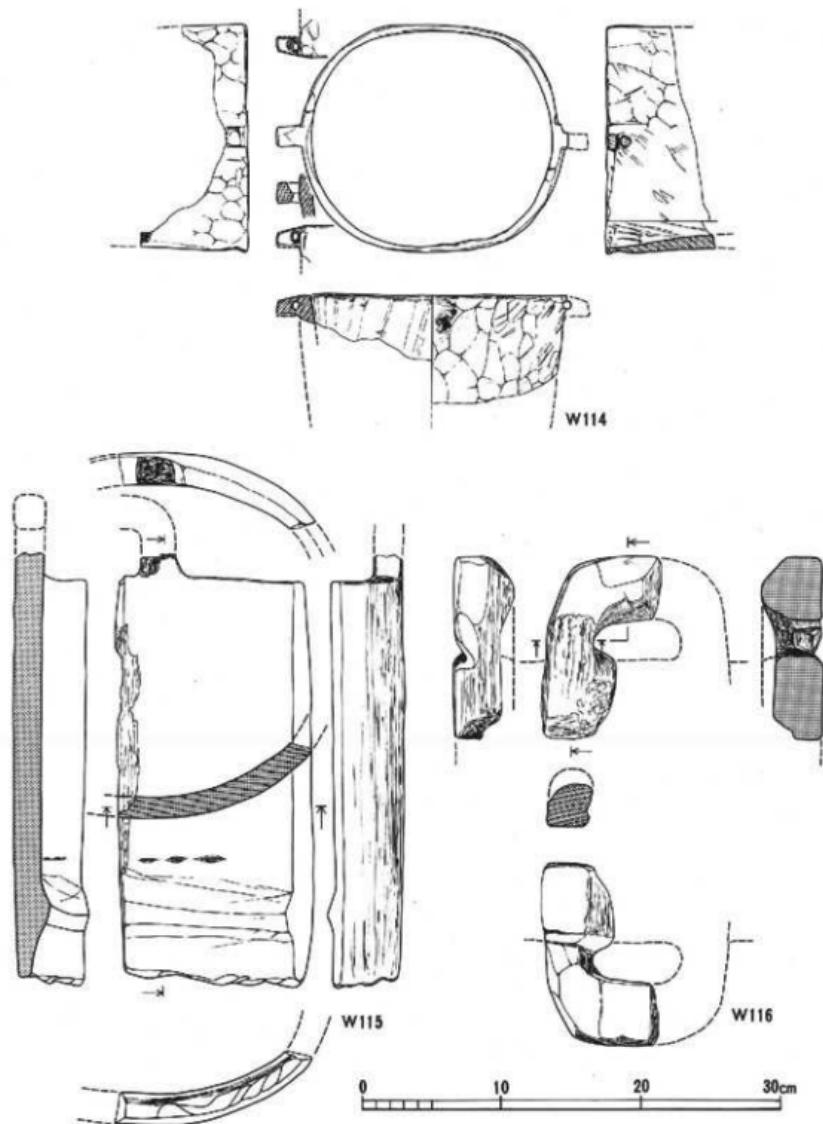
W112は柄を欠損し、身のみのものである。身の長さ6cm、幅4cm、深さ1cmを測る。実際に使用されていたものと思われ、加工痕は認められない。柄の基部は幅1cm、厚さ0.5cmを測る。

W113は船形を呈す身をもち、身から伸びる柄は柄尻に向うにしたがって幅は狭くなり、厚は逆に増すものである。破面が主軸線であると仮定すれば、身の最大幅8~9cm、深さは1.8cm前後であったものと推定される。

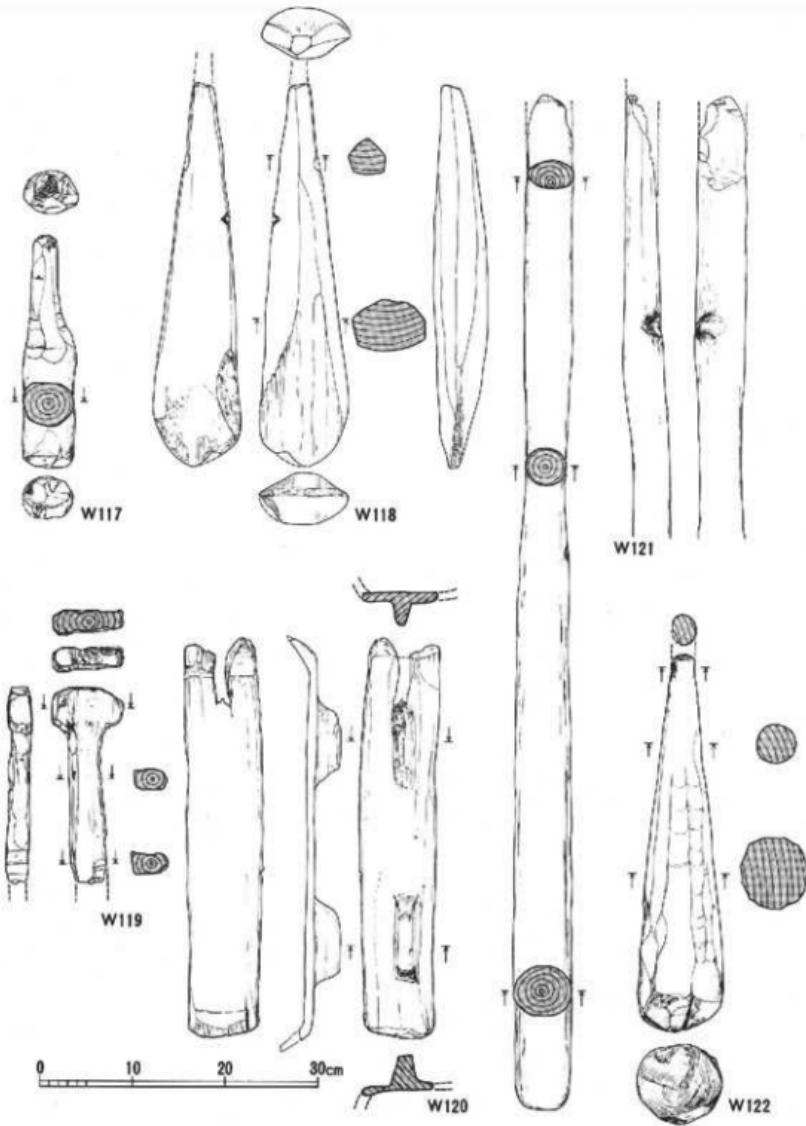
割り物桶形容器 (第137図W114・115 図版141) いずれも一本を剖貰いた所謂の桶形容器である。

W114の口径は長径19cmを測り、平面は梢円形を呈すものである。腹部下半を欠損しており、残存高は約8cmである。長径方向の口縁外面には将棋の駒様の突起が削り出され、その側面中央に小孔が貫通する。これは径0.5cmを測り、両面穿孔となっている。内面には縦方向に走る變状の痕跡が認められる。これは縦方向に刃物を移動させた後、研磨を施したものと推定される。外面には削り痕が重複し不正形な亀甲紋状を呈す部分がある。木取りは横木取りである。

W115は全体の1/8が残存するのみであるが、形態から桶形容器と判断したものである。身の高さ28cm、推定口径30cm前後であろう。柾目の縦木取りで、口縁部には逆「U」字形の把手が削り出されている。内面の下方には断面略三角形を呈す突帯が横方向に削り出されている。この突帯に接する形に円板状の底板が固定されるのであろう。全体に磨滅が著しく、外面に補強等の痕跡は認められない。



第137図 桶形木製品実測図(28) 1:4



第138図 砧・把手・盤・杵実測図(29) 1:6

W116は把手と推定したものである。全体に磨滅が著しく、破面も加工面と判断がつかないほどである。大きさこそ異なるが、W115の口縁部にはこのような把手が削り出されたものと考えられる。

その他の用具

これまで列記したものは形態等から、その用途を推定するのが、比較的容易なものであった。しかし以下に示すものは部位や用途の不明なものもかなり含まれている。そこで使用痕、加工痕等を中心説明を加えることとした。

横槌（第138図W117 図版142） 径6cmを測る芯持材を長さ25cmほどに切り、それの一方をやや細く削り握り部とするものである。

ヘラ状木製品（第138図W118） 下端を貯刃状に加工するもので、上方へ行くにしたがって徐々に細くなっている、断面は略五角形を呈す。

把手状木製品（第138図W119） 芯持板状材の両側辺を削り込むことによって、上端を櫛形に整えている。

盤状木製品（第138図W120） かなりの部分を欠損しており全形はうかがえないが、木口両端はゆるやかに外反しており、裏面には対して逆台形の脚部が削り出されている。このことからすると、方形の盆に逆台形の脚を付けたようなものが想定される。

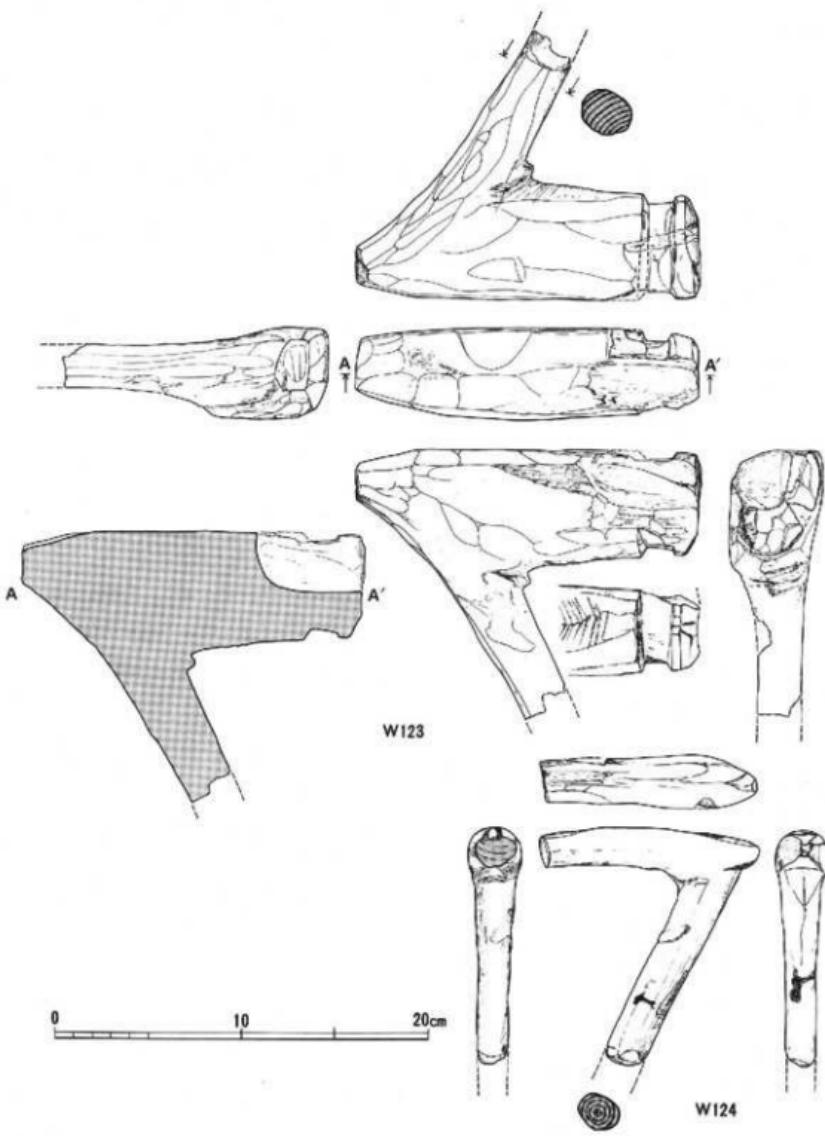
堅杵（第138図W121 図版142） 残存長109cmを測る芯持材を用いた堅杵である。上端は欠損しているが、下端は乳棒状を呈す。下端は径6.5cmであるが、下端から上方へ向って60cm～70cmあたりが最も細く4cmを測り、上方に行くにしたがって再び太さを増す。この細くなった位置が握りの部分であろう。

上端部は欠損しているので形状は不明であるが、破面付近ではやや扁平となっている。上端破面より25cm下方に指先で押されたような凹が認められる。

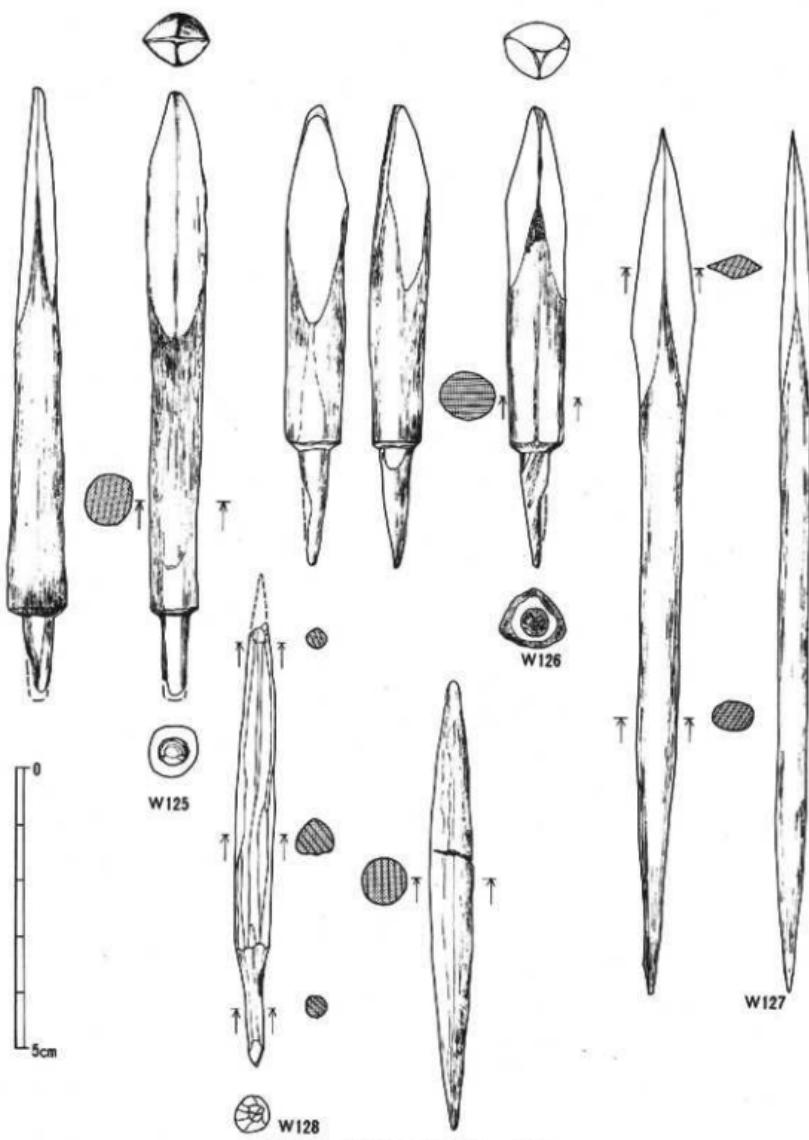
擂り粉木状木製品（第138図W122 図版142） 上半部分を欠損する残存長40cm、下端径9cm、上端径2.5cmを測る円錐形の木製品である。下端部の木口は乳棒状を呈し、著しい磨滅が認られる。上端から下方10cmにかけては手ずれによって滑かとなっており、断面も正円形に近い。しかし、この下方は研ぎ痕が認められ、断面は多面形を呈す。用途としてはW121と同様堅杵の一種であろうと考えられるが、下端から握りまでの間が短いこと、握り部分と下端部の径の差が大きいことからこのような名称とした。

斧柄（第139図W123・124 図版142） いずれも木の幹と枝の股を利用して斧台と握部を作り出したものである。

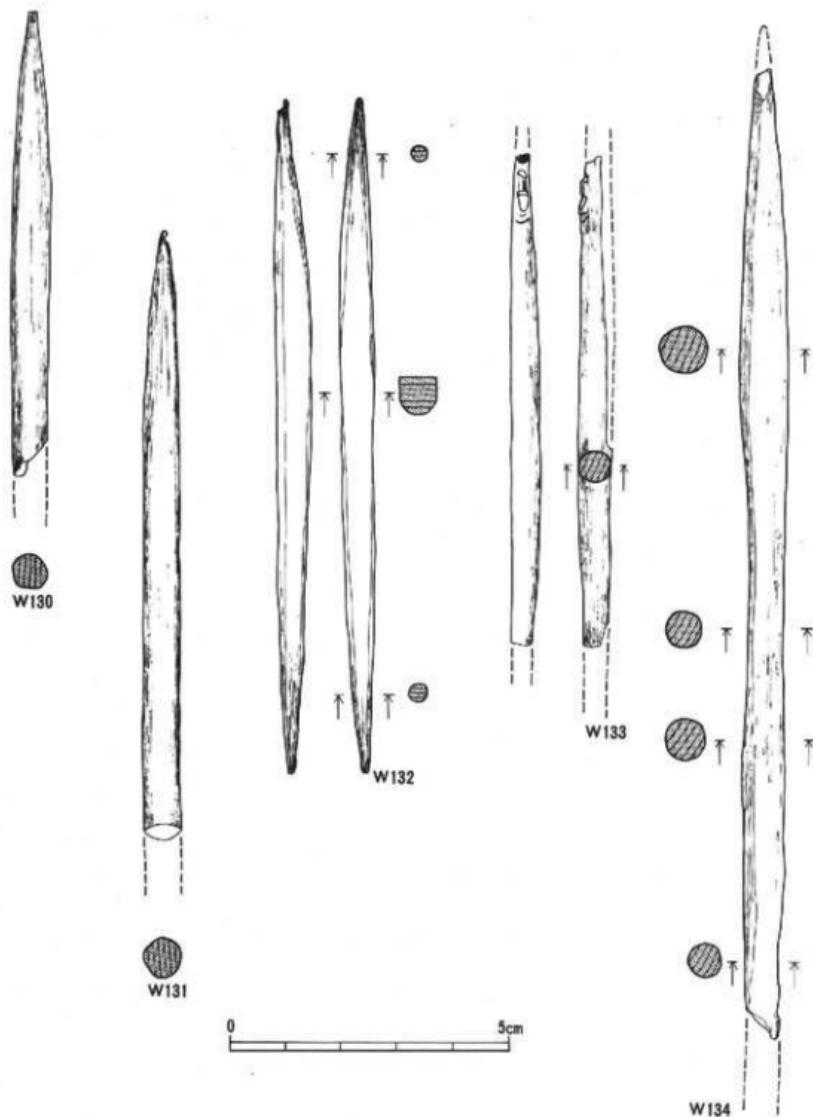
W123は抉入石斧用の斧柄と考えられるもので、斧台長18.5cmを測り、握部は基部から下方8cmの位置で破損している。斧台と握把の内角は70度を測る。握把部は長径2.6cm、短径2.3cmを測り、



第139図 斧柄実測図(30) 1:3



第140図 木継実測図(31) 1:1



第141図 木鎧実測図(32) 1:1

破面の観察からすると木芯部を除去するまでに削り込まれており、原本の枝の径は現状の倍の太さであったと推定される。

石斧装着部は使用者から見て台部右側面から上面にかけて穿たれ、台部先端から長さ5.5cm、深さ3cmのくぼみを呈す。この部分は一般的には溝状を呈すものが多く、装着溝等の名称で呼ばれるが、この場合、台部上面から見ると右溝壁面が認められないことが注意される。現状の形態は「里田原」で手斧柄の分類が試されているが、それのⅢの上面を除去したようなものということができる²⁰(第158図参照)。

台部上面から見ると台部右側面は中央から台尻にかけて、わずかに曲面を呈し、対する左側面よりその差は大きい。側面から台部上辺を見ると中央から台尻にかけて、同様な曲面を呈すことが注意される。このような台尻に曲面をもたせるのは斧を使用して行われる研り作業には不可欠なものとされている。つまり、この曲面が存在する面が、加工対象物に接する斧台面ということができる。この斧柄は台上面と右側面の台尻に向けて曲面加工が施されており、どのような方向に刃部が装着されるのか速断しがたいものがある。見方によれば、台上面から先端部に溝を穿ちそこに石斧を落し込んで装着する「里田原」分類Ⅲの右側が破損したものとする考えもある。しかし、この斧柄の右側面は傷みが著しく、見解が分かれるのもこの点に起因しているといえる。つまり斧台を先端部から見ると、右側が著しく傷んでいるといいながら、斧台と握把の中軸線はややずれている。これを「里田原」Ⅲとして装着溝右側壁が存在したと想定した場合、その分だけ右側へ斧台が偏ることとなり、前記中軸線の差はさらに大きくなる。このようになった場合、刃先を研ろうとする位置へ正確に振り下ろすことが困難となり、作業能率は低下するものといえよう。

ここではこの斧柄の台の装着部は当初のままの形態を保っていると考えておくことにした。つまり、石斧を作業内容によって横斧、縦斧いずれにも使用可能なものであったとするものである。ただし管見にふれる限り、このような形態の斧柄側は報告されていない点、さらに装着部における石斧との接する面が、左溝壁面と底面、計2面のみとなり、この程度で研り作業の衝撃に耐えるものであるか否かという点が問題として残る。

W124は木の幹と枝の股を利用して加工するもので、幹の方が斧台となる。斧台長は12cm、径約3cmを測り、握把の径もほぼ同様である。柄は基部から下方10cmの位置で欠損している。斧台と握把の内角は65度を測る。

台部は断面円形となっており、先端部もさしたる加工は認められない。握把の一部に樹皮が残存していることから、加工が完了していない可能性もある。

木鎌(第140図W125~129 国版143) 木鎌としたものは円柱状の基部をもち上端が断面菱形を呈すものと断面三角形を呈すもの他に上下端が円錐形を呈すものとがある。これらは完形に近い

ため樹種鑑定用のサンプリングはひかえたが、おそらく茎木に属するものであろう。

W125は円柱状の基部をもち、中央よりやや上方を四方からそいで尖らすもので、上端の断面は菱形を呈す。茎は明瞭な削り込みによって基部よりもやや細い太納状となっている。

W126は先端を三方からそいで、断面三角形に尖らせている。基部・茎の形態はW125とはほぼ同様である。

W127は先端部を四方から、そいで尖らすもので、断面は菱形を呈す。茎と基部の境は不明瞭で下端へ行くほど徐々に細くなり、円錐形となつて取まる。

W128は先端部を若干欠損しているが、原形をうかがうことができる。上半部は円錐形を呈し、縱方向に加工の稜線が認められる。加工に際しては上半を円錐形に尖らした後、下端2cmの位置からやや細く削り込み、基部の加工に移っている。

W129は両端を円錐形に加工するもので、上下の判断は困難であるが、やや太い方を先端と考えた。

(第141図W130～134 図版143) これらは木鐵というよりもヤス状木製品とした方が良いのかかもしれない。ただし、W130・131が前記したW127の基部から茎にかけての部分である可能性も持てないので刺尖具としてここに含めて扱うこととした。

W130・131は一方を欠損しているが、残存部の形態は円錐形を呈す。上下の関係は不明である。

W132は両端を円錐形に尖らすもので、中央部分は略台形を呈す。

W133は上下端とも欠損している。断面は円形を呈し、中央がやや太い。上方破面近くに小さな刻みが認められる。

W134は上端の一部と下端を欠損しているが、残存長17cmを測る比較的長いものである。全体に断面は正円形に近いもので、先端部と考えた上方に太い部分がある。

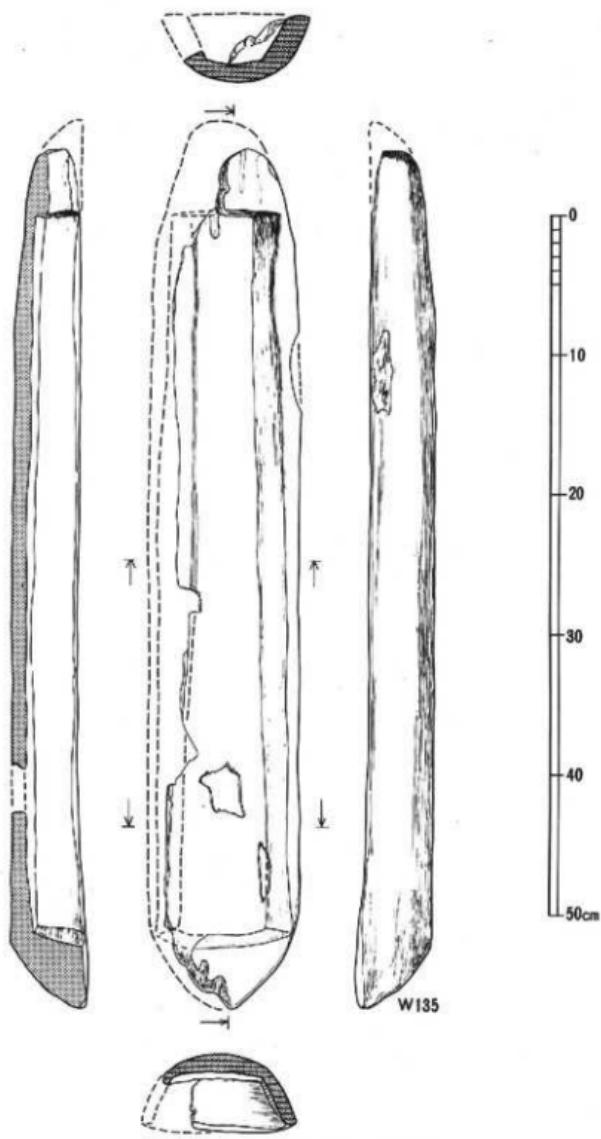
舟形木製品(第142図W135 図版143) 舟と艤及び左舷の一部を欠損しているが残存長61.5cmを測る。船体の断面はいずれも半円形を呈す。舷から底までの深さは一応均等で、4cmを測る。

鳥形木製品(第143図W136・137 図版143) 当初は杓子の把手部かと考えたが、下方が徐々に開くことから、鳥形木製品の頭部から頸部にかけての部分と推定したものである。^{III}

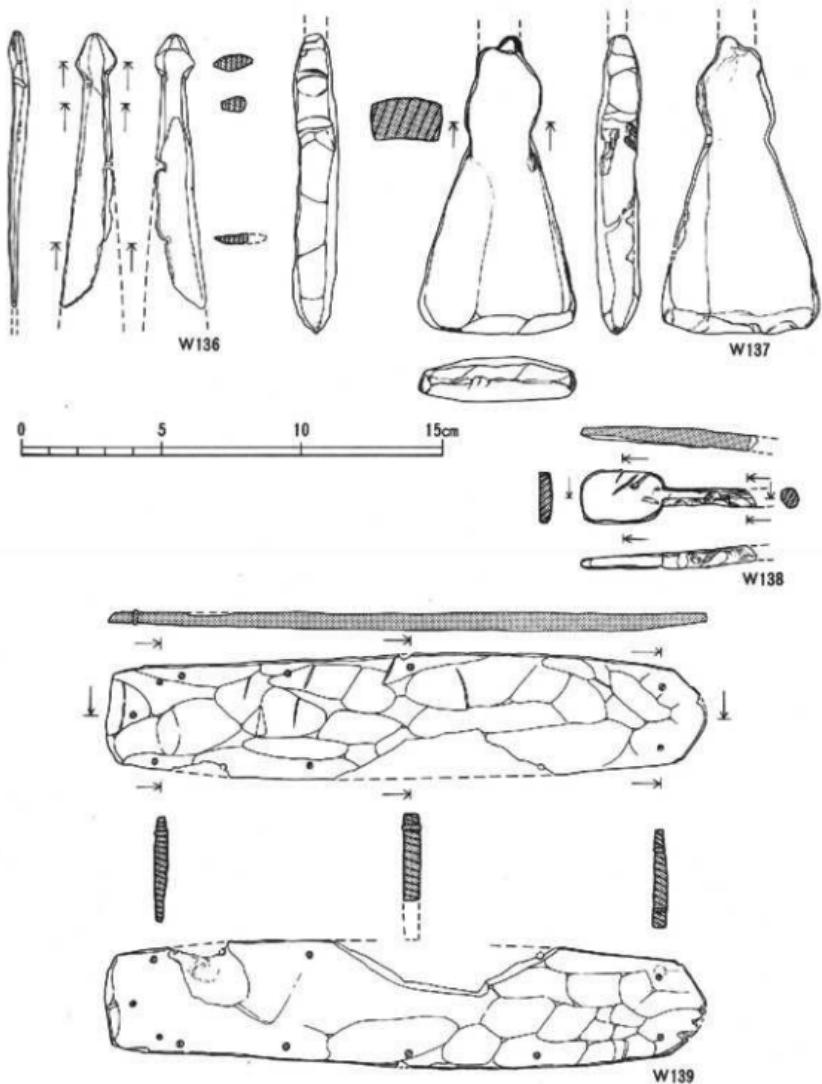
W137も鳥形木製品の一部と推定したもので、円形に近い洞と、撥形に開く尾の部分からなっている。同一個体ではないが、W136のような形態の頭部が付くのであろう。

匙形木製品(第143図W138) 小判形を呈す一端から細い棒状を削り出すもので、用途は不明である。

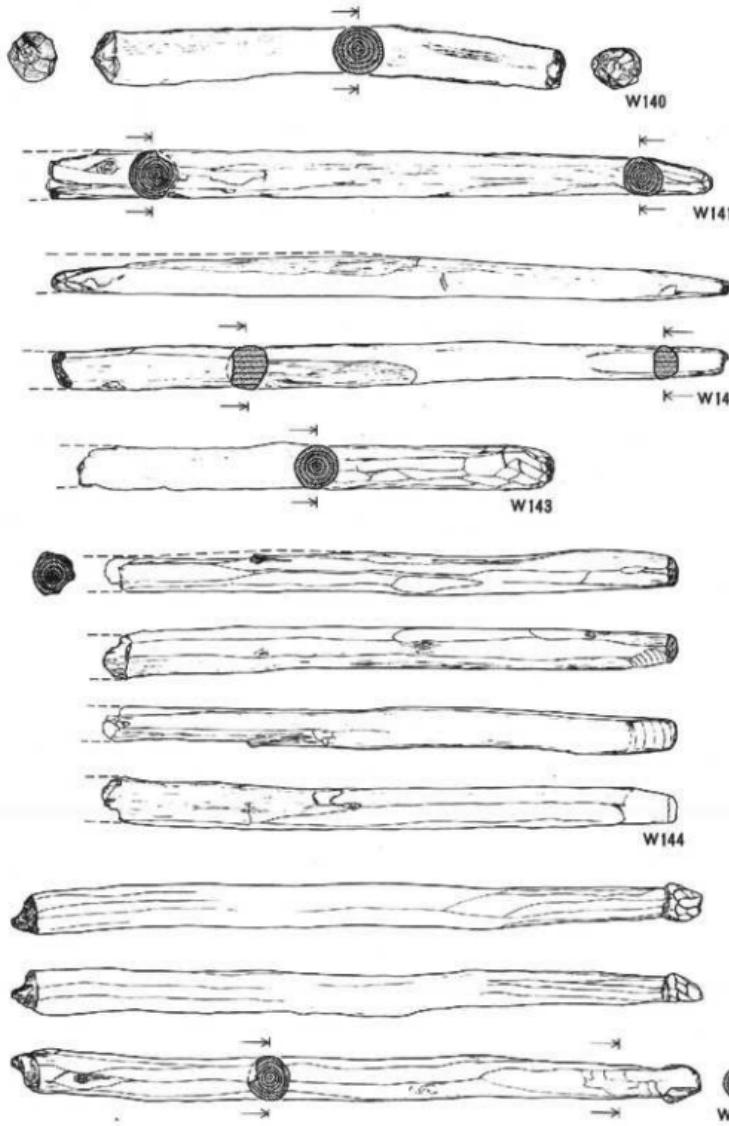
板状木製品(第143図W139) 呼称が適切であるとはいがたいが、流船形を呈す板状の木製品である。一方の短辺木口はほぼ直に、他の短辺木口は先端部をやや尖らせている。長辺の一方は一部欠損しているため不明であるが、やや胴張りする傾向を示す。表裏面とも手斧による加工痕が



第142図 舟形木製品実測図(33) 1:2



第143図 鳥形木製品・箱形木製品実測図(34) 1:2



第144図 棒状木製品実測図(35) 1:4

明瞭に認められる。この木製品には長辺及び短辺をめぐって計10本の木釘が打ち込まれており、それは表面から裏面へ貫通している。欠損した部分にも2ヵ所の木釘孔が認められるので、木釘は12本以上打ち込まれていたものと推定される。このような形で木釘が打ち込まれる例としては箱物の底板のようなものが想定される。つまり4枚の側板を底板の裏面から木釘によって固定した可能性が考えられる。

棒状木製品（第144図W140～145 図版144） ここでは棒状を呈すものをまとめてみたが、それぞれ若干の違いを記しておくことにする。

W140は径3.5cmを測る芯持材の両端を切り落し、木口を若干面取りをしている。他に加工痕は認められない。表面にはまだ樹皮が残存しているので、木使用のものかもしれない。

W141も芯持材で、先端部をやや細くし、一面を平坦にしている。このような加工は若干の差はあるものの、W142・144・145にも認められる。断面円形を呈するもの、先端を平坦にするのはその面に扁平な別材を添えることを意図したものではなかろうか。W141～145の木製品は太い方が欠損しており、元の長さは不明であるが、鋤B₄の柄のようなものの可能性も考慮すべきといえよう。

W142は伝目材を使用し、上下2面を平坦に削り、他の2面はやや丸味を持たせたままとなっている。

W143は芯持材の一方の木口を乳棒状となるよう入念に面取りしており、他のものとは用途を異にするものであろう。

W144は先端的一面を若干平坦にし、その上面は丸く削り下す。この丸く削り下された面及び先端の木口面は著しい磨滅が認められる。

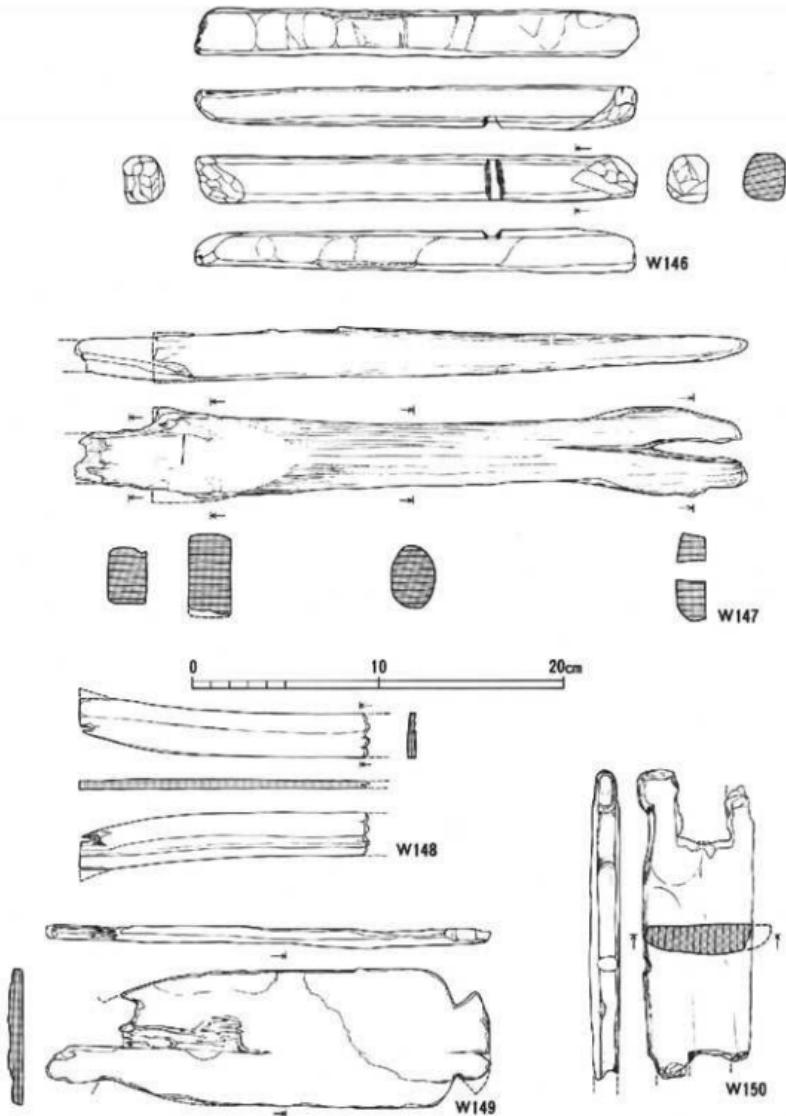
W145は芯持材の表面を縦方向に刃物をあてて面取りを施す。その後、先端部の一面を平坦になるようにそぎ下している。その上面はコケシの頭状に加工している。この部分の横断面は半円形を呈す。先端部の平坦面には板状のものが添えられ、コケシの頭状を呈す部分の頭にあたる位置で、緊縛するものであったと推定される。ただし一方の端部には木理に対して直行する形で刃物が持ち込まれた痕跡があって、この部分から折りとられている。これが当初から意図されたものか二次的なものかは判断しがたい。

W147は各面とも入念に刃物を当てたもので、横断面は略方向を呈すが梢円に近い部分もある。

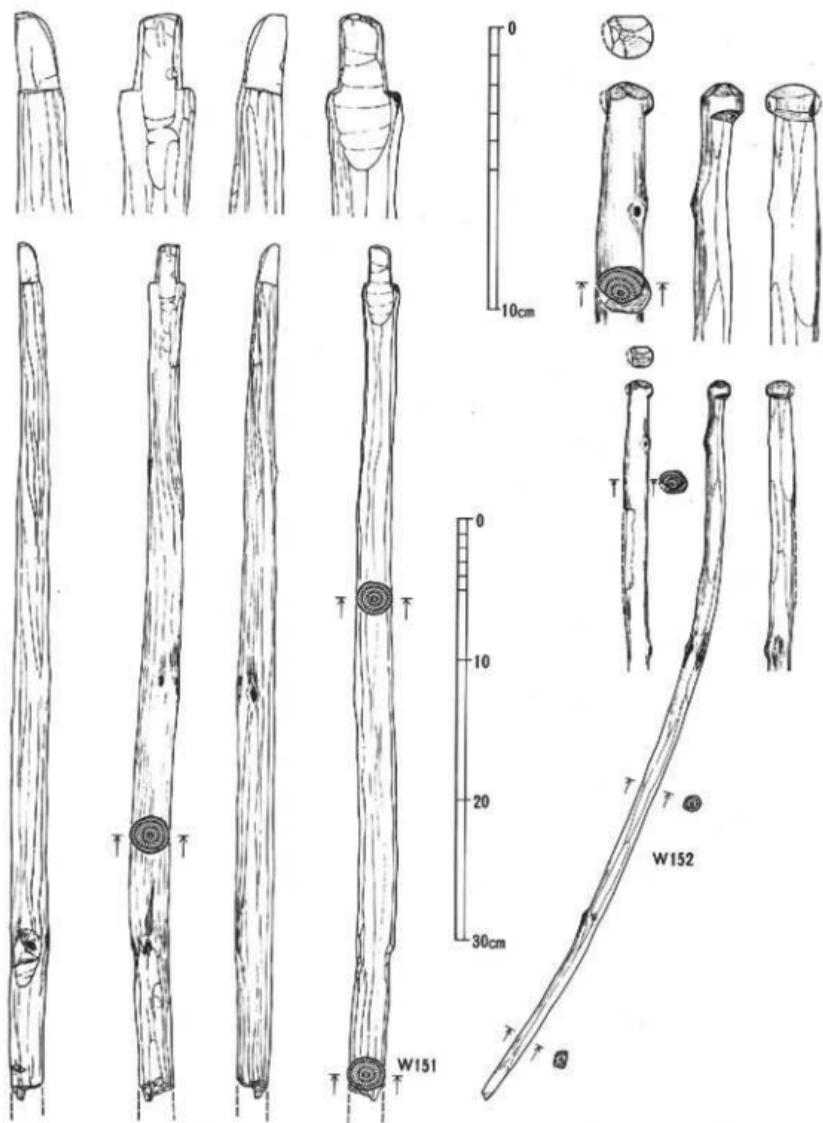
両木口はやや斜めになるようにそぎ下ろしている。上面には中央よりわずかに外れた位置に木理に直交して浅い溝が認められる。溝は断面「コ」の字状を呈す。溝内に磨滅は認められない。

W146はかなり傷みが認められるものである。平面を見ると左端部は上面、下面とも平坦になるように削られ、中央はやや細くなり、右端に近い部分で再度聞く形態となっている。

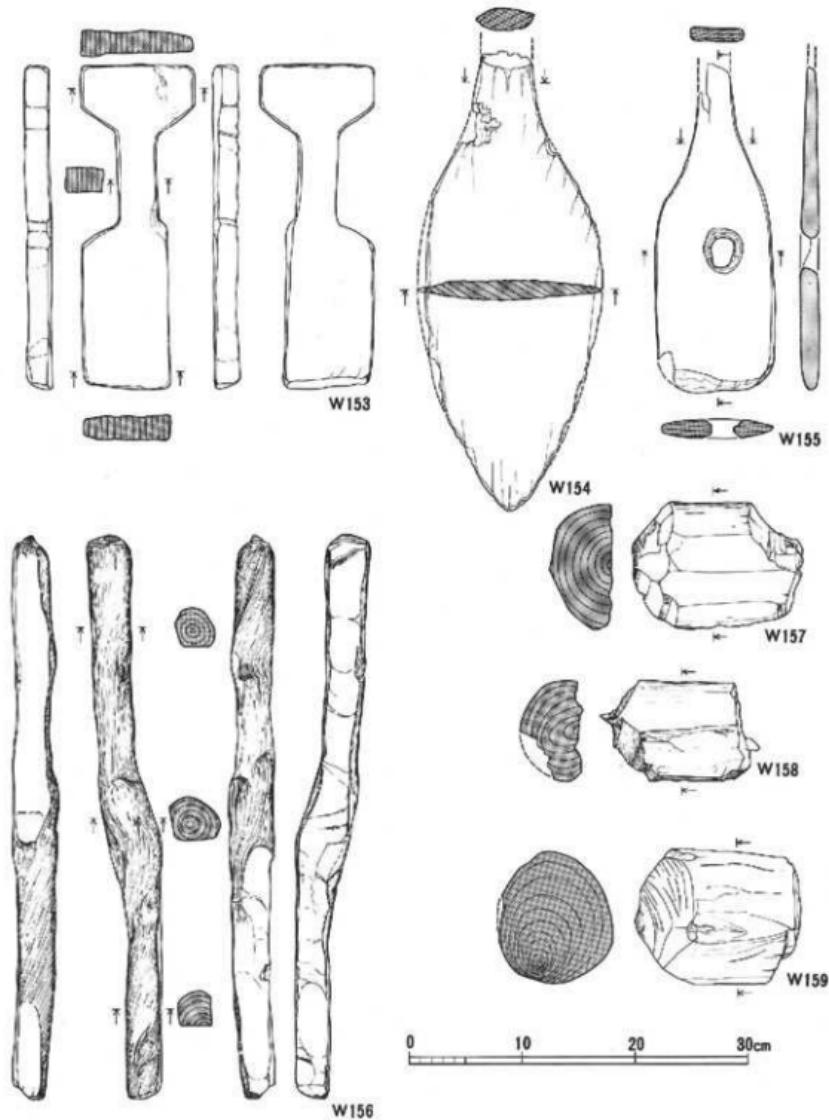
左端部は上面・下面を平坦にしているため横断面は方形を呈し、中央は梢円形、右端部は略方形



第145図 柄状木製品・板状木製品実測図(36) 1:3



第146図 弓・先端加工木製品実測図(37) 1:4 1:2



第147図 鋸形木製品・椀未成品実測図(38) 1:5

となっている。左端は傷みが著しいが二方削り込みの跡が削り出されている。他方の右端部は木口中央から木理に沿って、「V」字形に切り込みが入れられている。これはクサビを打ち込んだ痕跡と判断される。これらの諸点からすると、左端部は本体に挿入され、右端部は円柱状の短い把手に挿入されたものと推定される。この把手は（第211図W370～373 図版170W374）のようなもので、把手の歯に際してはW374のごとく、枘中央にクサビが打ち込まれたものであろう。

W148は幅2.5cmを測る板材の一端をやや反りぎみに加工したものである。一方の面に横断面「V」字形を呈す浅い溝が認められるが意図的なものか否かは判断しがたい。

W149は幅7.5cmを測る板の一端を両側面から「V」字形に削り込みを入れるものである。結果先端部は撥形に開く形態となって突出している。もう一方の端部は欠損しているが同様な加工が施されていたものと推定される。

W150は幅6cmを測る板の端部側面に浅い逆「L」字形、木口方向からは方形の削り込みがあるよう見える。しかし木口方向にある方形の削り込みが削り込みであるのか、方形の透し穴の端側が欠損した結果、現状のような形態となったのかという点は決定しがたいものがある。

もう一方の端部にも同様な加工があるので、それによっては全体の形態も左右されることになろう。残存状態の良好な側面には中央に「U」字形の浅い削り込みが認められる。使用痕であろうか。

弓（第146図W151 図版145） 芯持材の樹皮をすべて削りとて作った丸木弓である。一方を欠損しているが、残存長61cm、最大径約3cmを測る。弭の部分の加工は極めて巧である。木取りは弓身の各所に認められる枝の木口からすると、弭方向が木末、欠損とする方が木元である。このことから現存する弭は上弭である可能性が大きい。残存部分の太さを考慮すると、この弓は長弓に属するものであろう。

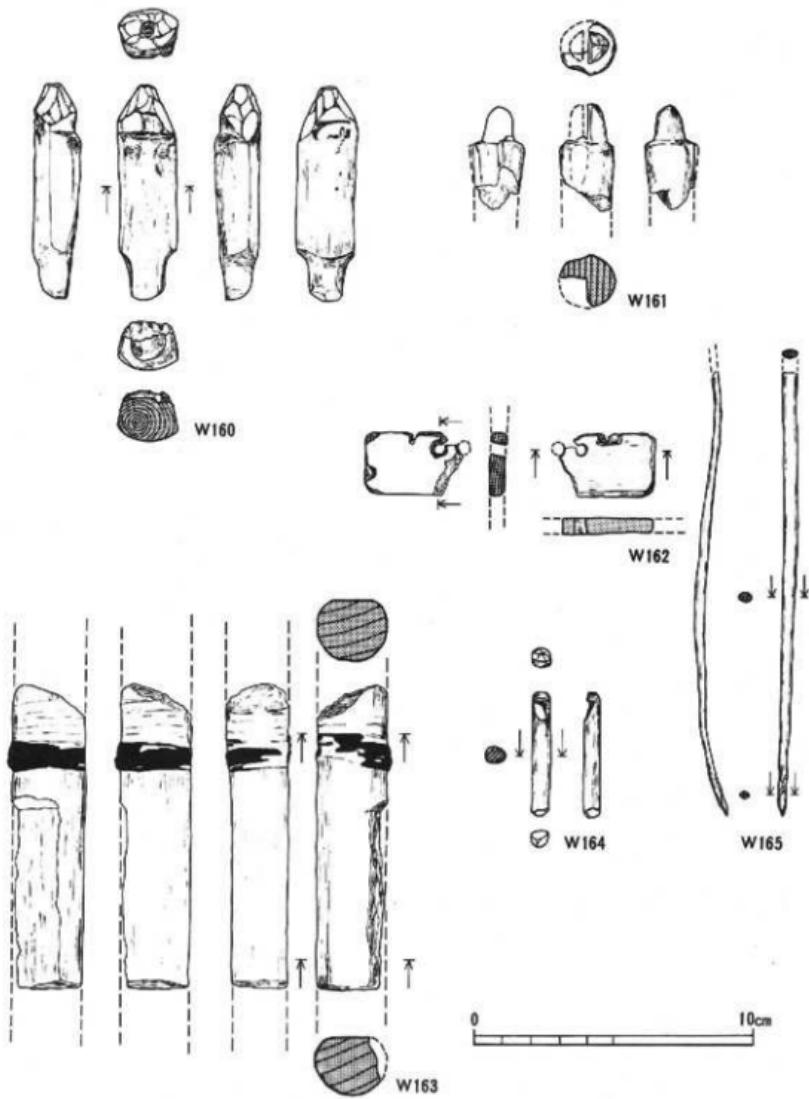
先端加工木製品（W152） 芯持の小幹を用いた、やや湾曲する木製品である。上端の外湾する側に逆「L」字形の欠取りを施し、コケシの頭状に加工している。この内湾する側は刃物をあてず、自然面のままとしている。

鋤形木製品（W153） 呼称が適切ではないが、鋤の未成品を縱方向に縮めたような形態を呈す。板状材の上方、両側面から略「コ」の字形の削り込みを入れたものである。

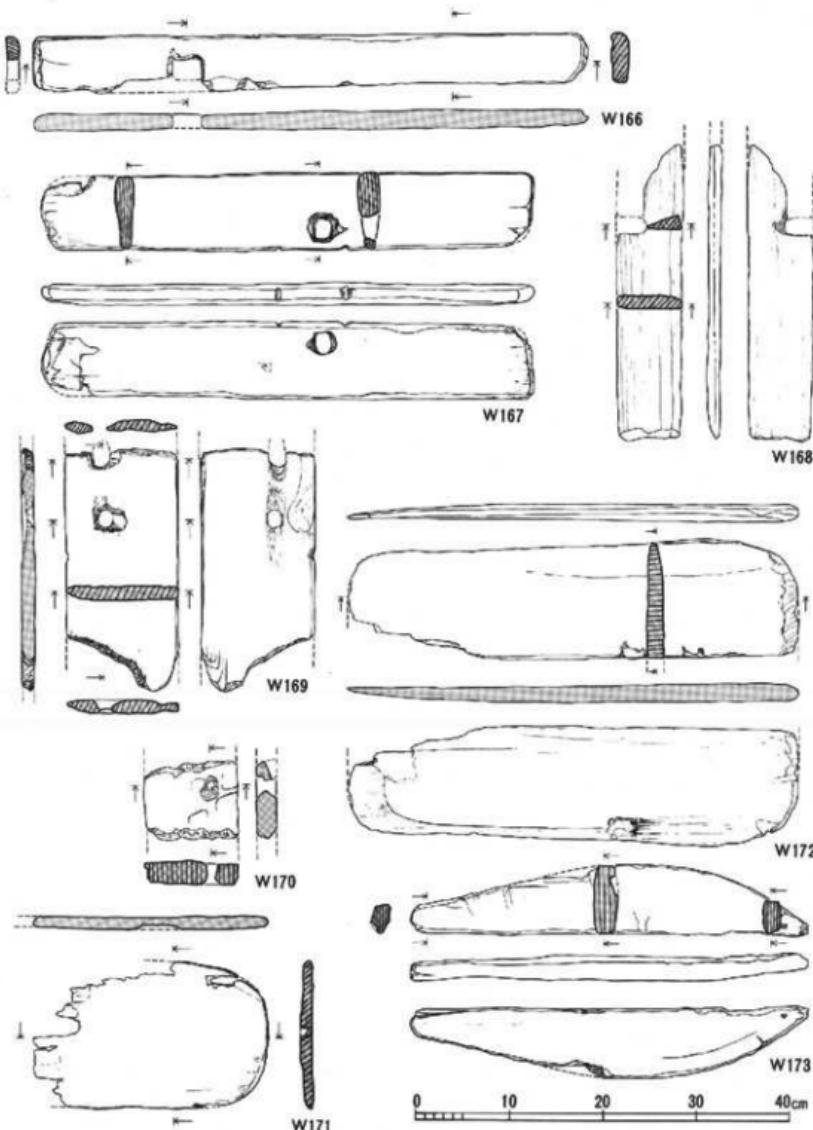
鋤形木製品（W154） 木葉形を呈すもので、W102に類似した形態をしている。しかし、肉眼では軟質の針葉樹材のように思われ、農耕具とは異なる用途のものであろう。

鋤形木製品（W155） ナデ肩の板状品で、W98に類似する要素をもつものの、これも肉眼では軟質の針葉樹材のように思われる。

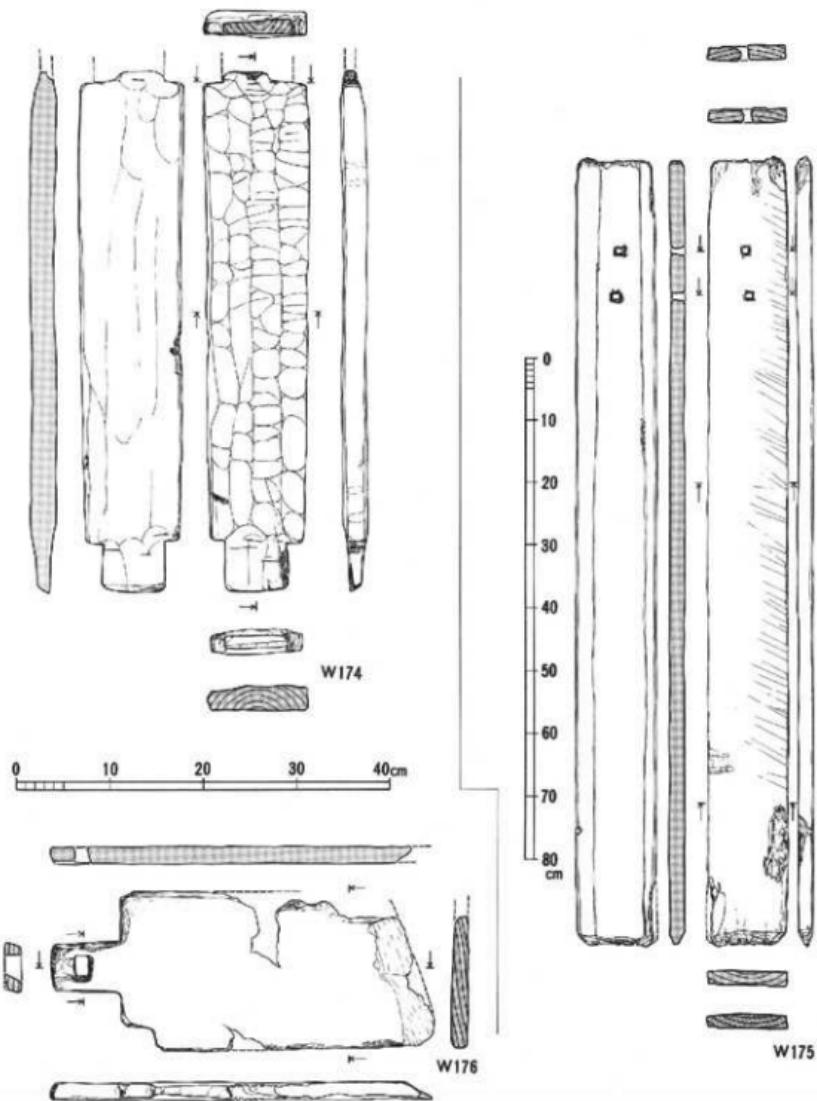
棒状木製品（W156） 径49.5cmを測るねじれの著しい小幹を加工するものである。縱方向に二面を研ぎ、平坦面を作ろうとしている。一面のみ自然面を残している。



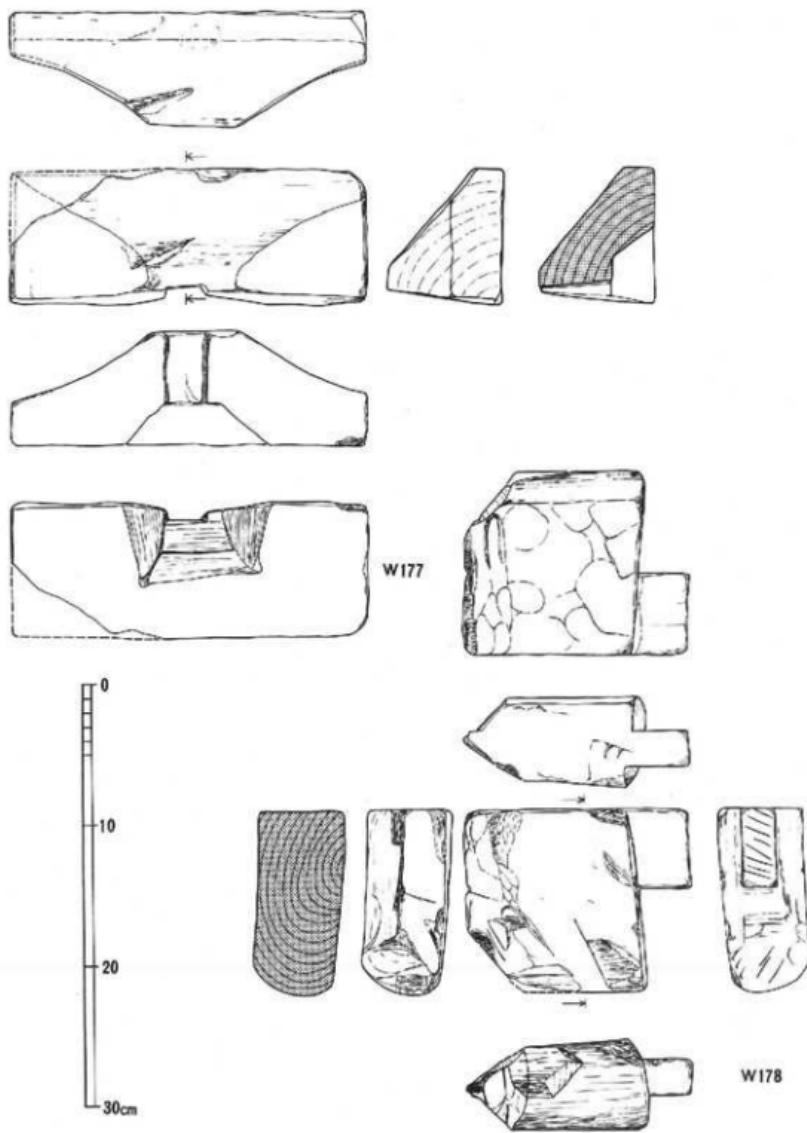
第148図 矢筈形木製品・串形木製品・桜皮巻棒状木製品(39) 1:2



第149図 板状木製品実測図(40) 1:6



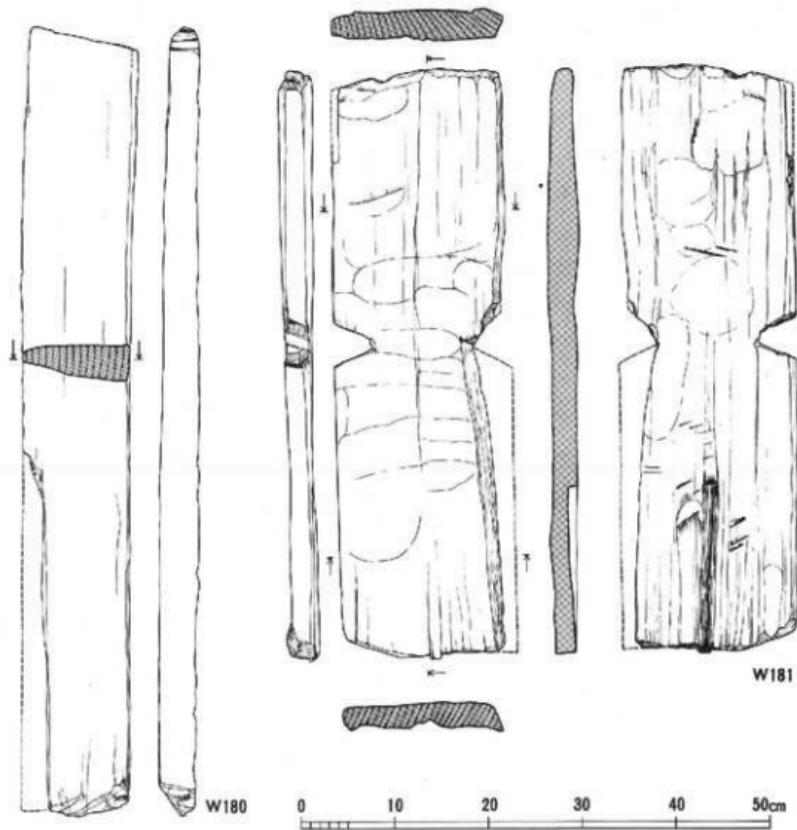
第150図 板状木製品実測図(41) 1:6 1:9



第151図 建築部材実測図(42) 1:4



W179



第152図 板状未成品実測図(43) 1:6

椀未成品（W157～158） 径11cm～9cmを測る芯持材を長さ15cm～14cmに切断し、それを半截したものである。木裏から削り込めば、小型の椀を作り出すことができるが、それに至る直前のものと考えられる。W159は前記した前工程、つまり半截する以前のものと推定される。

有舌木製品（W160） 細い芯持材を短く切り、上端を略円錐形に、下端を三方から削り込むものである。上端木表面に漆状の付着物が認められる。

根ハサミ状木製品（W161） 征目材を円柱状に加工するもので、上端の一部を、下端を欠損している。

上端をやや丸味をもたせて削り込み、中央から切り口を入れて爪を作っている。

有孔木製品（W162） 略方形板状を呈す破片で、一方に2孔が穿たれている。木表面には黒色漆が塗布されているが、銀化している。裏面は白木のままである。孔のまわりは漆が剥離しており、穿孔は漆塗布後、乾燥がかなり進んでからのものと推定される。

棒状木製品（W163） 杖材を円柱状に加工するもので、上下を欠損している。上方には桜皮を巻いており、その一部が残存する。弓の一部である可能性も考慮される。

串状木製品（W164・165） W164の破面直下には「V」字形の削り込みが認められ、下端の木口は刃物で整えられている。W165は下端を鋭く尖らす。

板状木製品（第149図W166～173 第150図W174～175 図版146） 板状木製品としたものは様々な形態や大きさがある。これらは幾つかの部分から構成されていたもの一部の可能性が高く、これまで記してきたものが単独で存在するもの多かったとは異なっている。W166・167は幅の狭い板の中央よりやや一方に片寄った位置に方形孔が穿たれているものである。W168は同様な幅の板であるが、側邊からほぼ中央まで「U」字形にえぐりが施されている。W169・170は上下とも欠損するもので、側邊の一方に寄せて梢円形孔が認められる。

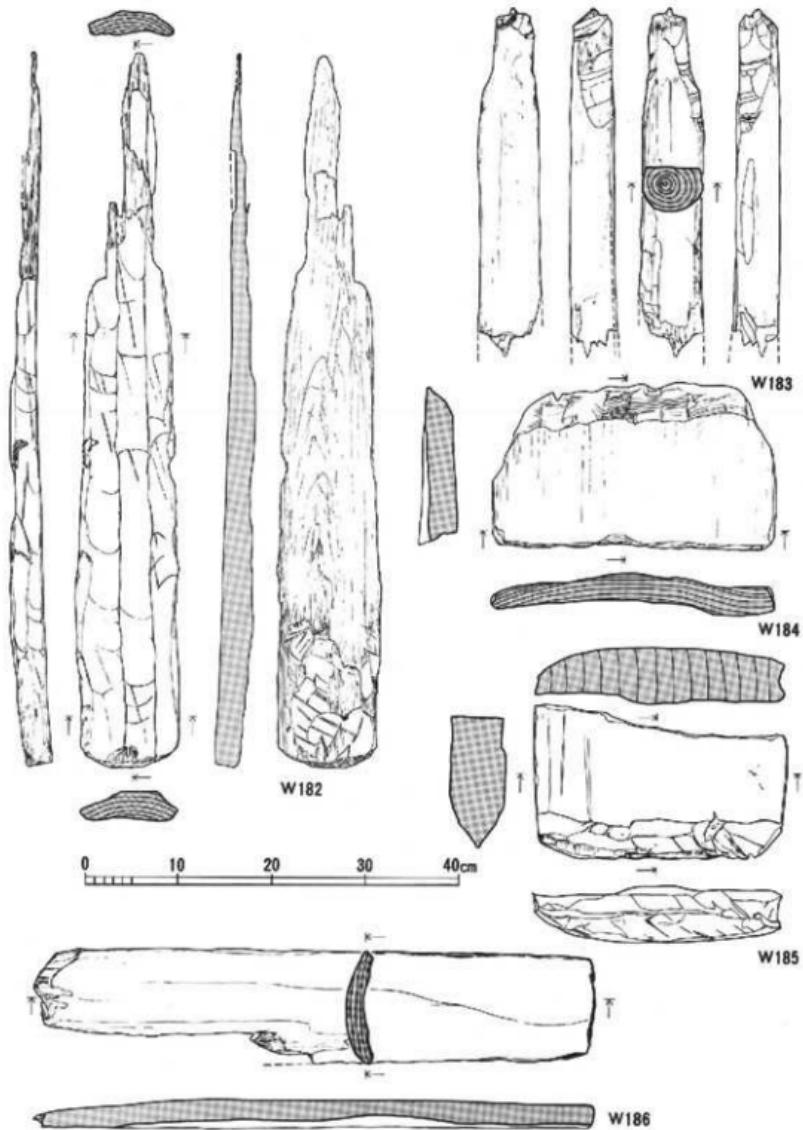
W171・172は形態としては彫を連想させるが、肉眼で見る限り針葉樹と思われ、農作業には耐えないと判断される。

W173は半月形を呈すもので、一方の端に貫通孔が認められる。

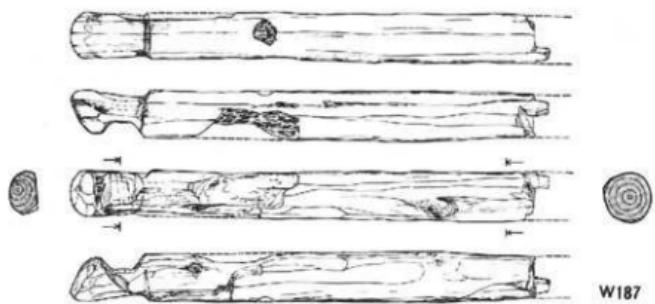
W174は一端を欠損しているが、両端に幅広の枘を削り出している。これはおそらく箱状を呈す組物の部品であろう。W176は一端に枘状の突出部を作り出している。枘の下方の胸付き部は二段となっている。一方の端部は側邊に対して約85度の角度に加工されている。

W175は一方の木口より方形の貫通孔を縦方向に2個並べて穿つもので、木裏面には手斧によったとみられる刃先痕が認められる。一方木表面には同様な刃痕は認めなかったので、こちらが表面として晒されていたのかもしれない。

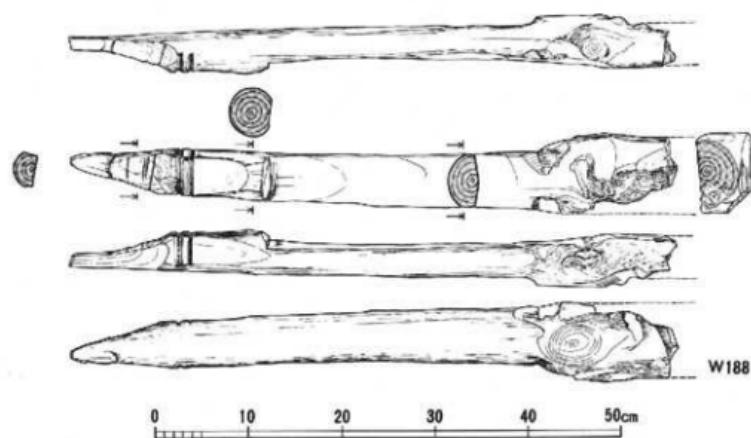
建築材（第151図W177・178 図版147） ここで建築材としたのは積極的な根拠があったわけで



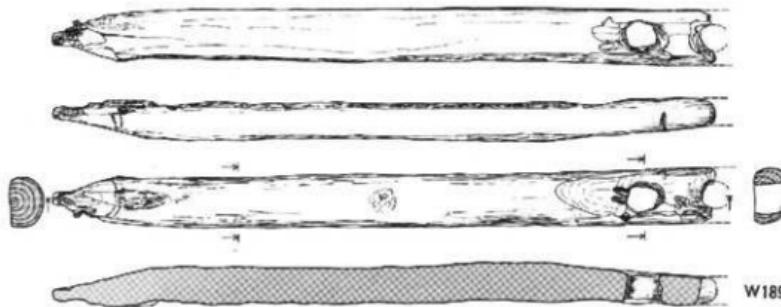
第153図 未成品・余材実測図(44) 1:6



W187

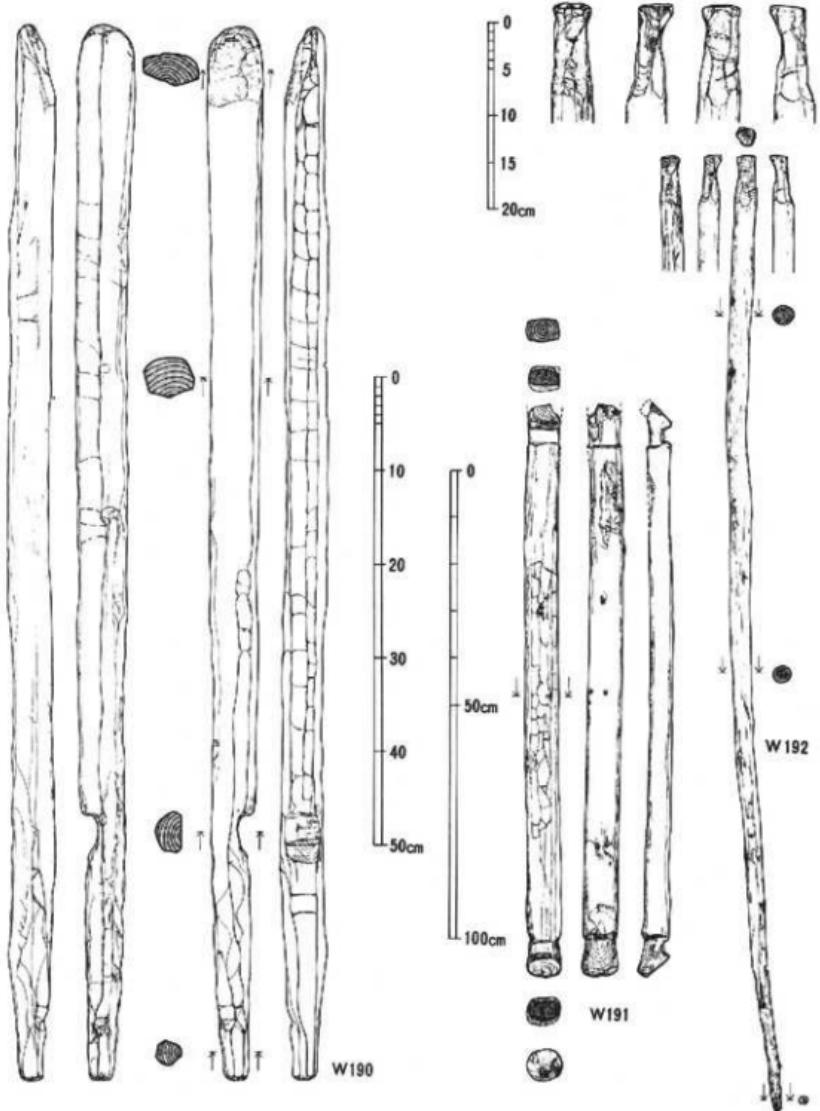


W188

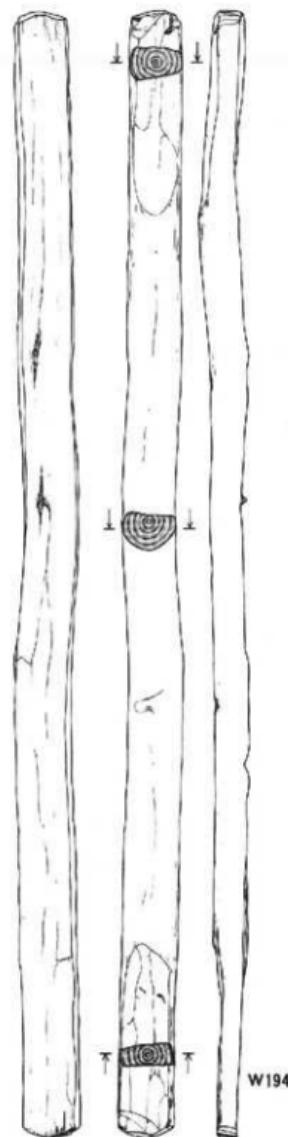
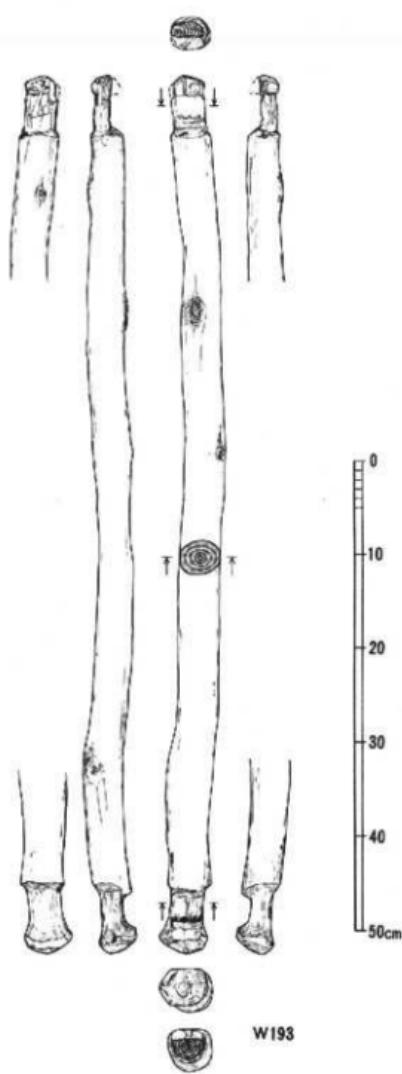


W189

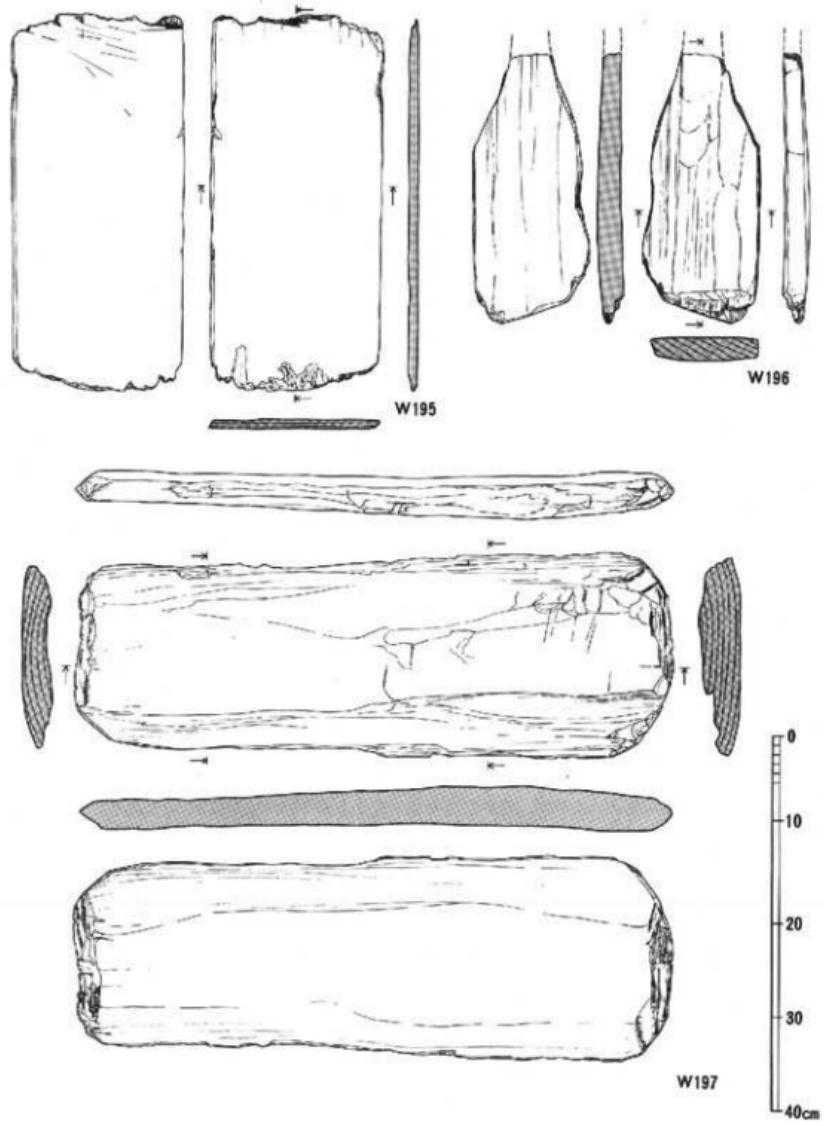
第154図 建築材実測図(45) 1:6



第155図 建築材実測図(46) 1:6 1:12



第156図 建築材実測図(47) 1:6



第157図 板状未成品実測図(48) 1:6

はないが、大きな孔や納の加工がされているので調度品や農耕具とは考えがたいものである。

W177は略台形に加工した内面をさらに台形に掘りくぼめたもので、内面上辺と外面上辺とは浅い溝で繋がっている。

W178は一方の木口に三方胴付きの納が作り出されており、他方の木口には刃物を打ち込まれた痕跡がある。これは二次的なものであろう。

板状未成品（第152図W179～181） W179は板目の木取り、W180はミカン割りとした柾目板である。W181は柾目板で、中央付近の両側辺から「V」字形の切り込みが施されている。

未成品（第153図W182・183・186） 板状の板目材で上方は欠損している。木裏面には縦方向に粗い手斧の刃痕が認められる。木取りはW186と類似している。W183は芯持材の一部を平坦に削り上方を、二方向からそぎ下している。

余材（第153図W184・185 図版144） W185は柾目木取り、W184は板目木取りとなっており、両者とも板材を加工した折の余材と考えられる。

建築材（第153図W187～189 図版147） いずれも芯持材である。W187は縦方向に表面を軽く削り、先端部の一面に「U」字形の切り込みが施されている。W188は杭に再利用されているが、一方の端に2条の刻線が半周している。中央部分の横断面は上面が平坦に削られているため半円形を示す。

W189は杭に再利用されたものである。欠損した端部付近には不整形な円孔が2孔以上穿たれていたことが知られる。

建築材（第155図W190～192 図版148、第156図W193～194 図版148） W190の下端もやや細くなっているので、杭に再利用された可能性もある。中央よりやや下方に「コ」の字状の切り込みが認められる。上端は木口に傾斜をもたせてそぎ下す。平面形は「U」字形を呈す。

W191両端に切り込みを入れる点は、自然面の有無や大きさを問にすればW193と共通点が多い。

W192芯持材の木元にコケシの頭状の加工を施す。

W194芯持材の一方を研って平坦にし、その反対の側は両端付近のみをそぎ下している。中央部の横断面は半円形を呈す。

板状未成品（第157図W195～197 図版148） W195・197は方形を呈す板目木取りの未成品である。

W196は鋤身を思わせる形態であるが、肉眼で見る限り針葉樹材と考えられるものである。

小 結

これまでタテチャウ遺跡出土木製品のうち弥生時代～古墳時代に属すると考えられる4層～6層のものを抽出してその概要を記してきた。以下若干の整理と問題点を記して小結としたい。

漆塗櫛は小片も含めると20点を超える数量である。島根県においては昭和55年に上流の西川津遺跡出土以来出土点数も増加してきた。これまで漆塗櫛は関東以北の縄文時代後期から晩期にかけてのものが著名で、出土地域や時代も限定されるように考えられてきたが、検討が必要となってきた。

本文中でも述べておいたが、形態を不間にすれば櫛齒の上半をすだれの糸状に結束し、これを櫛の身とする点は共通している。しかしW15は透し孔をもつこと、赤色漆の明度が他のものと比較して高いことがあげられる。さらにW16は角漆が硬質で、かつ厚いことが注意される。このような差が何に起因するのか、また所属時期についても今後光明される必要があろう。¹¹²

農耕具類のうち鋤は70点以上出土している。このうち広鋤Aと分類したものは内面上方に突帯が削り出されている。近年までこの突帯の用途は不明であったが、これは所謂丸鋤（泥除け具）を挿着するための装置であるとの指摘がなされている。W19の突帯には丸鋤の残片が残存する（図版12-6上段右）。これは当地方における丸鋤挿着をうかがわせる稀有な例といえよう。この丸鋤を挿着するには前記した突帯が不可欠であるが、今回の分類からすれば、その使用は広鋤A類に限定されるものといえよう。

広鋤のうち分類対象から除去しておいたW62は上半部台形を呈す当地方では見かけないものである。管見できる限り、富山県上市町江上A遺跡出土鋤に類似点の多いことが指摘できる。¹¹³ 北陸地方と当地との関連も考慮しておく必要があろう。

着柄鋤のうち鋤Aとしたものは鋤として間違いかどうと思われるが、鋤Bとした方に検討の余地がある。本文では「L」字形の柄がないという消極的なことを根拠に鋤としたが、これらの柄は小片となっている可能性もあるので、注意深く慎重な接合作業が必要といえる。今回時間的にそれを試みる余裕がなかったが、それらの検出によっては鋤Bとしたものの中には鋤に変更しなければならないものも含んでいる。

飲食具の製作技法についてふれておくことにしたい。ここで検討の対象としたのはW109高杯、W110杓子、W111～113匙、W114・115柄形木製品である。このうちW109を除けば加工痕や形態から割り物としてよいであろう。問題はW109高杯を挽き物、つまりロクロを使用して製作されたものか否かということである。弥生時代の木製品にロクロが介在しているか否かという問題は古くから論争があって、一応、決着が着いたかと思われていたが、慎重に検討する余地があるとする意見もあるのでここで若干記しておくことにしよう。W109の高杯は横木取りで上面から見ると一部

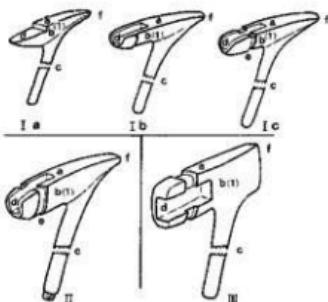
に亀裂が生じているので歪れているが、当初は正円形であったと推定される。ところで仮に横木取りであるこの高杯は、ロクロを使用せず、しかも、逆目を生じさせず内面調整をするには、上方から底部に向けて刃先を移動させることが唯一の方法となる。一方外面については逆に、脚部から口縁裏面に向けて刃先を移動させることが唯一の方法となる。このような方法によって調整された場合、削り方向の稜線が無数に認められるはずである。この好例が第137図W114の内面調整である。W114は入念な研磨が施されていないため、稜線が明瞭である。しかし、たとえ入念な研磨を横方向に施したとしても縦方向の稜線を完全に消去することは極めて困難である。この点、W109にはW111・W114にみられるような加工痕は存在しない。これは作業順序や熟練度の差ではなく、基本的な形成工程上の問題であろうと推定される。つまり以上のような諸点を考えあわせると、W109は削り物ではなく、挽物であると解される。上流部に位置する西川津遺跡でも上面から見ると円形を呈す容器はかなりあるもののロクロの使用は一部供獻具に限定されている。このことはロクロを使用して挽物を作ることが、この時期一般的には行われなかった可能性も考慮されよう。これは単に一つの木工技術の存否というにとどまらず、技術集団の社会的位置づけにもかかわる問題であり、ことは重要である。

次にW123抉入石斧の柄と考えられるものであるが、本文中では研り作業中、横斧あるいは縦斧いずれにも変更可能なものとしておいた。これは「里田原」Ⅱ型とⅢ型の折衷式とでもいえそうなものである。このようなものが実際必要とされたかという問題であるが、正林氏は長崎県諫早市六本町有喜在住の「船大工」が、曲柄に袋状片刃鉄斧を縦につけて船材の側面を削るのを実見したことある」と報告されている。¹¹⁵興味深い事例といえよう。同氏からは「Ⅲ型」は石斧装着溝が使用者からみて、左側につくものばかりで、右側につく例はこれまで知らないので、「Ⅲ型」的な使用方法を想定するならば左きき用と考えてはどうかとの教示を得ている。¹¹⁶

建築材としたものは充分な検討を行ったわけではないが、W191・193は西川津遺跡出土のものに先端部分の加工の方法、木取り等に共通点があり、またW192は福岡市湯納遺跡出土の垂木とされるものに類似していることが注意される。

以上、残された問題点は数多いが、今後の研究に期して、4~6層出土木製品報告の小結とした。

- a. 台部(上面)
- b (1) ~ 左側面
- c. 腹把
- d. 装着溝(部)
- e. 縦溝
- f. 台尻

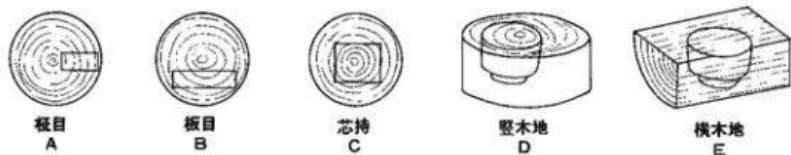


第158図 石斧握把模式図(註10より)

註

- 註1 島根県教育委員会『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』-Ⅲ- 1987
広縦Iは船形隆起・内面突帯をもつもの、広縦IIは銀身の上部に抉りをもつもの、広縦IIIは船形隆起・内面突帯・抉りともないものの3種に分類されている。
- 註2 島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査発掘調査報告書』-Ⅳ- 1989
広縦Aは船形隆起・内面突帯をもつもの、広縦Bは船形隆起をもつが内面突帯のないもの
広縦Bは船形隆起・内面突帯がないものの3種に分類されている。
丸原は側刃及び上辺の形態からA・B、2種に分類されている。
- 註3 文献2と同じ
- 註4 文献1と同じ
- 註5 黒崎直「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」『日本における稻作農耕の歴史と展開』日本考古学協会勢岡県大会実行委員会 1988
- 註6 当初諸手の未成品の可能性も考えられたが、諸手鍬とするには幅に無駄が多いように感じられた。松江市竹矢町向小畠遺跡例を想定しておきたい。
- 島根県教育委員会『北松江幹線新設工事松江連絡線新設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987
- 註7 文献1と同じ
- 註8 文献2と同じ
- 註9 縦内第Ⅱ様式に位置付けられる兵庫県川西市加茂出土高杯の杯部に類似している。
小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編 1989 p.144 №162
県内のものとしては島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』-Ⅳ- 1988 p.101-1041, p.102-1057に類似している。
- 註10 長崎県川平町教育委員会『里田原』1988
- 註11 島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』-Ⅰ- 1980 に類似品が図示されている。
- 註12 文献11には、縦文時代晚期の上器が比較的多く検出されたことが記されている。W6等は齒の本数を不間とすれば、島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』-Ⅳ- 1988 p.26-33の弥生中期の骨角器に類似している。
- 註13 富山県埋蔵文化センター・上市町教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告書』1984
- 註14 成田寿一郎『日本木工技術史の研究史』1990
- 註15 文献10と同じ
- 註16 文献10の執筆者 正林護氏から直接ご教示を得た。
- 註17 文献2と同じ
- 註18 宮本長二郎「高床建築の出土部材」『月刊文化財』№219 文化庁文化財保護部監修 1981

木取分類模式図



木製品一覧表

()内の数字は残存法量を示す

採団番号	図版 ページ	出土 地點	層位	器種	法 量(cm)			木取 番	実 測 番 号	備 考
					全 長	幅 (面)	厚 さ			
1				櫛	(3.2)	(1.6)	0.4			表面に赤色漆が塗布され、剥脱面は墨色を呈す。面にも本挽存。松江市教育委員会保管。
2	N16E7	6		櫛	(5.9)	(4.6~3.7)	0.4			表面に赤色漆が塗布され、剥脱面は墨色を呈す。面は13本残存。
3	N16E7	6		櫛	(7.2)	(3.1~1.5)	0.3	450		表面に赤色漆を塗布。面は8本残存。
4	N16~17 E8	6		櫛	(4.1)	(3.3~3.0)	0.3	451		包装層からの流出か? 表面に赤色漆を塗布。面は10本残存。
5	124	N15E6	6	櫛	(7.1)	(2.2~1.9)	0.4	457		表面に赤色漆塗布の淡墨色漆で鏡面を入れる構造。面は6本残存。
6	124	N16R7	6	櫛	(9.6)	6.0~5.2	0.4	459		表面に赤色漆を塗布。全形をうかがうことができる。面の数14枚。
7		N18F8	5	櫛	(2.1)	(3.3)	0.3	447		表面に赤色漆を塗布。面は6本残存。
8		N15E7	6	櫛	(3.0~2.7)	(3.3~2.3)	0.3	452		表面に赤色漆を塗布。面は8本残存。
9		N15E7	6	櫛	(8.5)	(4.5~1.6)	0.3	453		表面に赤色漆を塗布。面は10本残存。
10				櫛	(3.5)	(4.5)	0.4			表面に赤色漆を塗布。面は11本残存。松江市教育委員会保管。
11	124	N12E4	6	櫛	(4.9)	(2.6~2.1)	0.4	448		表面に赤色漆を塗布。面は6本残存。
12		N17E9	6	櫛	(6.3)	(3.6~2.3)	0.3	454		表面に赤色漆を塗布。面は10本残存。
13	124	N16E7	5-2	櫛	(6.8)	7.0	0.4	455		表面に赤色漆を塗布。面は18本。
14		N15E6	4	櫛	(6.2)	(7.0~)	0.4	456		表面に赤色漆を塗布。面は18本。
15	124	B~1区	8	櫛	(5.5)	(2.2)	0.8			表面に赤色漆を塗布。他のものと比較して色が鮮やか。体芯に透し孔あり。面は1本残存。
16	124	N22E6	4	櫛	(4.0)	(1.8)	0.9	225		体側上辺がU字形を呈す。表面に赤色漆を塗布。面は4本残存。
17	124	N20E5	4	櫛	(6.3)	(2.6)	0.5	226		体側上辺がU字形を呈す。表面に赤色漆を塗布。面は2シブを残すのみ。11本分。
18	124	N10E5	盛土内	櫛	(1.6)	2.7	0.5	458		体側は竹を束ねり平行に曲げる。表面は墨色漆を塗布。
76	136	N11E4	6		39.1	26.4	(3.0~1.0)	A	412	未成品

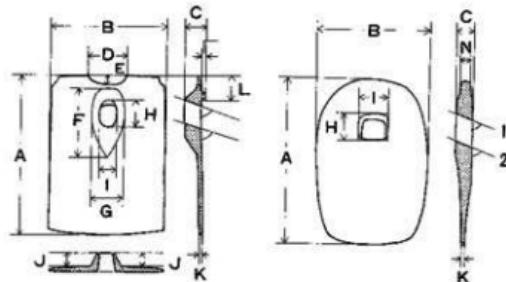
排図 番号	図版 ページ	出土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取 実測 番号	備 考
					全 長	幅 (厚)	厚 さ		
77	136	N15E6	5-1		(58.8)	(15.5-12.4)	3.2-0.2	A	438 未成品
78	137	N16E7	4		50.1	(17.0-15.5)	(3.5-2.3)	A	413
79	136	N22E6	5		40.5	9.2	2.0	A	218 外皮残存
80		N15E6	9		82.0	18.4	2.4	A	426
81		N15E6	5-2		28.7	18.5	1.9	A	293 鋼の未成品
82		N17E3	6		10.6	19.4	2.2-1.0	A	313
83		N17E9	5-2		(14.8)	(15.3)	(0.6-0.3)	A	310 鋼あるいは鋼の一部か
84		N21E5	4		24.0	9.0	0.5	A	221
85		N16E7	6		32.6	11.6-8.5	2.9-1.0	A	364
86	137	N10E6	青灰色 砂層	鍔A	79.6	14.0	2.8	A	394
87		N18E9		鍔A	(51.5)	(10.3)	2.5	A	297
88		N18E8	6	把手	(6.5)	(8.3-1.5)	(2.7-0.6)	A	344
89	138	N21E5	4	鍔B1	(34.8)	(8.7)	(1.3-0.9)	A	120
90		N14E6	5-2	鍔B1	12.4	4.9	1.2	A	284
91	138	N14E5	4-5 の間	鍔B1	(40.8)	(14.2)	1.3	A	296
92	138	N16E8	4	鍔B1	B(36.2) A(29.3)	B(7.4) A(7.2)	B 1.5-0.2 A(1.4-0.4)	A	431
93	138	N17E9	15	鍔B1	(43.8)	16.0	1.3	A	295
94	138	N11E4	4	鍔B1	(43.4)	(15.2-3.8)	(1.5-0.5)	A	379
95	138	N22E6	4		(38.3)	(3.0)	(1.0-0.2)	A	119 鋼先を軸用か
96	138	N22E6	4		(16.2)	2.1	1.0	A	249 鋼先を軸用か
97	138	N22E6	4		(21.6)	2.9	1.1-0.9	A	202 鋼先を軸用か
98	138	N27E7	4-1	鍔B2	(50.0)	14.2	1.0	A	227
99	138	N15E7	4	鍔B3	(13.4)	(11.0)	2.2	A	283
100		N21E5	4	鍔	(13.1)	(3.4)	0.4	A	9
101	139	N11E5	6	鍔B3	23.6	18.8	1.8	A	289
102	139	N11E4	4	鍔	(51.5)	(21.8-3.5)	(2.0-0.3)	A	363

插図番号	図版ページ	出土地点	層位	器種	法 全長			水取	実測番号	備考
					幅(全)	厚さ	高さ			
103	139	N14E6	4	匙B4	29.5	13.4	0.7	A	298	相対する子孔をもつ
104	139	N16E8	5-1	匙	(22.8)	(17.0~2.5)	-	A	374	
105		N14E6	5-2	匙	30.7	(10.3~3.5)	0.5	A	355	
106		N14E5	5-2	匙	(21.5)	(9.0~7.3)	(1.5~0.5)	A	376	
107	139	N26E7	5	匙	47.5	(22.2)	8.3	A	245	未成品
108	140	N11E4	4	匙	(35.4)	(23.5~10.5)	(2.6~1.4)	A	390	未成品
109	140	N17E7	5-2	高杯	(12.4)	28.8	1.7~0.5	A+E	460	
110	140	N13E7	5-2	匙形 杓子	26.4	10.8	2.6	C+D	223	
111	141	N18E8	6	匙	19.4	4.8	1.3	A+E	318	
112	141	N21E5	4	匙	(7.1)	(4.0)	0.5~0.4	A+E	14	
113	141	N22E5	-	匙	(17.0)	(4.2)	1.0	A+E	13	
114	141	N12E7	5-2	匙形 木製品	-	18.8~16.0	1~0.5	A+E	368	
115	141	N13E7	5-2	匙形 木製品	(30.9)	14.2	5.4		224	
116	141	N13E5	5-2	把手 部分	13.0	(8.3)	(4.5~1.6)	A	309	
117	142	N11E4	4	横笛	24.7	4.4~2.5	-	C	329	
118		N16E8	5-2	～状 木製品	36.1	9.4~2.2	5.5~2.2	B	340	
119		N16E7	4	把手 部分	21.2	7.4	2.6	C	330	
120		N10E7	6	匙	(41.8)	(8.4)	0.8	A+E	414	
121	142	N17E9	5	堅杵	(105.9)	(6.3~4.0)	-	C	416	
122	142	N11E4	4	堅杵	-	-	-	A	381	
123	142	N17E9	6	石斧柄	19.0	4.6	-	C	320	
124	142	N12E4	5-2	斧柄	14.0	2.5	-	C	280	
125	143	N12E4	4	木鎌	(10.8)	1.1	1.0	A	268	
126	143	N15E6	4	木鎌	8.2	1.1	1.0	A	269	
127	143	N26E7	4-1	木鎌	15.5	1.1	0.5	A	10	
128	143	N12E5	4	木鎌	(9.7)	0.9	0.8	A	271	

捲 番 号	図版 ページ	出土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取 査 番 号	備 考
					全 長	幅 (径)	厚 さ		
129	143	N14E5	5-2	木綿	8.0	0.8	0.8	A	267
130	143	N22E6		木綿	(8.3)	0.6	-	A	8
131	143	N26E7		木綿	(10.9)	0.6	-	A	7
132	143	N21E5	4	木綿	12.1	0.7	0.7	A	16
133	143	N16E8	4	木綿	(8.7)	0.6	0.5	A	270
134	143	N21E6	4	木綿	(17.4)	(1.0~0.7)	-	A	82
135	143	N13E5	5-1	木綿	(61.5)	(9.7~7.0)	(5.5~4.5)	A	365
136	143	N16E8	6		(19.7)	(3.7)	1.2	A	279 鳥形頭部か
137	143	N16E8	5-1		21.1	11.3	3.0	A	335 鳥形体部か
138	143	N14E5	5-2	杓子形 木製品	(12.6)	3.8	0.6~1.7	A	275
139	144	N12E8	6		43.0	(9.0)	1.3	A	204 木軸を使用
140		N17E8	7		34.0	3.5~2.9	-	C	383
141	144	N12E4	5-2		(47.7)	(3.5~2.4)	-	C	445 鐵柄か
142		N14E6	4		48.4	(3.0~1.8)	-	A	404 鐵柄か
143		N17E8	4		(34.2)	3.0	-	C	419 鐵柄か
144		N21E5	4		(41.1)	3.0	-	C	230 鐵柄か
145	144	N17E9	7		49.3	3.0~2.0	-	C	418 鐵柄か
146		N26E7			24.1	2.5	2.3	A	2
147	144	N26E7			36.3	(4.9)	2.4	A	213 鐵柄か
148		N24E6	3		(15.5)	(2.4~1.5)	(0.4~0.2)	B	115
149		N16E7	6		23.9	(7.5~1.7)	(0.8~0.5)	B	314
150		N16E8	6		(15.5)	5.8	1.6~0.8	A	336
151	145	N12E4	4	弓	60.8	2.6	2.3	C	415
152	145	N13E6	4		50.2	1.8	-	C	377 端部をコケシの頭状に加工
153	146	N11E7	5-2		28.5	10.2	2.2	A	288
154	146	N16E8	5-2		(40.9)	(15.6~4.7)	(1.8~0.3)	A	409 機械と推定

揮圖 番号	図版 ページ	出土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取	実測 番号	備 考
					全 長	幅 (径)	厚 さ			
155	146	N14E6	5-2		(28.5)	(9.3~2.0)	(1.7~0.6)	B	366	
156		N17E9	7		47.4	4.8	-	C	402	
157		N12~13 E4	4		14.8	11.3~	-	C	307	純の未成品か
158		N13E6	5-2		14.0	(9.0~5.2)	-	C	401	純の未成品か
159		N10E7	5-2		14.5	(11.8~9.5)	-	C	390	純の未成品か
160		N11E4	4		7.6	2.2	1.7	C	278	
161		N26E7	4		(3.7)	(2.0)	-	A	15	
162		N16E7	5-2		3.5	2.2	0.5	B	299	黒色漆塗
163	146	N13E5	5-2	弓か	(10.8)	2.5~2.2	--	A	308	極度墨一端残存
164		N12E4	4		4.4	0.7	0.6	A	273	
165		N16E8	5-1		(15.7)	0.5	0.3	A	272	先端四円錐形を呈す
166		N11E4	4		59.4	(6.1~2.5)	2.0~1.5	A	342	
167		N13E7	5-2		52.8	(8.0~6.5)	2.0~0.8	B	407	
168		N15E6	5-1		31.5	7.0~6.7	1.5~0.3	A	399	
169		N16E8	5-2		25.9	12.0	(1.5~0.1)	A	324	
170		N21E6			(8.2)	10.0	2.5	A	17	
171		N17E8	5		24.7	15.8	1.2	A	327	形態は盤のよう見えるが 鉛筆模
172		N17E8	5		48.6	(12.3~4.5)	(1.8~0.3)	A	396	
173		N11E4	4		42.8	7.3~1.0	2.6~1.8	B	397	
174	146	N10E7	4		54.4	10.6	1.8	B	436	両端斜を造り出す
175	146	N11E4	5-2		-	-	-	B	432	方形孔2個あり
176		N10E7	5-2		(38.8)	(16.8~5.1)	(1.8~1.5)	A	406	
177	147	N10E7	4		25.3	9.7	8.2~2.3	B	360	建築材か
178	147	N11E4			16.0	12.8	5.8	B	371	三方脚付の柄を造り出す 建築材か
179		N14E5	5-2		70.4	17.2	1.6	B	424	
180		N11E4	4		83.5	(11.8~8.7)	4.1~1.0	A	429	

擲 標 番 号	図版 ページ	出土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取 査 番 号	備 考
					全 長	幅 (深)	厚 さ		
181		N10E6	4		60.4	18.4	2.8	A	425
182		N17E7	4		76.6	(11.0~1.0)	3.2~0.4	B	442
183		N23E8	6		(37.5)	(6.7)	4.7	C	234
184		N10E6	4		17.7	30.4	2.5~1.3	B	369
185		N22E6	5		26.4	16.4	6.0	A	210
186		N13E7	4		60.4	(12.0~9.0)	2.4~1.1	B	437
187	147	N13			50.2	5.0	2.8	C	435
188	147	N24E9	6		(63.3)	(8.4)	6.0	C	231
189	147	N17E9	5-1		(71.2)	5.3	-	C	433 建築材からの転用例
190	148	N11E4	4		112.8	5.4~2.5	-	C	440
191	148	N12E7	5		119.2	7.6	4.0	C	423
192	148	N14E6	4		197.2	4.0	4.0	C	427
193	148	N17E8	7		91.8	4.4	-	C	382
194	148	N16E8	4-5		130.0	5.8	--	C	428
195		N12E5	5-2		39.9	18.0	1.0	B	378
196		N18E9	4		(28.8)	(12.4~4.4)	(2.7~2.0)	A	352
197	148				62.0	21.2	4.0	B	446



鉤計測位置模式図

種類 番号	分類 番号	出士 場所	層位 番号	木 角 度 り	著 角 度 り	最大幅 1	最大幅 2	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	実測 値	備考		
55	133	鉢	N1889	5-2	A	23.3	22.4	5.4															239		
56	134	鉢	N1586	4	A	40.5	(17.5 ~7.7)	(1.2 ~0.5)																236	
57	134	鉢	N1687	6	A	33.2	18.0	2.4																410 水道具	
58	134	鉢	N2125	4	A	47.8	25.9	9.5																244 木製品	
59	135	鉢	N2105	4	A	90.0	90.0	(13.2) (12.8)	2.2	2.4	1.9	2.9	(1.1)	3.0	1.8	(6.8)									219
60	135	鉢	N1787	5-1	A	78.0	71.0	(18.9) (11.4)	1.7	(2.8)	(2.7)	0.2	0.5	4.0	1.7	10.4									349 槌端が2次となる
61	135	馬手柄	N1425	6	B	63.6	13.6	6.4				24.8	10.0												366 木製品
62	136	鉢	N1483	5-2	A	50.0	71.0	28.0	(16.5)	2.9														350	
63			N2256	5	A				(6.0)	(6.7)	0.8														251
64			N1225	6	A							22.8	8.3	1.9											251
65			N2125	4	A							28.7	(18.2) (7.4)	(2.6) (2.5)		(3.1)	(3.2)								
66			N2256	5	A							(6.2)													11
67			N1687	5-2	A							(15.4)	(8.4)	(1.0)											275
68			N1586	5-2	A				(19.7)	11.0	0.8				(6.8)	(4.9)									277
69			N1628	5-1	A	83.0	82.0	25.0	(9.2)	1.4	(2.4)	1.5	(5.4)	(2.5)	(0.8)	0.7	0.3	3.5						305	
70			N1225	5-2	A							14.8	7.5	1.3			(3.5)	(1.8)	0.8						274
71			N1184	4	A				(18.8)	(9.0)	(1.7)						(3.8)	(1.2)	0.5						347
72			N1788	6	A				80.0	20.2	6.2	2.6													331

測定番号	測定部位	出土場所	骨位	本数	法								量 (cm)	備考					
					右角	左角	鼻尖	歯大顎	歯人顎	圓前歯	抜取り歯	歯起長	歯孔長	側孔幅	鼻孔幅	鼻孔高			
				1	2	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
73	N17 T3-9	5	A			24.6	(7.6)	0.9				(2.5)	(1.2)		(0.5)			326	
74	N1485 T36	5-2	A	63.0	57.0	22.1	(4.0)	1.4							0.3			323	歯をヘラに施用か
75	N1184 A2	6	A			27.0	(8.5)	2.8				19.0	11.3	5.4	6.0	1.2	0.5	351	

V. 旧 河 道

昭和63年度の調査では、旧朝酌川と思われる自然川跡を2条確認した（第159・161 図版9～16）。これらの河川跡は確認された順に東側のものを第1河道、西側のものを第2河道と呼称しておく。

第1河道（図版9～11） 現朝酌川西岸に接してほぼ平行に検出された。この河道は黄褐色土層（第3層）を除去した段階（標高約±0m）で確認され、完掘状態での規模は上縁幅約13m、最深部での深さ約2.2m（標高-2.2m）を測る。土層は9層に分層したが、全般にはほぼ同質で互層状に細砂が混入する灰色粘質土である。所々砂の混入量に多寡があるが、基本的には同一の条件で堆積した土層と思われた。ただし、第8層は植物質（葦か？）の混入が著しく、特徴的な層である。

出土遺物のうち特に注目すべきものは「天正十六年（1588）」銘のある順礼札（第188図W243）と「永楽通宝」（第226図I2）で第1河道の年代を示す遺物と考えられる。他の遺物もこれと矛盾しないことから、第1河道は15～16世紀頃の河川と考えられる。

第1河道は、東岸が検出されなかったこと、土層が東に傾きながら堆積していること（第159図）、現朝酌川と接していること、東側（昭和62年度調査区）には存在しない、などから考えると第1河道は徐々に東方に移動し現在の位置を流れるようになったと考えられる。

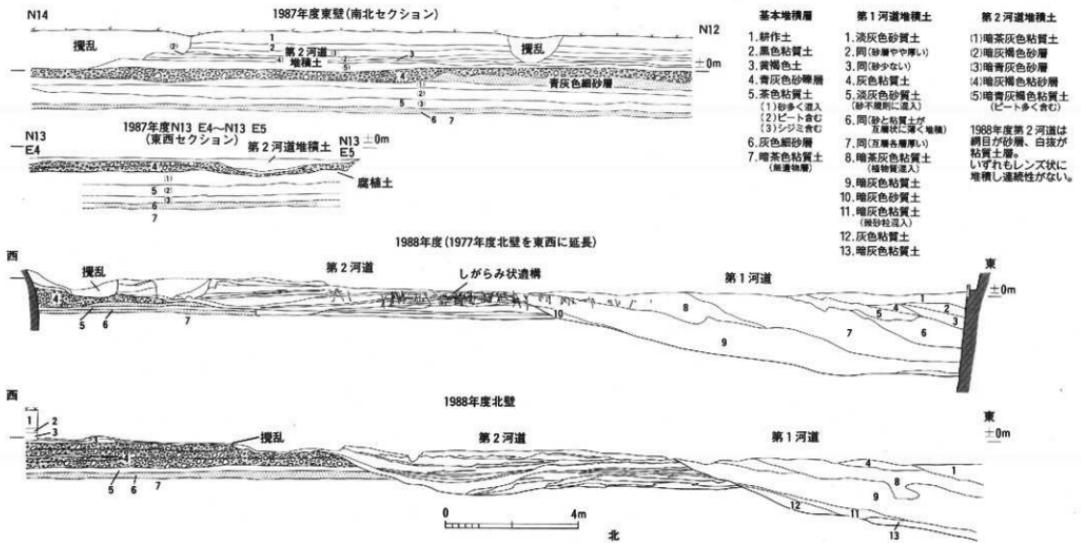
第2河道（図版15・16） 第1河道の西岸に接して検出された。第2河道は現朝酌川および第1河道とは平行せず、南に向うに従って西方に向いて変えているようで、N22E5以南では検出していない。検出面は第1河道と同じで、幅約13m、最深部での深さ約1m（標高-1m）を測る。土層は粘質土、細砂層、砂礫層が数cm～10cmの厚さで互層状に堆積し、レンズ状を呈することも多い。

出土遺物は須恵器を中心に木製品などが出土した。須恵器は奈良～平安時代のものが多く第2河道も概ねこの頃の河川と思われる。これは墨書人形代などの年代とも矛盾はない。

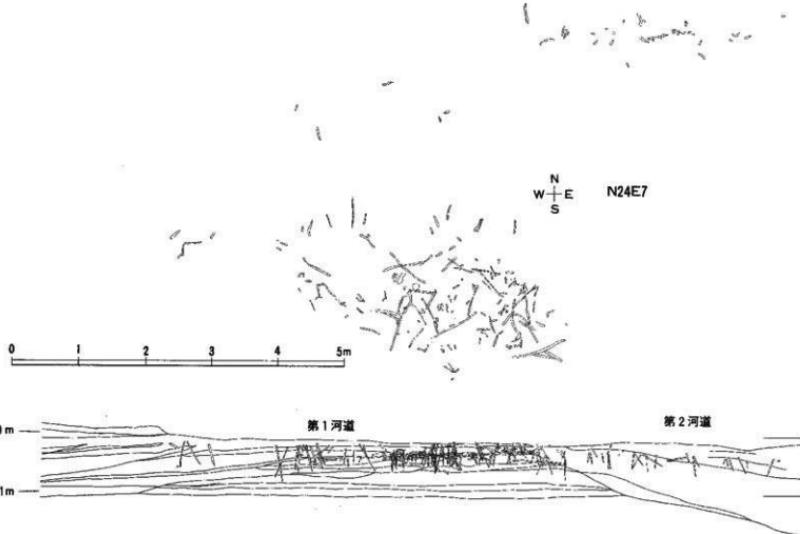
第2河道の土層は、第1河道とは反対に西に傾きながら堆積している。またこの堆積は昭和59年度（報告Ⅱ5～9層）62年度調査区でも同様な堆積がみられることを考えると、第2河道は東から西に向って移動し今回確認した位置で止まったと考えられる。そしてこれが完全に埋没した後に再度第1河道が流れるようになったと思われる。

しがらみ状遺構（第160図 図版17） しがらみ状遺構は1988年度調査区の北半部で検出されたものである。

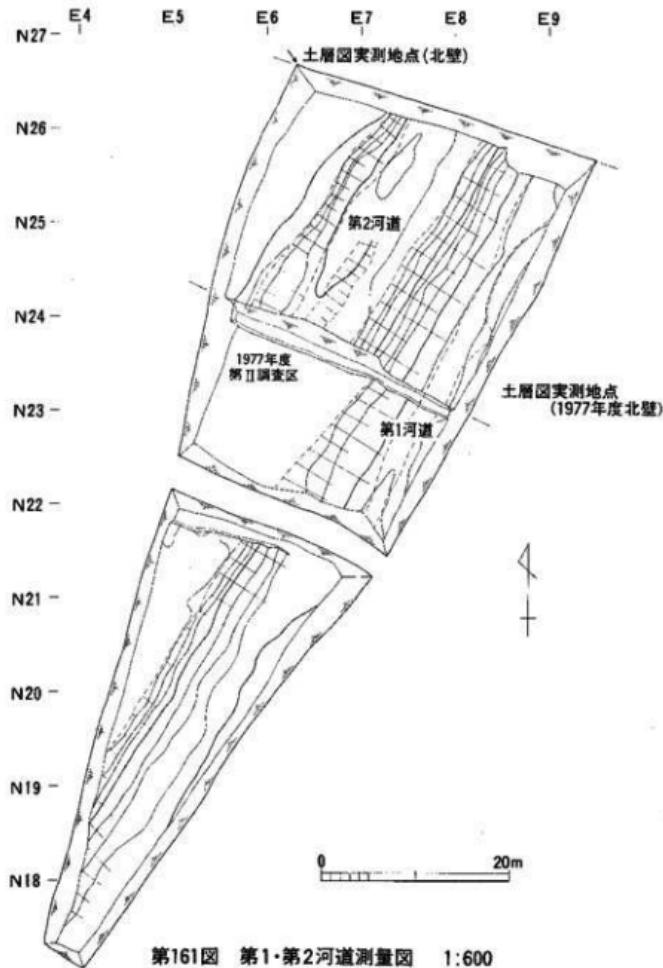
検出位置はN24E7～N24E8にかけての25m²で、第2河道が第1河道と重複するところもある。しがらみの構成材は最大径5cm、長さ50cm程度の樹皮がつけたまま先端を尖らせたもので、個々の材は大きくはない。横方向に添えた材にしても前記したものと同様な大きさで中には小枝状を呈す



第159図 第1・第2河道士層図



第160図 しがらみ造構実測図・杭群垂直分布図



第161図 第1・第2河道測量図 1:600

ものも認められ、本格的に杭をつくろうとした形跡は認めがたい。

この遺構が形成された時期は土層等から検討すると、打ち込まれている杭は第2河道内の堆積土中に打ち込まれたものの密度が高く、さらにその杭列は東へとのびており、第1河道の堆積上（第8層）に打ち込まれている。このことから、杭群は粗密の差が若干認められるが、一連のものとするならば、第1河道の第9層の堆積が完了し、8層あたりに水が流れている時期とすることができよう。

1. 第1・第2河道出土遺物

(1) 須恵器 (第162図～169図)

第1・第2河道からは須恵器が比較的まとまって出土した。これらは人形代などの他の遺物からみて第2河道の年代とはほぼ同じと考えられているが、第1河道出土須恵器のうち中世以前と考えられるものについては第2河道からの流れ込みと判断した。そのためここではいずれの須恵器も第2河道出土として扱った。

蓋 (第162図 SU 1～7 図版149) 古墳時代の蓋 (SU 1～5) と飛鳥時代以降の蓋 (SU 6～8) を図示した。奈良時代以降のものはSU 7のみであった。SU 1は口縁部が平坦で稜も比較的明瞭であるなど比較的古式の様相を持つ。^{Ⅲ期}であろう。SU 2・3は^{Ⅳ期}、SU 4・5は^{Ⅴ期}の特徴を持つ。SU 6・7はともに宝珠つまみを持つと考えられる蓋である。6は口縁内面にかえりを持つことから7世紀代、7は小片のため不明瞭であるが9世紀頃の蓋と思われる。SU 8は高い輪状つまみを持つ天井部である。

坏 (第162図 SU 9～第166図 SU72 図版149～152) 古墳時代の坏1点 (SU 9) 以外は飛鳥時代以降の歴史時代ものである。SU 9は内傾するたちあがりを持つことから^{Ⅲ期}と思われる。歴史時代の坏は有高台のものをI類、無高台のものをII類とした。

I₁ (SU10～15) 高台が高く口縁部が内湾するもの。口縁部が大きく開くもの (SU10・14)、口縁部が比較的急に伸びるもの (SU11・12・13・15) とがある。SU13、14がへら切り、11が回転糸切、15が静止糸切によって切り離される (15は若干ナデ調整)。SU10・14が7世紀後半、13が8世紀前半、15が同中葉、11・12が同後葉であろうか。

I₂ (SU16～25) 高台は低く口縁部が外傾または外反するもの。いずれも回転糸切によって切離されているが、SU22は若干ナデ調整が施される。SU25は口縁部が大きく開くもので、全体に歪みが著しい。SU16～24は8世紀後半から9世紀前半頃と思われるが、25は他のものより新しいと思われる。なおSU18の内面には『漢』(篆書体)が印刻されている。

II₁ (SU26～52) 体部が内湾し口縁部がわずかにくびれるもの。口縁部が明瞭にくびれるもの (26など) と口縁部が肥厚するだけのもの (28など) などのバラエティーがある。底部はいずれも回転糸切によって切り離され、未調整のものが多い。8世紀後半～9世紀前半頃と思われる。

II₂ (SU53～55) 体部が内湾しそのまま口縁部に至るもの。端部がやや肥厚するもの (53・54) はII₁類の退化型式の可能性がある。底部はSU53・54は回転糸切未調整、55は回転へら削り調整が施される。55が8世紀前半、53・55が8世紀後半から9世紀前半と思われる。

III₁ (SU56～58) 体部、口縁部が直線的に開くもののうち、急角度で口縁部が伸びるもの。比

較的小型で、口径と底径の差がⅢ類ほど大きくない。いずれも底部は回転糸切未調整である。8世紀後半～9世紀前半と思われる。

Ⅱ₁ (SU59～73) 体部、口縁部が直線的に大きく開くもの。口径と底径の差がⅡ類より大きい。ろくろ目が頗著で全体にいびつな感じがし、焼成不良で軟質のものが多い。底部はいずれも回転糸切未調整である。松江市長峯遺跡や、米子市大塔山横穴墓群¹³では同様な杯と壺が共伴しており、その壺の特徴から10世紀前後と思われる。

Ⅲ (第166図 SU74～第167図 SU92 図版152) 有高台のものをⅠ類、無高台のものをⅡ類とした。

Ⅰ (SU74～81) 高台は高く、体部は一旦内湾し、口縁部が外反する。口縁部の形態はバラエティーがある。底部はいずれも回転糸切未調整である。

Ⅱ₁ (SU82) 体部、口縁部が外反するもので1点のみ出土した。底部は回転糸切未調整。

Ⅱ₂ (SU83・84・86～91) 体部下半は内湾し口縁部が外反するもの。底部はともに回転糸切未調整である。

Ⅱ₃ (SU85) 体部・口縁部が直線的に大きく開くもの。底部は回転糸切未調整。

Ⅱ₄ (SU92) 体部・口縁部が内湾するもの。底部は摩滅しているが、回転糸切のようである。

皿の年代は不明な点が多いが、Ⅰ類、Ⅱ₁、Ⅱ₂、Ⅱ₄類は8世紀後半～9世紀前半と推定され、Ⅱ₃ (SU85) はそれより新しいと思われる。

短頸壺 (第167図 SU93～97 図版152・153) 中型で肩部が強く張るもの (SU93～96) と小型で肩部が張らないもの (SU97) がある。完形はSU96のみで、底部は回転糸切未調整である。

壺 (第167図 SU98～104・第168図 SU108・110～111・113 図版152～155) SU98は口頸部がやや短く外反する小型品。99・108・110・111は広口壺、102は長颈壺、100・103・113は胴部、101・104は丸底の底部である。103・104は古墳時代の竈胴部の可能性がある。年代の把握ができるものは少ないが、111に似た壺が松江市坊床廐寺で延喜通宝と併出していることから10世紀前後、103、104、108がその形態から古墳時代山陰Ⅰ期と推定される。

甌 (第167図 SU105・106 図版152) 脇部の張る古墳時代Ⅰ期のもの (SU106) と高台のつく奈良時代頃のもの (SU105) とがある。SU105は底部が回転糸切後回転ナデ調整が施される。

円面鏡 (第167図 SU107 図版153) 小片が1点出土している。全体に粗雑な作りで、上面には研ぎ痕がみられる。

壺 (第168図 SU109・114・119 図版153・154) SU109・114は口縁部が短く外反するものでSU114は胴部に把手がつく。SU119は頸部がやや長く口縁端は肥厚する。

横瓶 (第168図 SU112 図版153) 腹部の張りが壺等と違うため横瓶と判断した。直口で口唇は平坦である。

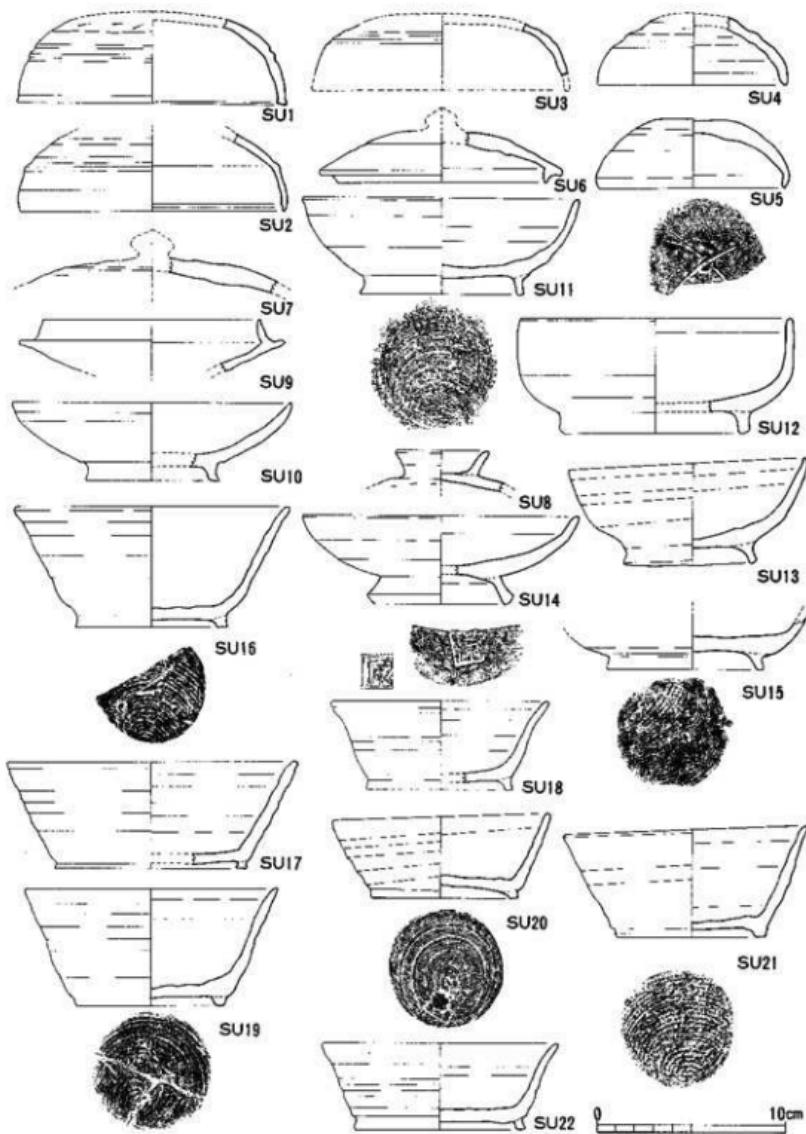
高坏（第169図 SU116～117 図版155）ともに短脚で方形の透孔が穿たれる。
その他（第169図 SU118 図版155）皿底部片であるが、高台剥離部分が底部より低くなり、その部分と底部の両者に糸切痕が残っている。切り離し後粘土板を貼り付けさらに糸切り離しをしたようみえるが定かでない。

子持壺（第169図 SU120 図版155）小片のため定かではないが、子持壺の壺部と脚部の境と判断した。外面にハケ口調査が施される。非常に軽いのが特徴である。

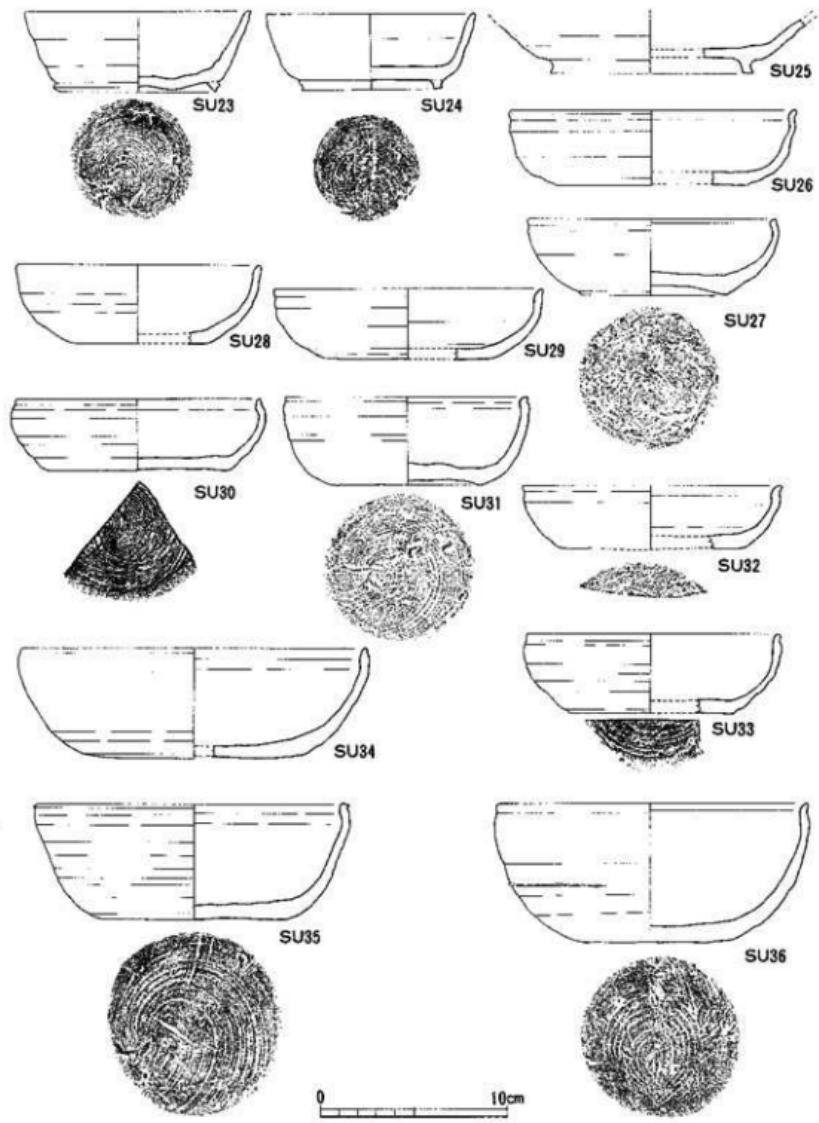
瓦質土器・瓦器（第168図 SU115・第169図 SU121・122 図版155）第2河道から瓦質の土器が3点出土した。須恵器とは別項とすべきであるが、便宜上須恵器の項で扱った。SU115は口縁部が内湾する鉢形土器で、内外面にていねいなヘラミガキ調整が施される。暗褐色を呈す瓦質土器である。SU121・122は瓦器碗で、ともに底部に高台が付く。表面は銀化しており、断面は白色を呈す。SU122の底部は回転糸切後若干ナデ調整が施される。

註

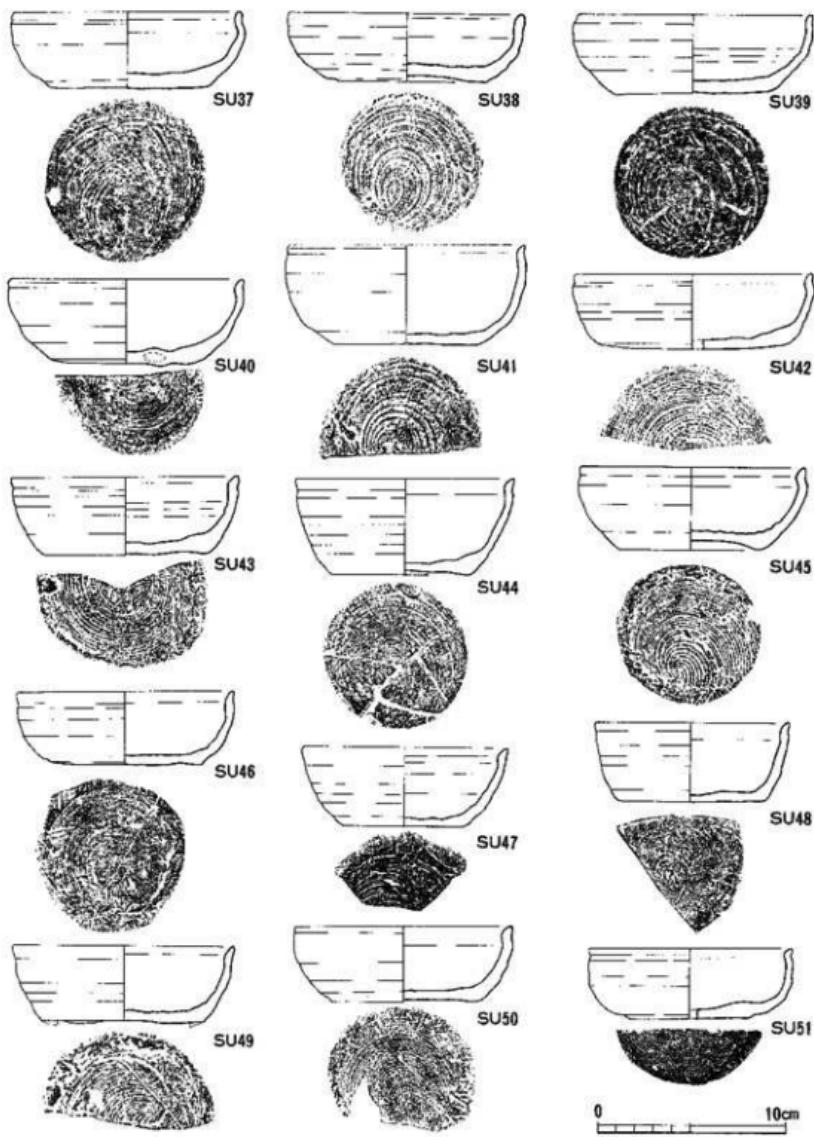
- 註1 山本 清「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論文集』 1960
- 註2 柳橋俊一「出雲地方の歴史時代須恵器編年試論」『松江考古』3号 1980
- 註3 松江市教育委員会『中竹矢1号墳、長峯遺跡』 1986
- 註4 鳥取県教育文化財団『大塔山横穴墓群』 1987
- 註5 近藤 正「松江近辺出土の陶製壺その他の」『島根県埋蔵文化財調査報告』第Ⅲ集 1971
島根県教育委員会



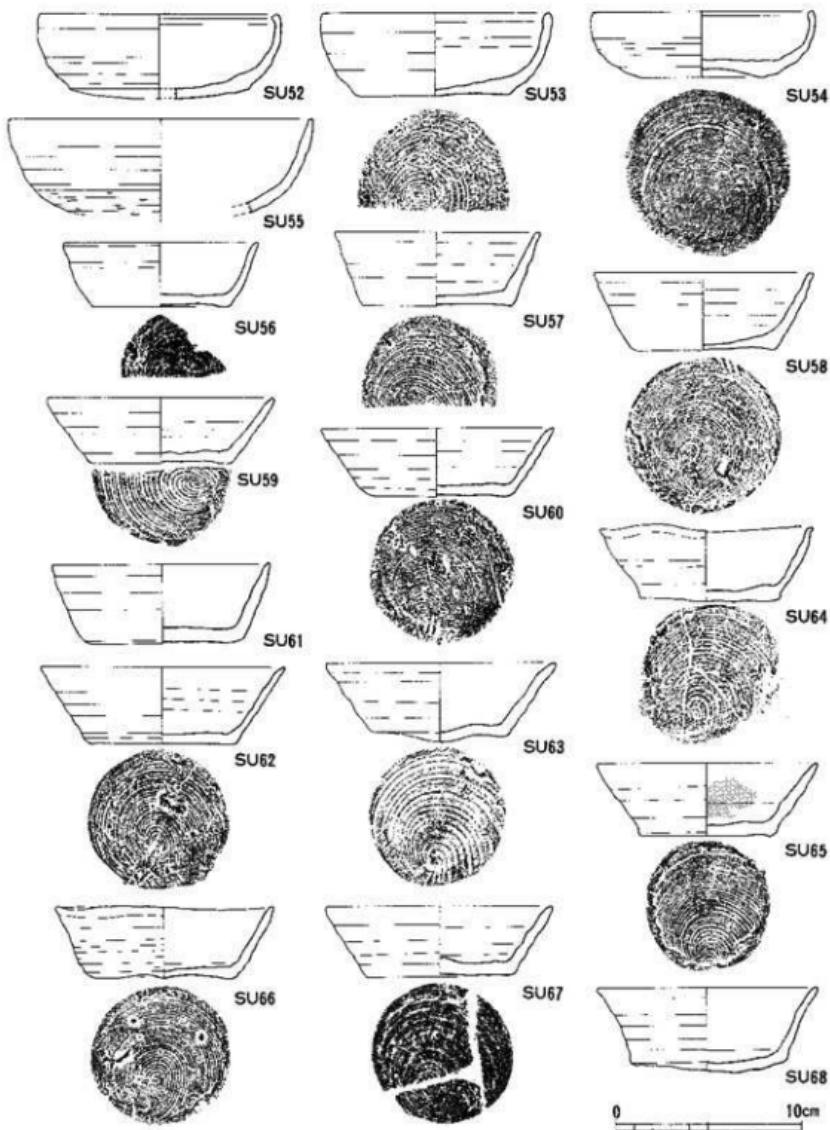
第162図 第1・第2河道出土須恵器(1) 蓋・壺 1:3



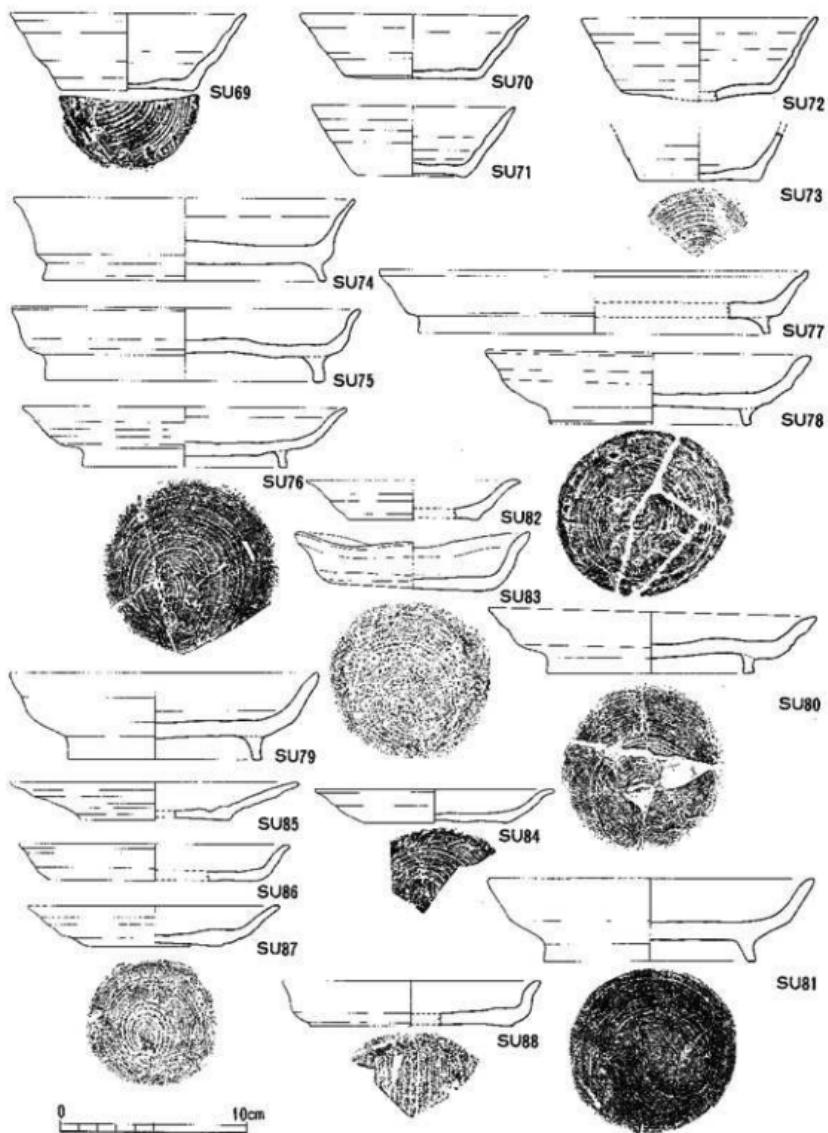
第163図 第1・第2河道出土須恵器(2) 坯 1:3



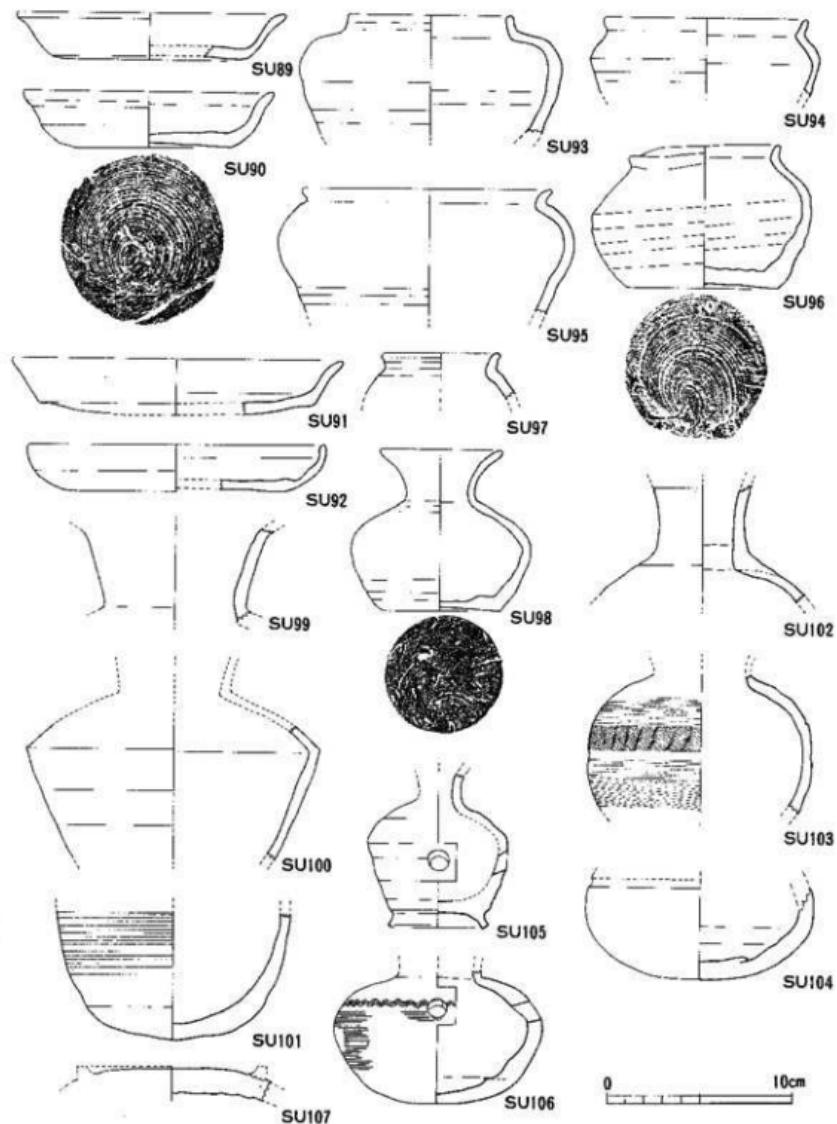
第164図 第1・第2河道出土須恵器(3) 坯 1:3



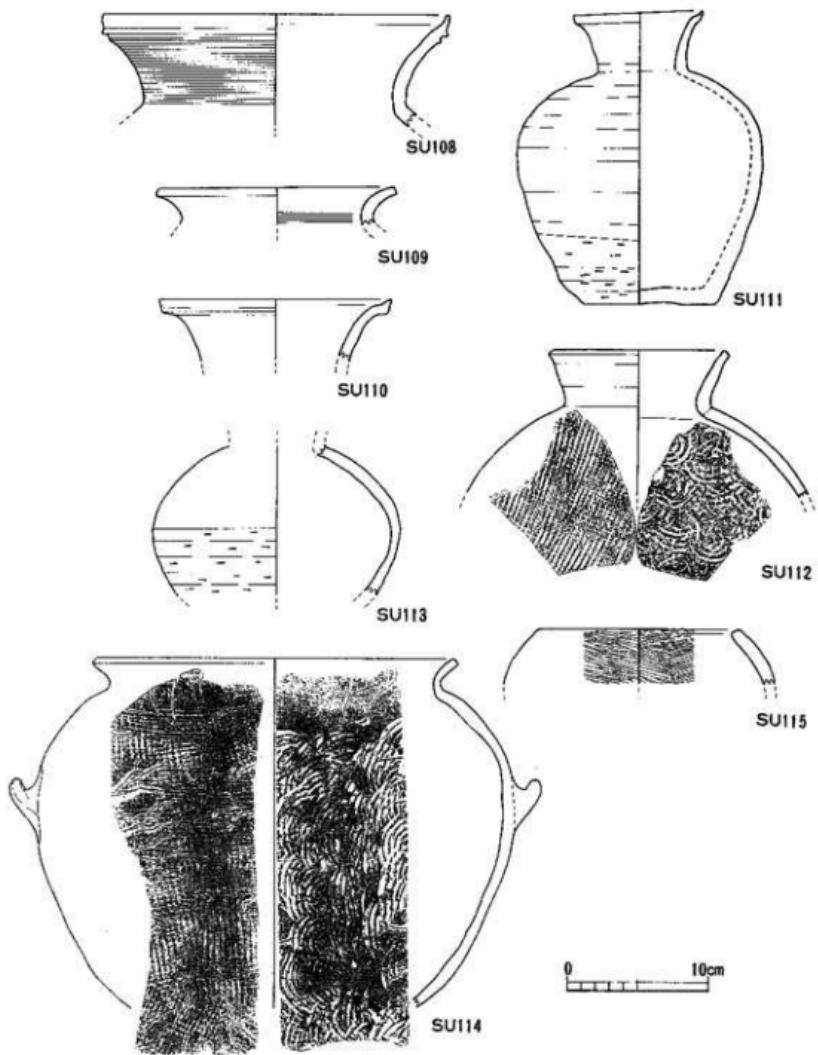
第165図 第1・第2河道出土須恵器(4) 坯 1:3 (網目は塗)



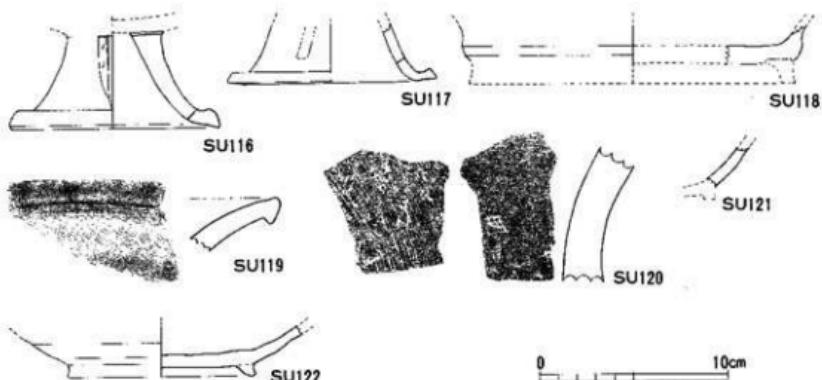
第166図 第1・第2河道出土須恵器(5) 坯・皿 1:3



第167図 第1・第2河道出土須恵器(6) 盆・壺・短頸壺・長頸壺・甌・硯 1:3



第168図 第1・第2河道出土須恵器(7) 壺・瓦質土器 1:4



第169図 第1・第2河道出土須恵器(8) 高壺・皿・壺・子持壺・瓦器碗 1:3

須 恵 器 一 覧 表

器種	分類	番号	図版 ページ	出土地点	層位	法 番 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備 考
蓋		SU1	149	N17E8	第2河床 堆積土上	口径14.6 基高 4.5	円錐2条で接する。 口唇平底		ケスリ(手持?)	
蓋		SU2	149			口径14.2 基高 4.2	1縫内部に斜		圓輪ヘラケズリ、圓 輪ナデ	松江市保管
蓋		SU3		N24E8	第2河床 堆積土	口径13.8 基高 3.5	円錐2条で接する			
蓋		SU4	149	N24E8	第2河床 堆積土	口径10.2 基高 3.6			ヘケ切?後ナデ	
蓋		SU5	149	N13E6	第2河床 堆積土	口径10.0 基高 3.7			ヘケ切後ナデ	内腹ヘラ記号
蓋		SU6		N17E9	第2河床 堆積土	口径11.4 基高 2.6	口縁かえり		天井回転ケズリ?	
蓋		SU7		N26E7	第2河床 堆積土	基高 1.8			天井回転ケズリ後、 回転ナデ	
蓋		SU8	149			基高 2.2 大井幅4.9	高い輪状つまみ		回転ナデ、回転ヘラ 削り	つまみ厚5.1cm 松江市保管
壺		SU9		N17E8	第2河床 堆積土	口径11.8 基高 2.7	内縁するたらあがり			
壺 I	I	SU10	149	N13E7	第2河床 堆積土上	口径15.2 基高 4.2 底径 7.3				
壺 I	I	SU11	149	N17E9	第2河床 堆積土上	口径15.1 基高 5.1 底径 8.9			回転糸切	
壺 I	I	SU12				口径14.4 基高 6.2 底径 10.1			回転ナデ	松江市保管
壺 I	I	SU13	149	N17E9	第2河床 堆積土	口径12.8 基高 5.7 底径 7.0			ヘケ切後回転ナデ	
壺 I	I	SU14	149			口径15.0 基高 4.7 底径 7.0	口縁大きく開く、高 台端面面取		底端回転ヘラケズリ、 回転ナデ	松江市保管
壺 I	I	SU15	149	N18E8	第2河床 堆積土	口径 2.4 基高 3.9 底径 8.3			静止ホ切ナデ	

番号	分類	持因番号	出版ページ	出上地點	層位	法量(cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
坏	I.	SU16	149	N23E8	第1河道 堆積土	口径14.6 器高6.5 底径8.2			回転糸切	
坏	I.	SU17	149	N16E8	第2河道 堆積土	口径15.8 器高5.6 底径10.4			回転糸切	
坏	I.	SU18	149	N17F9	第2河道 堆積土	口径11.7 器高4.8 底径7.9			回転糸切?	
坏	I.	SU19	149	N18E8	第2河道 堆積土	口径13.6 器高6.2 底径8.2			回転糸切	
坏	I.	SU20	149	N11E3	第2河道 堆積土	口径11.9 器高8.3 底径4.5			回転糸切	
坏	I.	SU21	149	N26E8	第2河道 堆積土	口径12.6 器高5.8 底径8.0			回転糸切	
坏	I.	SU22		N10E7	第2河道 堆積土上	口径13.0 器高4.6 底径9.4			回転糸切後ナデ?	
坏	I.	SU23	149	N25E7	第2河道 堆積土	口径12.2 器高4.3 底径8.4			回転糸切	底部へ記号
坏	I.	SU24	149	N25E8	第2河道 堆積土	口径11.2 器高4.1 底径7.6			回転糸切	
坏	I.	SU25				口径2.9 器高11.0	口縁大きく開く		回転糸切	
坏	II.	SU26	149	N25R7	第2河道 堆積土	口径15.6 器高4.0 底径10.2			回転糸切	
坏	II.	SU27	149	N25E7	第2河道 堆積土	口径13.4 器高4.1 底径7.8	くびれわざか		回転糸切	
坏	II.	SU28	150	N12E7	第2河道 堆積土	口径13.3 器高4.2 底径7.0	口縁肥厚		糸切	
坏	II.	SU29	150	N12E7	第2河道 堆積土上	口径7.6 器高3.7 底径9.0			回転糸切(氯化?)	
坏	II.	SU30	150	N26E7	4-1 上部	口径13.2 器高3.8 底径9.5			回転糸切	
坏	II.	SU31	150	N12E7	第2河道 堆積土	口径13.0 器高4.7 底径4.0			回転糸切	
坏	II.	SU32	150	N25E7	第2河道 堆積土	口径14.0 器高3.3 底径9.8			回転糸切	
坏	II.	SU33	150		第2河道 堆積土	口径13.8 器高4.2 底径8.8			回転糸切	
坏	II.	SU34	150	N24E7	第1河道 堆積土	口径19.0 器高11.6 底径12.0			回転糸切	
坏	II.	SU35	150	N13E6	第2河道 堆積土上	口径17.0 器高6.1 底径10.0			回転糸切	
坏	II.	SU36	150	N26E7	第2河道 堆積土	口径16.8 器高7.4 底径7.0	渾身くびれ、内底鋸 い接		回転糸切	重ね焼成、自然物
坏	II.	SU37	150	N25E7	第2河道 堆積土	口径12.4 器高4.1 底径8.5			回転糸切	
坏	II.	SU38	150	N25E7	第2河道 堆積土	口径12.8 器高3.8 底径8.0	口縁肥厚		回転ナデ	
坏	II.	SU39	150	N25E7	第2河道 堆積土	口径12.8 器高4.3 底径8.4			回転糸切	
坏	II.	SU40	150	N13E8	第2河道 堆積土	口径12.8 器高4.5 底径8.4			回転糸切	
坏	II.	SU41	150	N26E8	第2河道 堆積土上	口径12.8 器高5.3 底径7.6			回転糸切	

器種	分類	種	図版番号	出土地点	層位	法量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
环	I.	SU42	150	N25E7	第2河遺 堆積土	口径12.8 器高 1.0 底径10.4			回転糸切	
环	I.	SU43	150	N26E7	第2河遺 堆積土	口径14.4 器高 4.2 底径 8.8			回転糸切	
环	I.	SU44	150	N10E7	第2河遺 堆積土上	口径11.9 器高 5.1 底径 7.8	深身		回転糸切	
环	I.	SU45	150	N26E8	第2河遺 堆積土	口径12.2 器高 4.4 底径 7.1			回転糸切	
环	I.	SU46	150	N11E8	第2河遺 堆積土上	口径11.8 器高 4.0 底径 8.0			回転糸切	
环	I.	SU47	150	N12E7	第2河遺 堆積土上	口径11.1 器高 4.2 底径 6.5	<びれわざか(口唇 肥厚)		回転糸切	
环	I.	SU48	151	N25E8	4	口径10.4 器高 4.2	深身くびれわざか		回転糸切	
环	I.	SU49	151	N25E7	第2河遺 堆積土	口径11.8 器高 4.2 底径 7.2	<びれわざか(口唇 肥厚)		回転糸切	
环	I.	SU50	151			口径11.8 器高 4.0 底径 7.8			回転糸切	
环	I.	SU51	151	N13E7	第2河遺 堆積土	口径10.8 器高 3.7 底径 6.4			回転糸切	
环	II.	SU52	151	N24E7	第2河遺 堆積土	口径13.0 器高 4.5 底径 9.4	II唇肥厚		回転糸切ナデ? (素誠?)	
环	II.	SU53	151	N12E7	第2河遺 堆積土	口径12.3 器高 4.3 底径 8.1	II唇肥厚		回転糸切	
环	II.	SU54	151	N25E7	第2河遺 堆積土	口径12.2 器高 3.5 底径 6.8			回転糸切	
环	II.	SU55	151			口径16.6 器高 5.0			回転ケメリ	
环	II.	SU56	151	N25E8	第2河遺 堆積土	口径16.0 器高 3.4 底径 7.3			回転糸切	
环	II.	SU57	151	N12E4	第2河遺 堆積土上	口径11.2 器高 3.9 底径 8.0			回転糸切	
环	II.	SU58	151	N26E8	第2河遺 堆積土上	口径11.8 器高 4.1 底径 7.8			回転糸切	
环	II.	SU59	151	N26E7	第2河遺 堆積土	口径12.2 器高 3.5 底径 7.5			回転糸切	軟質
环	II.	SU60	151	N26E7	第2河遺 堆積土	口径12.6 器高 3.7 底径 7.2			回転糸切	
环	II.	SU61	151	N11E4	第2河遺 堆積土	口径11.8 器高 4.3 底径 7.4			回転糸切	
环	II.	SU62	151	N25E7	第2河遺 堆積土	口径13.2 器高 4.1 底径 8.0			回転糸切	
环	II.	SU63	151	N26E7	第2河遺 堆積土	口径12.4 器高 4.2 底径 7.4			回転糸切	軟質
环	II.	SU64	151	N16E8	第2河遺 堆積土	口径11.4 器高 4.2 底径 7.6			回転糸切	軟質
环	II.	SU65	151	N26E8	第2河遺 堆積土	口径12.0 器高 3.9 底径 7.1			回転糸切	内面漆付着
环	II.	SU66	151	N17E7	第2河遺 堆積土	口径11.7 器高 3.7 底径 7.3			回転糸切	
环	II.	SU67	151	N13E7	第2河遺 堆積土	口径12.4 器高 3.7 底径 7.6			回転糸切	軟質

番号	分類	地図	出土地点	層位	法 量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
坏	I.	SU68	152	N19E9	第2河道 堆積土	口径11.9 器高4.5 底径8.4		回転糸切	軟質
坏	I.	SU69	152	N25E7	第2河道 堆積土	口径12.8 器高4.1 底径7.1		回転糸切	軟質
坏	I.	SU70	152	N19E9	第2河道 堆積土	口径12.6 器高3.4 底径7.4		半切？(磨滅)	
坏	I.	SU71		N17E8	第2河道 堆積土	口径11.0 器高3.7 底径6.0		回転糸切	軟質
坏	I.	SU72	152	N17E8	第2河道 堆積土	口径12.7 器高4.4		回転糸切	軟質
坏	I.	SU73				器高2.6 底径6.6		回転糸切	松江市保管
皿	I	SU74	152			口径18.2 器高4.4 底径15.0		回転糸切	松江市保管
皿	I	SU75	152	N25E7	第2河道 堆積土	口径19.0 器高3.9 底径15.2		回転糸切	
皿	I	SU76		N12E7	第2河道 堆積土	口径17.6 器高3.2 底径11.2	口縁大きく開く	回転糸切	
皿	I	SU77		N26E7	第2河道 堆積土	口径23.3 器高3.4 底径18.8		回転糸切	
皿	I	SU78	152	N12E7	第2河道 堆積土	口径17.3 器高3.9 底径10.3		回転糸切	
皿	I	SU79	152	N16E8	第2河道 堆積土	口径17.8 器高4.6 底径11.6		回転糸切	
皿	I	SU80	152	N15E7	第2河道 堆積土	口径17.9 器高3.0 底径11.2	口縁大きく開く	回転糸切	
皿	I	SU81		N16E8	第2河道 堆積土	口径17.7 器高4.4 底径11.6		回転糸切	
皿	I.	SU82		N17E9	第2河道 堆積土	口径11.5 器高2.1		回転糸切	
皿	I.	SU83	152	N22E6	第1河道 堆積土	口径12.8 器高3.1 底径7.9		回転糸切	
皿	I.	SU84	152	N16E8	第2河道 堆積土	口径13.0 器高1.7 底径7.6		回転糸切	
皿	I.	SU85	152	N25E7	第2河道 堆積土	口径15.6 器高2.0 底径8.0		回転糸切	
皿	I.	SU86	152	N18E9	第2河道 堆積土	口径14.6 器高2.9		回転糸切	
皿	I.	SU87	152	N26E7	第2河道 堆積土	口径13.6 器高2.2 底径7.1		回転糸切	
皿	I.	SU88	152	N20E6	4 上面	口径14.0 器高2.3	静止糸切		
皿	I.	SU89		N15E6	第2河道 堆積土	口径14.3 器高2.5		回転糸切	
皿	I.	SU90	152	N13E7	第2河道 堆積土	口径13.5 器高3.0 底径8.4		回転糸切	
皿	I.	SU91	152	N26E8	第2河道 堆積土	口径17.5 器高3.0		回転糸切	
皿	I.	SU92	152	N26E8	第2河道 堆積土	口径16.2 器高2.5 底径11.4		回転糸切？(磨滅)	
直筒型		SU93	153	N13E4	第2河道 堆積土	口径9.5 器高6.5	口縁内側		

分類	種別番号	国版 番号	出土地点	層位	法 量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
山頂型	SU94	153	N14E5	第2河邊 堆積土	口径11.2 器高 4.1	口縁外傾			
蛇頭型	SU95	153	N24E3	第2河邊 堆積土	口径13.5 器高 6.7	口縁外傾			
短頸型	SU96	152	N26E8	第2河邊 堆積土	口径10.4 器高 7.7 底径 8.0	口縁外傾		回転糾切	
短頸型	SU97	153	N13E4	第2河邊 堆積土	口径 6.4 器高 2.2	肩部張らず			
壺	SU98	152	N26E8	第2河邊 堆積土	口径 6.6 器高 8.6 底径 6.5	口縁外反、肩部張る		回転糾切	
広口壺	SU99	153	N26E8	第2河邊 堆積土	器高 5.1				自然輪
壺	SU100	153	N12E7	第2河邊 堆積土	器高 7.3	肩部に棱			自然輪
	SU101		N16E7	第2河邊 堆積土	器高 6.9			カキ目、ナデ、両面 におろし日状の調整 輪	内面に自然輪
長頸壺	SU102	153	N13E7	第2河邊 堆積土	器高 6.3	肩部丸い	直線文		
	SU103	153	N17E7	第2河邊 堆積土上	器高 7.4		波状文(クシ)	カキ目	自然輪、縫?
	SU104		N24E7	第2河邊 堆積土	器高 5.0		直線文		内面に自然輪、縫?
壺	SU105	152	N11E4	第2河邊 堆積土	器高 7.8 底径 4.9	底部高台、紙張		回転糾切後回転ナデ	
壺	SU106	152			器高 7.1	肩部張る	波状文(クシ)	カキ目、ヘラ切替ナ デ	自然輪
円筒観	SU107	153		第2河邊 堆積土	器高 1.8			円筒同心円外面平行 叩き	粗轍
壺	SU108	153	N16E7	第2河邊 堆積土	口径25.0 器高 7.9		直線文	カキ目	自然輪
壺	SU109	153	N16E8	第2河邊 堆積土	口径17.1 器高 2.7	口縁短く外反		カキ目	自然輪
壺	SU110	153		第2河邊 堆積土	口径16.8 器高 4.4	口縁拡大			うすい自然輪
壺	SU111	154	N27E6	第2河邊 堆積土	口径 8.3 器高21.3 底径10.0	口縁拡大、肩張る		糾切?回転ケメリ、 ナデ	
壺	SU112	153		4 上面	口径12.4 器高10.5	口縁面取			
壺?	SU113	153	N26E8	第2河邊 堆積土	器高10.6			回転ケメリ	
壺?	SU114	154	N25E7	第2河邊 堆積土	口径26.6 器高24.7	把手付		同心円平行叩き	
外?	SU115	155	N26E7	第2河邊 堆積土	口径17.9 器高 3.5 底径11.3			ヘラミガキ	瓦質土器
高环	SU116	155	N26E7	第2河邊 堆積土	器高 5.0 底径10.9	粗厚1段造孔			自然輪
高环	SU117	155			器高 3.1 底径11.0	側溝面取		回転ナデ	方形透し、 松江市保管
目?	SU118	155						糾切ナデ、回転糾切 り、高台結合部にて 糾切痕	松江市保管
壺	SU119	155			口径44.0 器高 2.7	口縁端部肥厚	波状文	回転ナデ	松江市保管

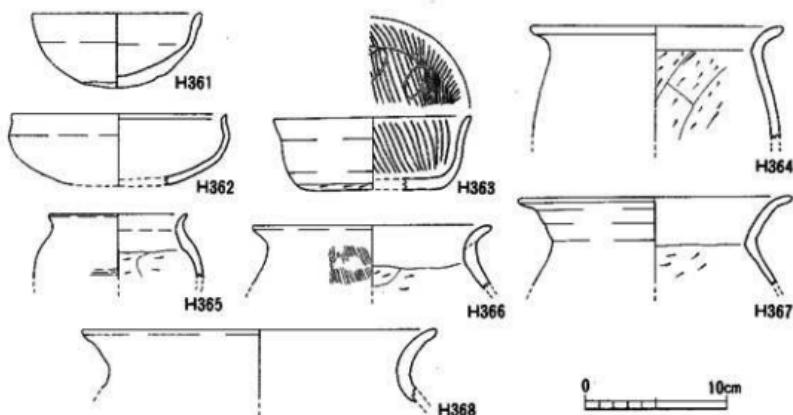
器種	分類	挿図番号	図版ページ	出土地点	層位	法量(cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
下水道?		SU120	155		第2河道 堆積土				ハケ目、ナデ	非常に軽い
瓦器類		SU121	155						回転ナデ	表面艶化 松江市保管
瓦器類		SU122	155		器高 2.6 底径 9.8				回転糸切、回転ナデ	表面艶化 松江市保管
		SU123	114	N11E8	4	器高 5.0		直線文間に波状文		自然釉。題か?
窯坏		SU124	114	N26E7	4-1	器高 5.6		三角形通孔		
		SU125	114	N26E7	4-1				格子押き、ナデ	
		SU126	114	N18E9	5			実線文+波状文、上端に円形通孔		質?

(2) 土師器

杯および甕が出土している。

杯（第170図H361～363 図版115） H361・362はともに丸底であるが、H361は深身の杯である。H363は平面で口縁部が外反する。内面には放射状およびラセン状の暗文が施され、底部は糸切後周辺に回転ヘラ削り調整が施される。

甕（第170図H364～368 図版115） 口縁部が短く外反するもの（H364～366）と長く外反するもの（H367・368）とがある。H365は口縁部が非常に短く、類例の少ないものである。



第170図 第2河道出土土師器 1:4

以上の土師器は、当方での具体的な編年研究がないため詳細な時期は不明であるが、第2河道内で共に出土した須恵器の時期と考えて矛盾はないと思われる。

(3) 土師質土器

第1河道中からは土師質土器がまとめて出土した。壺、皿、脚などがある。

壺（第171図 MH1～14 図版156） 有高台のものをI、無高台のものをIIとした。

I（第171図 MH11～13 図版156） 体部はわずかに内湾しながら伸び口縁部は大きく開く。底部周辺に高台を付けるが、MH11・13はベタ高台状の底部周辺に接して高台が貼り付けられているため、高台は実際より高く見える。MH12・13の底部は、回転糸切未調整、MH11は回転ナデ調整が施されるが糸切によると思われる。高台貼り付け手法は鳥取県郡家町山田2号塚出土須恵器の高台と似た手法である。

II₁（第171図 MH1・3～8 図版156） 無高台で口縁部が大きく聞くもののうち、口縁部が内湾せずに直線的なもの。MH4は須恵質であるが他は土師質である。底部はいずれも回転糸切未調整である。MH3・5の体部にはヘラ状工具による沈線が廻っているが、調整の一つであろうか。

II₂（第171図 MH2・9・10 図版156） 無高台で口縁部が大きく聞くもののうち、口縁部が内湾するもの。底部はMH2が静止糸切である以外は回転糸切である。MH9は胎土に石英などの砂粒が多く含まれ、他の土器と雰囲気が大きく違う。

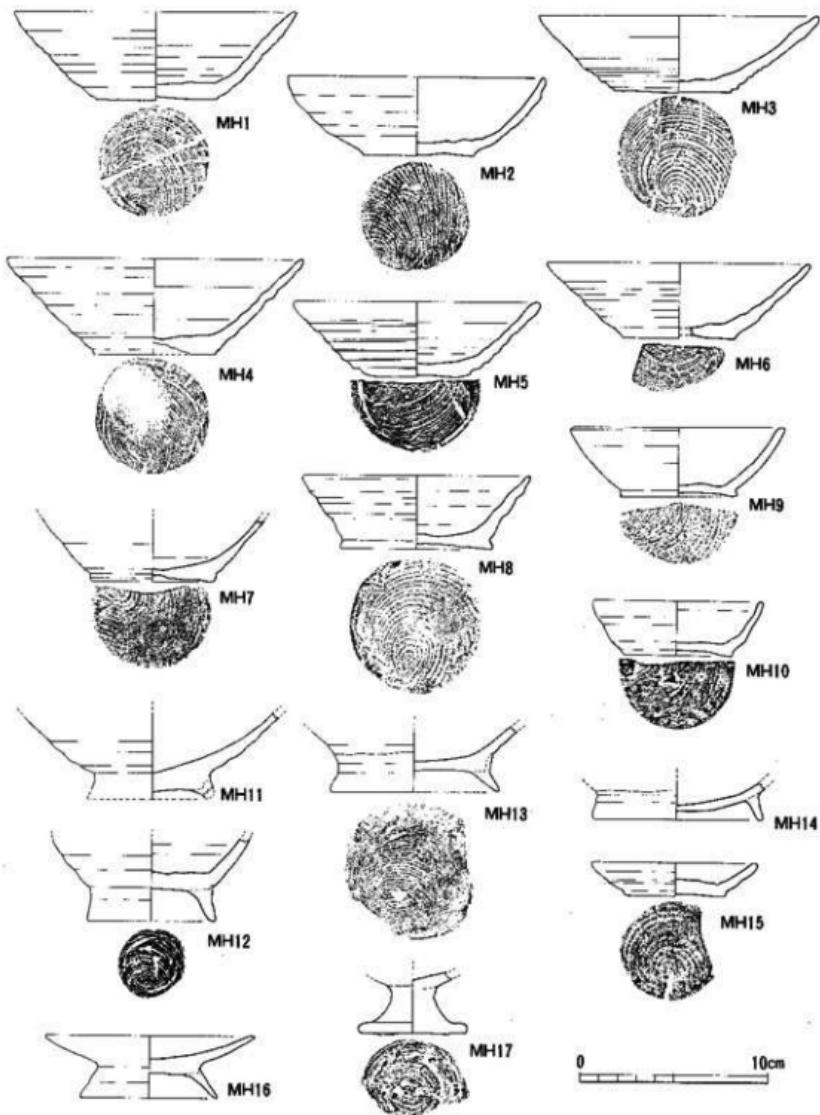
壺I・II類は一般には中世土師質土器と呼ばれているが、MH4のように須恵質のものがある。両者は器形、技法とも全く同じで単に質が違うだけであり、両者の焼成技術に違いがあるか甚だ疑問である。色調だけでこの時期の土師器、須恵器を区別することは困難であるため、名称に若干問題はあるが、土師質土器として括して扱った。

黒色土器（第171図 MH14 図版156） 高台が付く碗形のもので、底部が丸味を持つ。内面にヘラミガキが施され、黒色を呈し、外面には赤色顔料が塗布されている。全体の器形、高台の形状など壺I・II類より古い様相が窺えるが詳細は不明である。

皿（第171図 MH15・16 図版156） 無高台の小型のもの（MH15）と有高台のもの（MH16）とがある。底部は前者が回転糸切未調整、後者がヘラ切りである。MH16の高台は壺I類と同様の手法で付している。

脚（第171図 MH17 図版156） 柱状を呈する脚で、回転糸切によって切離され未調整である。

以上の上器は松江市石台遺跡、天溝谷遺跡と似た様相を呈している。両遺跡での土器が伴出陶磁器から平安時代末から鎌倉時代に当たられていることから、上述の土師質土器も概ね当該期と思われる。



第171図 第1河道出土土師質土器 1:3

註

註1 島根県教育委員会『石台遺跡』 1986

註2 島根県教育委員会「天満谷遺跡」『北松江幹線新設工事松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1987

土師質土器一覧表

器種	分類	類番号	出土地点	層位	法量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
杯	II	MH1	156 N20E6	第1河運 堆積土	口径15.2 器高 4.7 底径 6.5			回転糸切	
杯	II	MH2	156 N22E8	第1河運 堆積土	口径13.8 器高 4.2 底径 5.7	口縁内湾		静止糸切	
杯	III	MH3	156 N24E7	第1河運 堆積土	口径15.1 器高 4.1 底径 6.4			回転糸切、沈縞状の 調整	
杯	II	MH4	156 N20E6	第1河運 堆積土	口径16.0 器高 5.1			回転糸切	須恵質
杯	III	MH5	156 N21E6	第1河運 堆積土	口径13.4 器高 4.0 底径 5.7			回転糸切、沈縞状の 調整	
杯	II	MH6	156 N24E8	第1河運 堆積土	口径14.4 器高 4.0 底径 6.2			回転糸切	
杯	II	MH7	156 N21E6	第1河運 堆積土	器高 3.3 底径 6.4			回転糸切	
杯	II	MH8	156 N20E5	第1河運 堆積土	口径12.4 器高 3.9 底径 8.2	口縁細い		回転糸切	
杯	II	MH9	156 N22E8	第1河運 堆積土	口径13.6 器高 3.7 底径 6.4	口縁内湾		回転糸切	胎土砂粒多く含む
杯	III	MH10	156 N24E9	第1河運 堆積土	口径 9.2 器高 2.9 底径 5.6	口縁内湾		回転糸切	
杯	I	MH11	156 N24E8	第1河運 堆積土	器高 4.5				
杯	I	MH12		N21E6	第1河運 堆積土	器高 4.4 底径 6.8		回転ナデ	
杯	I	MH13	156	第1河運 堆積土	器高 3.5 底径 9.0			回転糸切	
杯		MH14	156 N24E9	第1河運 堆積土	器高 2.0 底径 9.1			内面、ヘラミガキ、 ヨコナデ	赤色塗彩、内墨土器
皿		MH15		N24E9	第1河運 堆積土	口径 9.0 器高 1.8 底径 5.4		回転糸切	
皿		MH16	156	第1河運 堆積土	口径11.4 器高 3.3 底径 7.4	口縁細く直線的に開 く		ヘラ切り	
脚		MH17	156 N23E8	第1河運 堆積土	器高 3.3 底径 5.8			回転糸切	

(4) 陶磁器・中世須恵器

第1河道中から出土しており、後述の順札とともに第1河道の年代を示すものである。青磁、備前焼のほか產地不明の陶器、須恵器が出土している。

青磁碗（第172図C1・2 図版157） 2点出土している。ともに蓮弁は細く表現は忠実ではない。C2の内面には線刻による花文がみられる。これらは15世紀末～16世紀初頭と考えられる。

李朝陶器（第172図C3 図版157） 盆が1点出土している。内外面、高台裏面に暗緑色の釉がかかり、高台および内面底部には目痕が残る。16世紀頃のものと思われる。

白磁碗（第172図C7 図版157） 小片が1点出土した。体部下半から高台にかけての少片で、外面下部は無釉である。

備前陶器（第172図C4～6・10・14・第173図C16～18 図版157・158） 大型、小型の壺、擂鉢、甕が出土している。C4は小型の壺底部である。底部は前出し高台がつけられ凹み底となり「上」のヘラ記号がみられる。

C18は大型の壺の底部である。C5、16、17は擂鉢、その他は壺、甕の小片である。このうちC6の破面には漆が付着しており、欠損後漆で接合していたようである。C10、C11は口縁、頸部の小片で、C11の外側にはうすく釉がかかっているが人為的な釉か否かは不明である。この2点は色調など備前焼に似るが、器形が備前の甕、壺と若干違うため別の產地の可能性もある。

軟質陶器（第172図C9・13・15 図版157・158） 焼成温度があまり高くないと思われる陶器で、一見土師器のようにも見える。いざれも胎土は精選され、砂粒はほとんど観察できない。器面はハケ目、ナデで調整される。C15は胴部が屈曲するもので、肩部に花形のスタンプ文が施される。

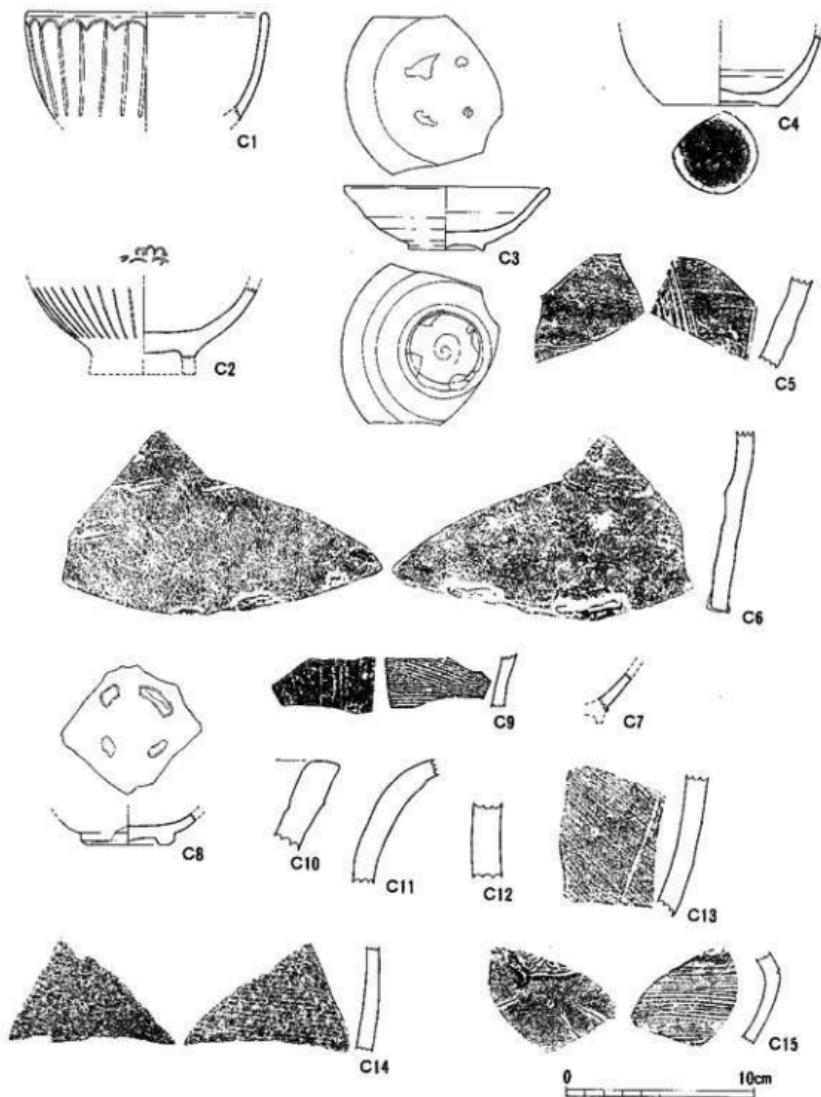
產地不明陶器（第172図C8 図版157） 白釉のかかる底部片である。内面と外面の一部に白釉がかかっているが、底部外面と体部下半は無釉である。内面底部には目痕がある。

須恵器（第172図C12・第173図C19 図版157・158） 古代の須恵器とは思われないもので2点図示した。C12は小片で器種不明であるが、C19は片口の鉢である。

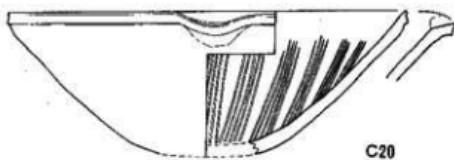
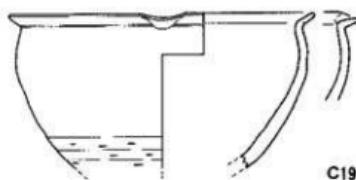
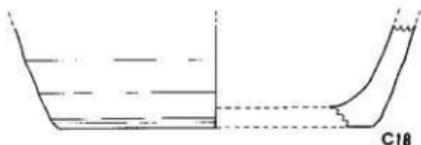
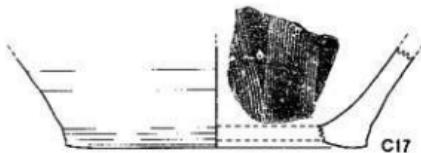
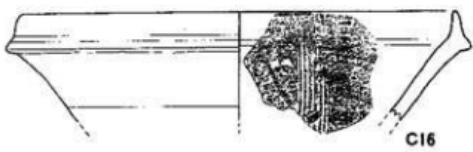
瓦質陶器（第173図C20 図版158） 片口擂鉢が1点出土した。胎土は瓦質で空孔が目立つ。口縁部はあまり拡大せず狭い凹面をなす。内面には6～7条1単位のクシ目が施されている。

以上の陶磁器群は、15世紀末から16世紀初頭頃と考えてさしつかえない。これは第1河道内から出土した古銭（永楽錢、祥符通宝）の使用年代、順札に記された年号（「天正十六年」1588年）とも矛盾しない年代である。

（陶磁器の年代は広島県立美術館・村上 勇氏に御教示いただいた。）



第172図 第1河道出土陶磁器(1) 納目は漆 1:3



第173図 第1河道出土陶器(2) 1:4

陶磁器一覧表

器種	分類	拂区番号	図版 ページ	出土点	層位	法量 (cm)	形態の特徴	文様の特徴	手法の特徴	備考
青磁碗	C1	157	N24E9	第1河遺 堆積土	口径12.5 脚高5.8			縦状の蓮弁		
青磁碗	C2	157	N18E5	第1河遺 堆積土	高さ3.8			縦状の蓮弁、内側花 文		
青磁皿	C3	157	N24E9	第1河遺 堆積土	口径11.1 脚高3.3 底径4.2				内外面に目跡 削出高台	表面全面に緑色釉
青磁蓋	C4	157	N23E8	第1河遺 堆積土	高さ3.8 底径6.2				回転ナデ、削出高台 [上]のテラ記号	
青磁盤	C5	157	N19E5	第1河遺 堆積土					下ろし口6条、回転 ナデ	
青磁盤	C6	157	N19E5	第1河遺 堆積土					ナデ	板面に油
白磁碗	C7	157	N23E8	第1河遺 堆積土					一部無物	
青磁碗	C8	157	N19E5	第1河遺 堆積土	高さ1.7 底径4.4				内面目跡、底部無物	白釉、底地不明
	C9	157	N24E9	第1河遺 堆積土					ナデ、ハケ目	土師質
青磁	C10	157	N18E5	第1河遺 堆積土					回転ナデ	焼前?
青磁盤	C11	157	N24E9	第1河遺 堆積土					ナデ、うすく動	焼前?
青磁	C12	157	N23E8	第1河遺 堆積土						釉質
青磁	C13	157	N22E8	第1河遺 堆積土					ハケ目	
青磁	C14	157	N23E8	第1河遺 堆積土					ナデ、ハケ目	焼前?
青磁	C15	158	N24E9	第1河遺 堆積土	高さ4.8		花透文(スタンプ?)	ハケ目、ヨコナデ	無物	
青磁盤	C16	158	N23E8	第1河遺 堆積土	口径30.6 脚高7.8			回転ナデ、下し口6 条		
青磁盤	C17	158	N23E7	第1河遺 堆積土	高さ7.2 底径22.0			回転ナデ、下し口16 条		
青磁盤	C18	158	N18E5	第1河遺 堆積土	高さ7.2 底径22.4			ナデ、回転ナデ		
片口鉢	C19	158	N24E8	第1河遺 堆積土	口径22.4 脚高11.1			回転ナデ、回転ケズ リ	釉質	
酒杯	C20	158	N21E6	第1河遺 堆積土	口径29.0 脚高11.0			ナデ、6~7条のク シ目	瓦質	

(5) 木製品

当遺跡出土木製品はⅣ-9で記したように弥生時代～古墳時代に属すと推定される群の他に、以下に記すような歴史時代に属すものも多量に出土した。これらの中には建築部材と推定されるものも若干あるが、人形代・椀・曲物・順礼札・塔婆・刃物類柄・下駄等があつて、前者と対比すると農耕具類の量が少ないことが注意される。

以下第1河道・第2河道出土木製品の順にその概要を記していくことにしたい。

第1河道出土木製品

人形代（第174図W198～201 図版159） 人形代と考えられるものは計4点出土した。これらは形態のうえから三種類に分けることができた。

その1類はW198にみられるように短冊形の板に両側辺から「L」字形の刺込みを4ヵ所入れることによって、頸と腰のくびれを表現するものである。上方端部には鰐様の加工が認められる。一方下端木口には浅く「V」字形の削り込みを入れることによって脚端部を表現している。全長56.8cmを測り、今回出土したものの中では最も大きいものである。

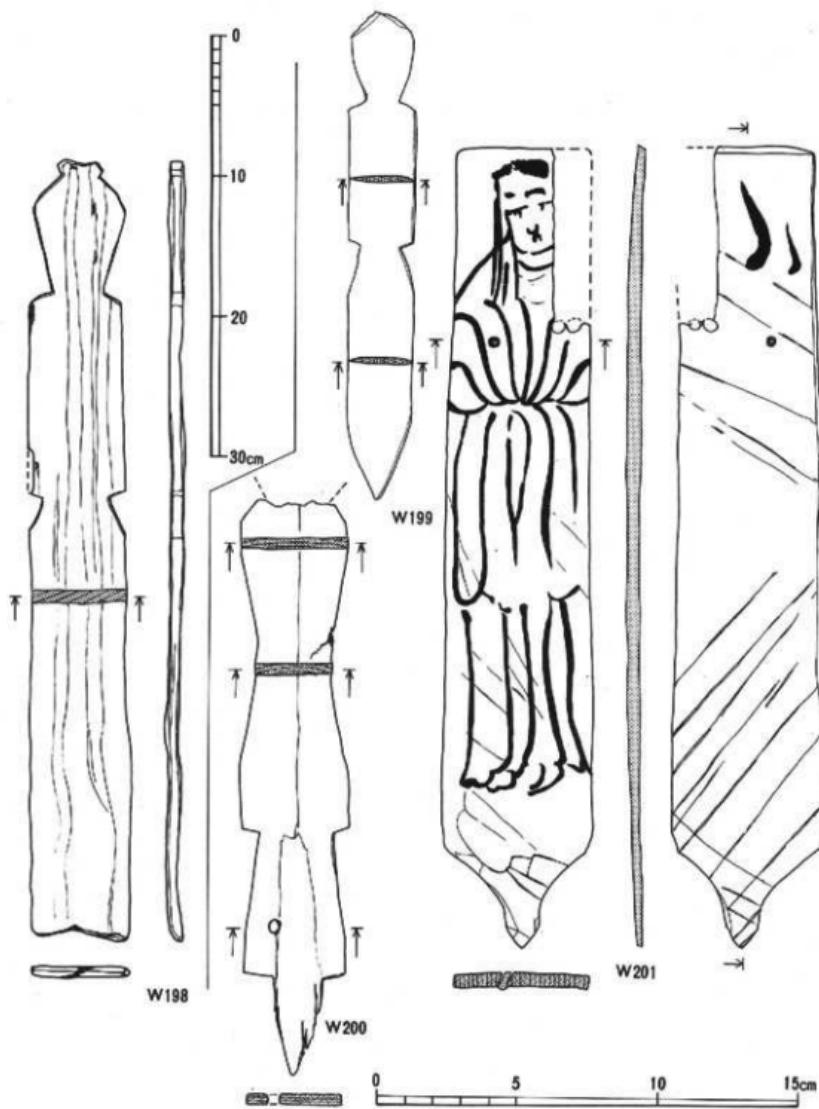
2類としたW199・200は前記したものと比較すると、頭部や腰部の表現方法はほとんど変わらないが、脚端部が剣形に鋭く尖るところに大きな特徴がある。W199は良質の柾目板を使用するもので、全形をうかがうことができる。W200は頭部を欠損するもので、肩部はナデ肩、腰部は両側辺から弧を描いて浅く削り込まれる曲線によってくびれが表現されている。この下方には両側から逆「L」字形の削り込みを上下2段にわたって施すことによって、柄状の端部が作り出されている。この柄状を尾す部分は両辺から削り込まれ、剣形に鋭く尖る。脚部の中央よりやや左側に径0.4cmを測る貫通孔が認められる。

3類としたものはW201で、短冊形の板の下端を両辺から削り込んで尖らせるものであるが、W199・200ほど鋭くない。

表面と考えられる一面には肩まで髪をたらした女性とみられる全身像が墨で描かれている。

この人物が身にまとっているのは深衣を思わせる衣服である。²¹胸のやや下方で両方の袖口を合わせているものと推測される。合わせた袖口に向って上方から8条の縫を現した線が集中するように描かれている。これは身と衣服との間にかなりの余裕があることを示す表現であろう。

一方両袖口を合わせていると推測した部分下方には6条の線が描かれている。左側端の線は袖下から出発して下方へ下り、膝のあたりで、「U」字形を描いて再び上方へ向い、袖口下で止っている。右側端の線は下方でややかすれているが、同様な曲線を描こうとしたのであろう。これらの線に囲まれて、袖口下方に流線形の表現が見られる。両側端の相対する「U」字形の曲線は現在の和服でいうところの中振袖の袂下端にあたるものであろうと考えられるが、その中央の流線形の表現



第174図 人形代実測図(50) 1:4 1:2

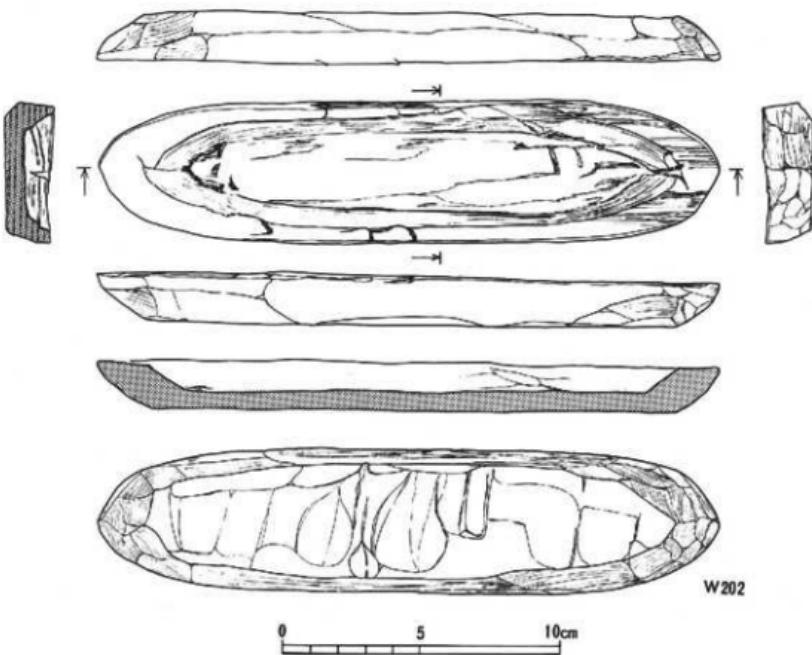
が何であるのか判断しがたい。一案としては長い帯を胸下で結び、両端を膝のあたりまで垂下させている。もう一案としては袖口から垂下する袂の表現とするものである。膝より下方にも衣の裾が描かれ、脚の甲のあたりまで垂下する形となっている。

人物の右胸に径0.3cmの木釘が貫通している。左側上隅を欠損しているものの径0.3cmを測る貫通孔が2個横に並んで穿たれている。

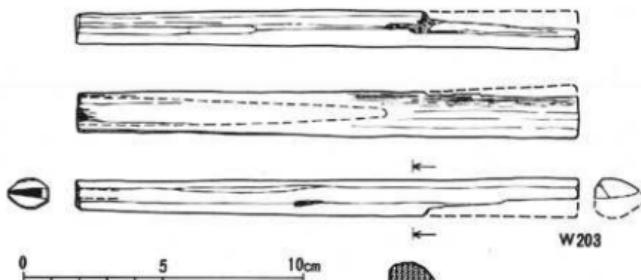
裏面上方には若干墨痕らしいものが認められるものの、かすれていますため詳細は不明である。墨痕の下方及び下端にかけて剃刀状刃物によったと考えられる擦痕が認められる。

この人形代の性格についてであるが、絵画あるいは偶像として礼拝や観賞の対象とされたものであれば、釘は図像の輪郭から外して打たれるはずであろう。さらに釘の位置が胸であることを重視すれば、これは図像のモデルとなる人物を呪う目的で使用された呪詛札と考えられる。

図像の人物が女性であるのか、男性であるのか議論の分かれるところであるが、いずれにしろ、服装としては膝まで垂れるような袂をもつものであり、機能的とはいいがたいものである。このこ



第175図 舟形木製品(51) 1:2



第176図 刀子柄実測図(52) 1:2

とからすれば、高位の人物であった可能性が高い。^四

舟形木製品（第175図W202 図版160） 長さ22.2cm・幅5.1cmを測る板目材を削り貫いて作ったものである。

両端とも同様な形態をしており、舳と舳の表現はなされたものと思われる。底部は内・裏面とも平底となっている。

刀子柄（第175図W203 図版160） 柄頭を若干欠損するが一応全形をうかがうことができるものである。

横断面は略倒卵形を呈し、柄頭が最も太く、茎挿入孔の穿たれている木口に向って徐々に細くなり、両端木口の形態は相似形をなす。柄の腹の部分には端部から一方の端部まで接線が走り、握った際、手に馴染みやすい配慮がなされている。茎挿入孔は二等辺三角形を呈すもので、木口には棟関の圧痕が認められる。茎挿入孔は意外と深く、柄の長さの2/3に及んでいる。なお茎挿入孔内には若干の鉄錆が残存していた。

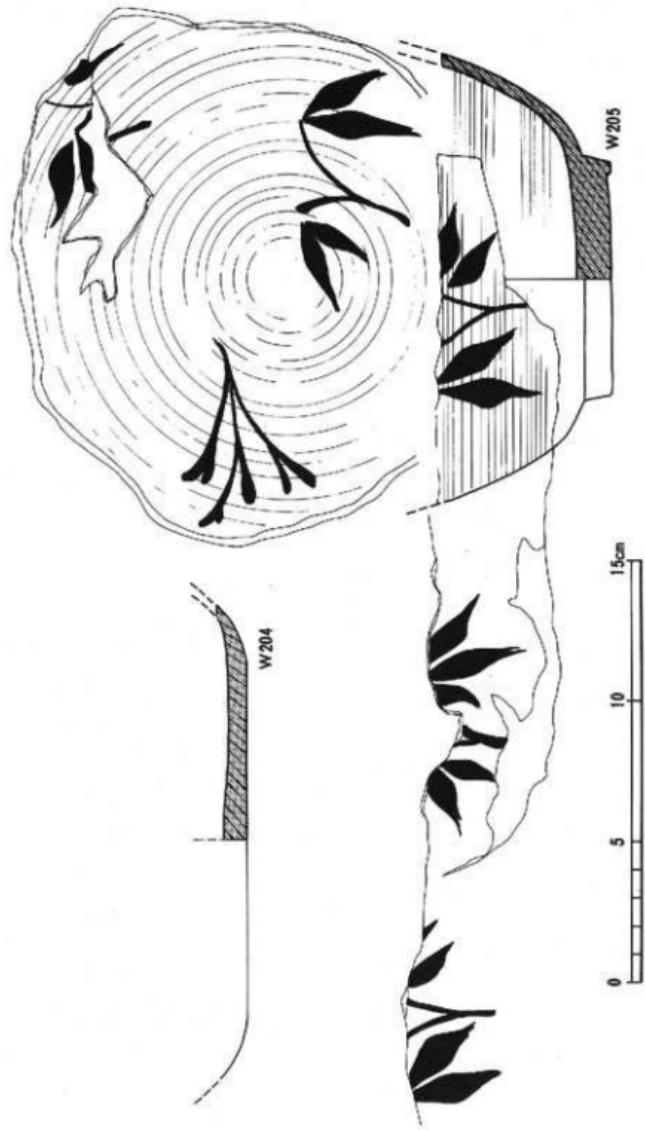
皿（第177図W204） 底径13cm、底部の厚さ0.9cmを測る木皿である。散孔材を用いるもので、漆が塗布されたか否かは不明である。

漆塗椀（第177図W205 図版160） 底径8.4cm、残存高5.9cmを測る大ぶりの漆塗椀である。内外面とも粗いクロ目が残存している。高台の立ちあがりはさほど高くはないが、裏面はわずかにくぼめる程度としている。内外面とも黒色漆を塗布するが、高台裏面には認められない。

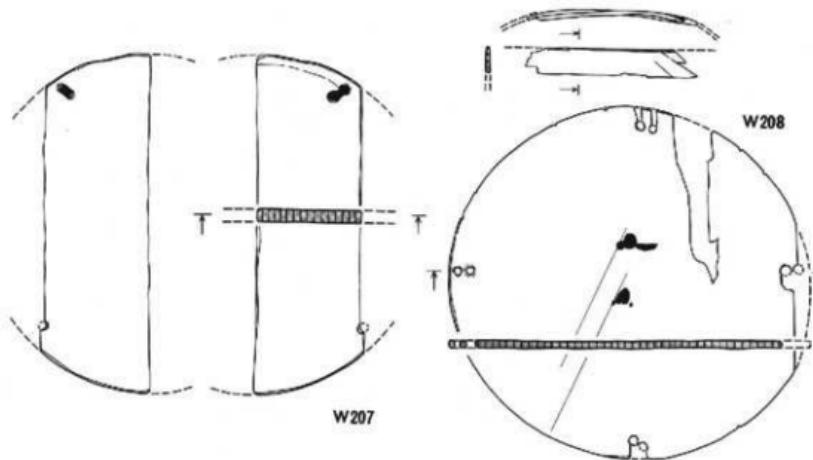
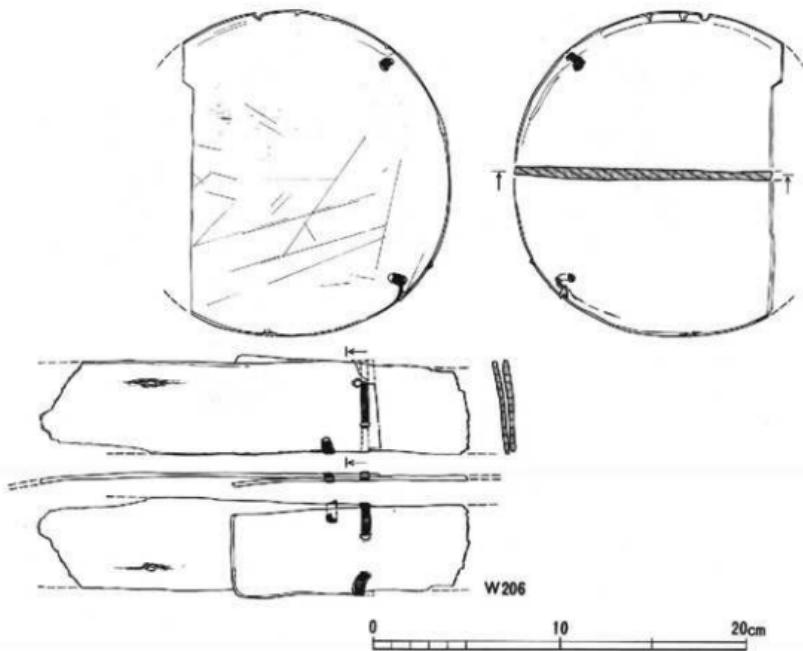
内外面とも黒色漆を塗布した後、赤色（朱）漆を用いて木の枝を思わせる文様が描かれている。^四

内面には4枚の葉を付けた双枝に分かれる小枝と、先端部が肥厚した小枝のような圓柄を三方に描く。外面には内面で見られたものと同様な4枚の葉を付けた小枝をほぼ等間隔の位置に描く。

この漆絵の筆跡は力強く自由に描かれていた観がある。



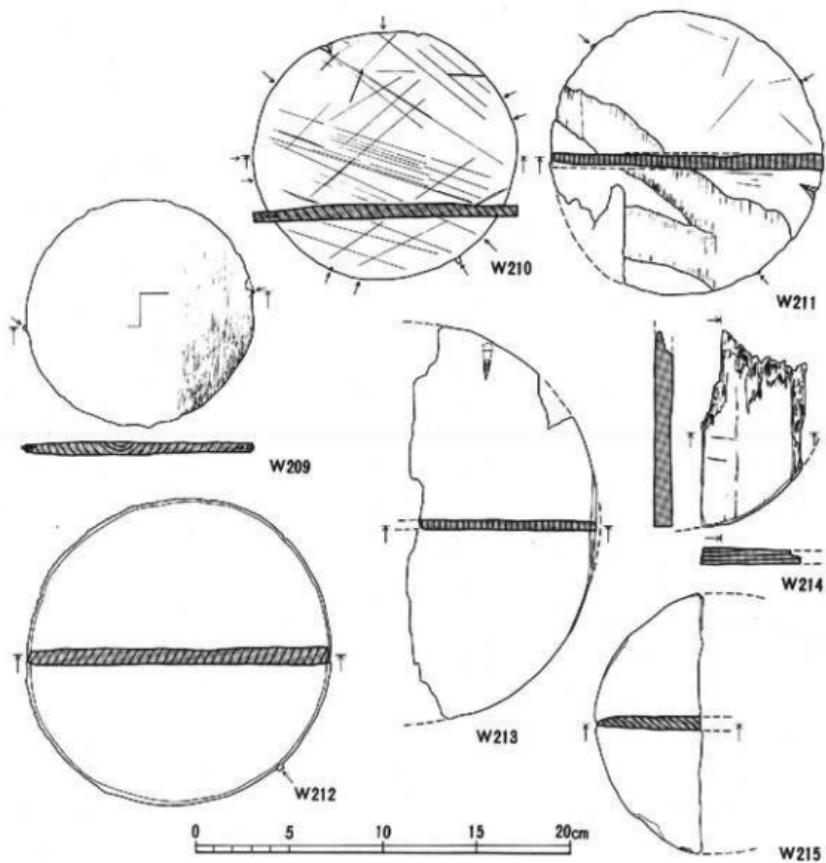
第177図 Ⅲ・桃実測図(53) 1:2



第178図 曲物実測図(54) 1:3

円形曲物（第178図～180図） 今回の調査で出土した円形曲物は原形に復元しえるものはなく、底部の円板状の一部か、側板の一部であった。これら円形曲物は側板と底部の接合に桜皮を用いるもの（W206～208）と木釘を打ち込むもの（W210～213、矢印は木釘の位置を示す）とがある。

W206は左側に示したものが外面、右側が内面である。左側の面には剃刀状の刃物によつたとみられる擦痕が認められる。円辺に沿つて1対の小孔が13cm間隔に穿たれている。この孔内には桜皮が残存している。右側の内面にあたるものには1対の小孔間に側板の圧痕が認められる。ここには下に図示した幅5cmを測る側板が固定されていたのであろう。



第179図 曲物実測図(55) 1:3

W206～208はいずれも桜皮を用いて側板と固定されるもので、底部径も17.6cm前後と規格性が認められる。

W209は凸形底板の側面に相対して計2本の木釘が打ち込まれている。

W210も同様な木釘が計10本打ち込まれている。図示した面には剃刀状の刃物によったとみられる擦痕が見られることから、この面が外面であろう。

W211は磨滅が著しいものであるが、前述したものと同様な木釘が3本残存しているが、等間隔に打ち込まれていたとすれば、欠損している部分に、もう1本あった可能性がある。

W212は側面木口に1本木釘が認められるだけである。

W213は底板の側面付近裏面から打ち込まれた木釘の先端が内面に突出している。

W214・215はかなり欠損しており、木釘痕も認められていないが、桜皮を用いた痕跡も見られないもので、W212例のような少數の木釘で固定した可能性も考慮し、ここに含めておいた。

W216は残存長約44cm・幅6cmを測る側板の破片である。図の上方に示したのが側板の内面で、側板の木理に対して直交する方向に、約1cm間隔で5条剃刀状の刃物による刻み目が認められる。これは側板を湾曲させる折の配慮である。側板の継ぎ方は一種の殺ぎ接ぎ^{テラハ}とでも称すもので、互の接合面を斜めに薄く削って重ね、2cm間隔で穿孔した後、その孔に桜皮を通して固定している。この部分の上辺には「コ」の字形の刺り込みを入れ、この部分に前記した桜皮がはまり込む形となっている。

この側板には下辺から1cm上方に梢円形の小孔が10cm間隔で認められるので、底板との固定は桜皮で行われたのであろう。

W217は上方に図示したものが内面と考えられるもので、1対の小孔の中央に幅0.4cmを測る側板の圧痕が認められる。

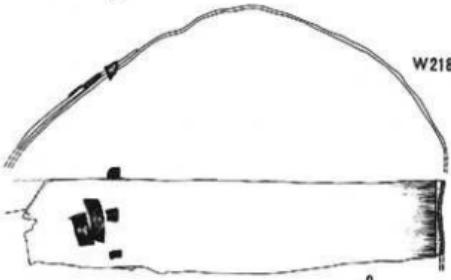
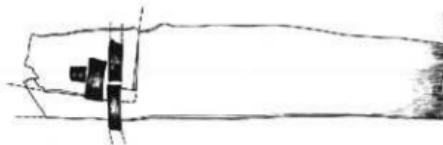
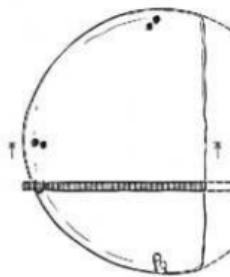
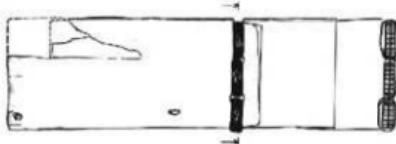
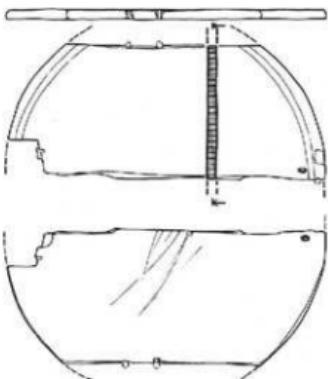
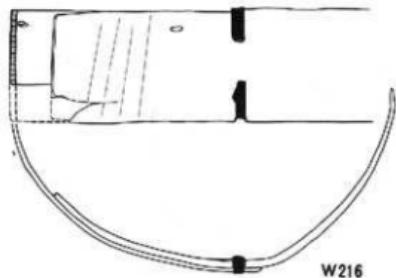
W218は側板の破片で厚さ0.2cmを測る。W212と同様、殺ぎ接ぎをしたものである。

W219は底板内面を図示したもので、1対の貫通の小孔がほぼ等間隔に3ヶ所穿たれている。各小孔を結ぶように側板の圧痕がめぐっている。上方、左方の小孔には桜皮が残存している。

W220は大半を欠損した半月形を呈す底板で、1対の小孔間に側板の圧痕が認められる。他のものと比較すると周辺の加工等雑な感じを受ける。

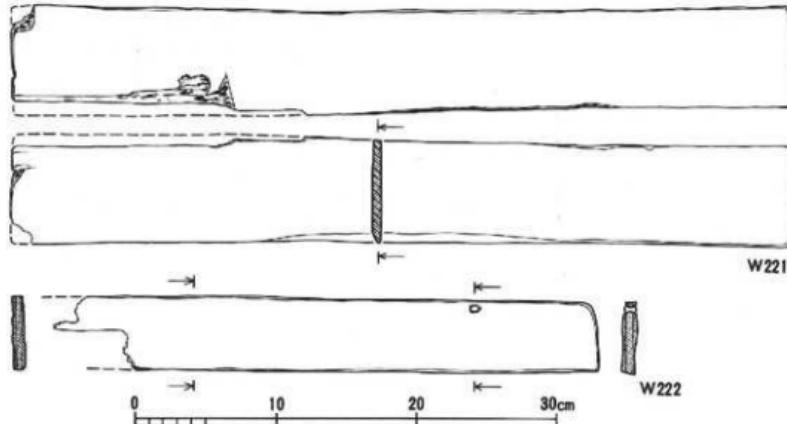
折敷（第181図W221・222） いずれも平面長方形を呈すもので、折敷の底板の破片と考えられる。W221は良質の柾材を使用している。W222は図示したものの右上隅がやや丸味をおびており、折敷の底板隅と推定される。小孔が1対をなさないのは底板固定に木釘打ち付け等の方法によったからであろうか。

用途不明木製品（第182図W223～227） W223は扇骨状木製品としたもので、左端を欠損してお



0 10 20cm

第180図 曲物実測図(56) 1:3



第181図 折敷底板実測図(57) 1:4

り、全体の形態は不明であるが、薄い板状の両辺を細く削り、右端部分を丸く面取りしたものである。右端から1.8cmの位置に径0.6cmを測る貫通孔が穿たれている。一方の側面には右端から左方へ10.1cmと14.2cmの位置に径0.2cm、深さ0.2mmを測る小孔が認められる。

W224は円柱状を呈す粧目材の両端を、コケシの頭の形態に加工したものである。中央部の横断面は正円に近い。

W225は円柱状を呈す芯持材の上方を四角錐形に加工し、それを半蔵したような形態を呈す。

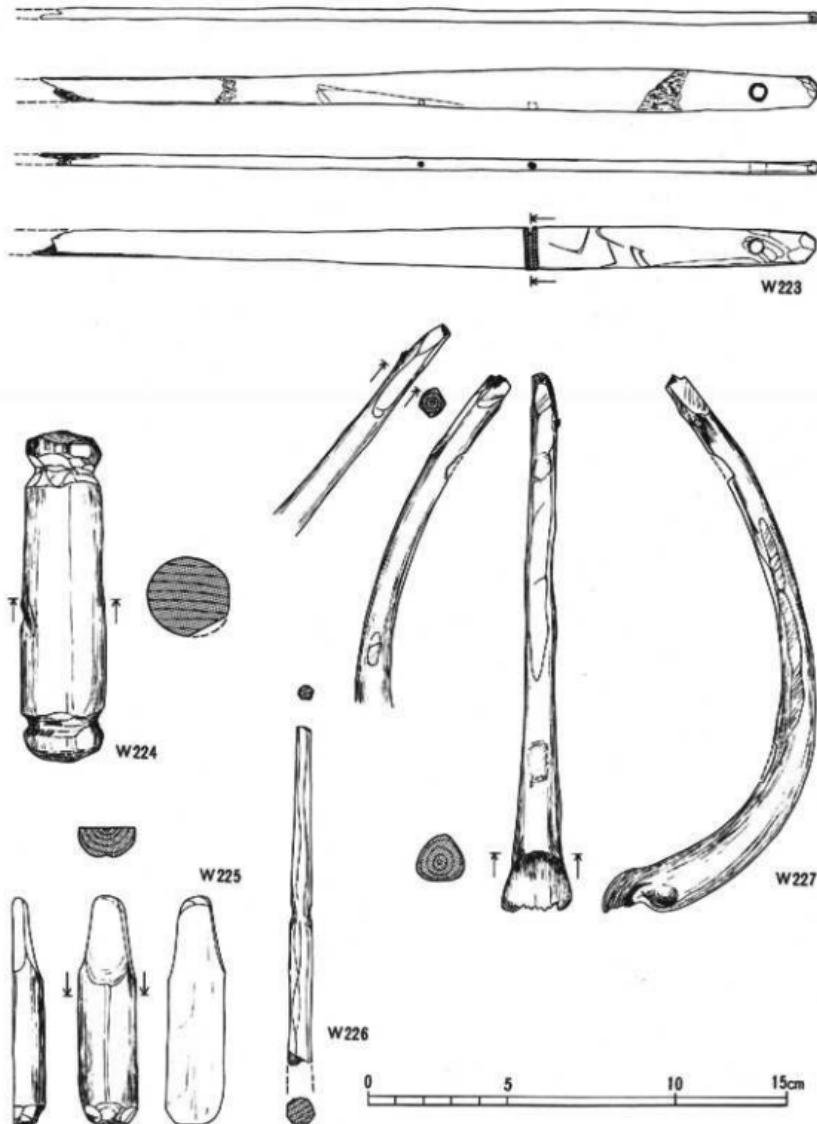
下端部は粗い面取りがなされる。

W226は縦方向に粗い面取り加工をする箸よりやや太い木製品である。横断面は不整形な多角形を呈す。中央部分にややくびれたところがあり、ここは帯状に磨滅している。

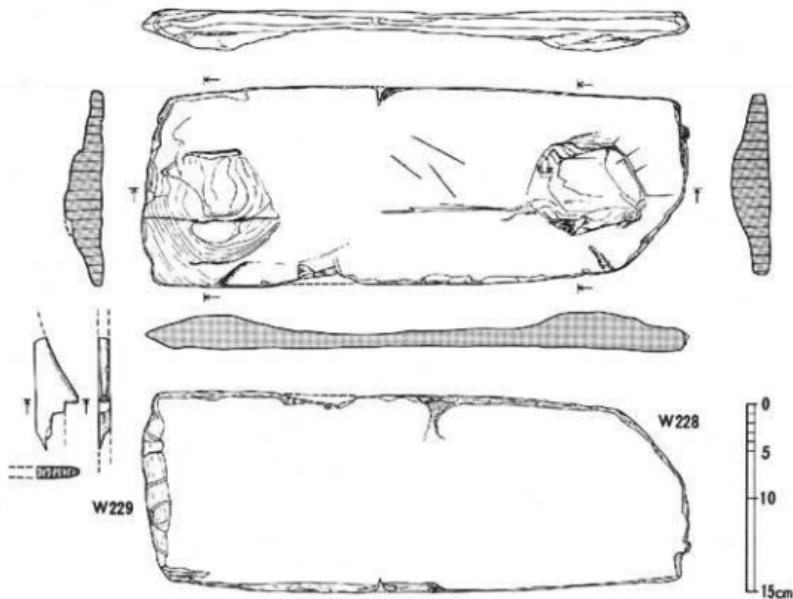
W227は弓なりに湾曲する芯持材の先端を削って、断面略方形とするものである。この材が湾曲しているのは人為的なものではなく、伐採以前に枝の先端に衝撃を受け折れたがらも、先端部が完全に折り取られない場合によく見られるものである。下部のこぶ状を呈す部分が衝撃を受けた位置であることを示している。

農具類（第183図～第184図） ここで農具類としたのは鋤・鍬未成品、横柵である。これらの出土位置は第2河道内であるが、IV-9の木製品のなかで記したものと類似していることが注意される。

これは第2河道の流水によって包含層から削り出された可能性が極めて高いものである。第2河道の出土の木製品と分離して掲載することも考えてはみたが、一応、ここに含めておいた。



第182図 扇骨形木製品・把手状木製品・先端加工木製品実測図(58)



第183図 鋤B1・鍔未成品実測図(59) 1:6

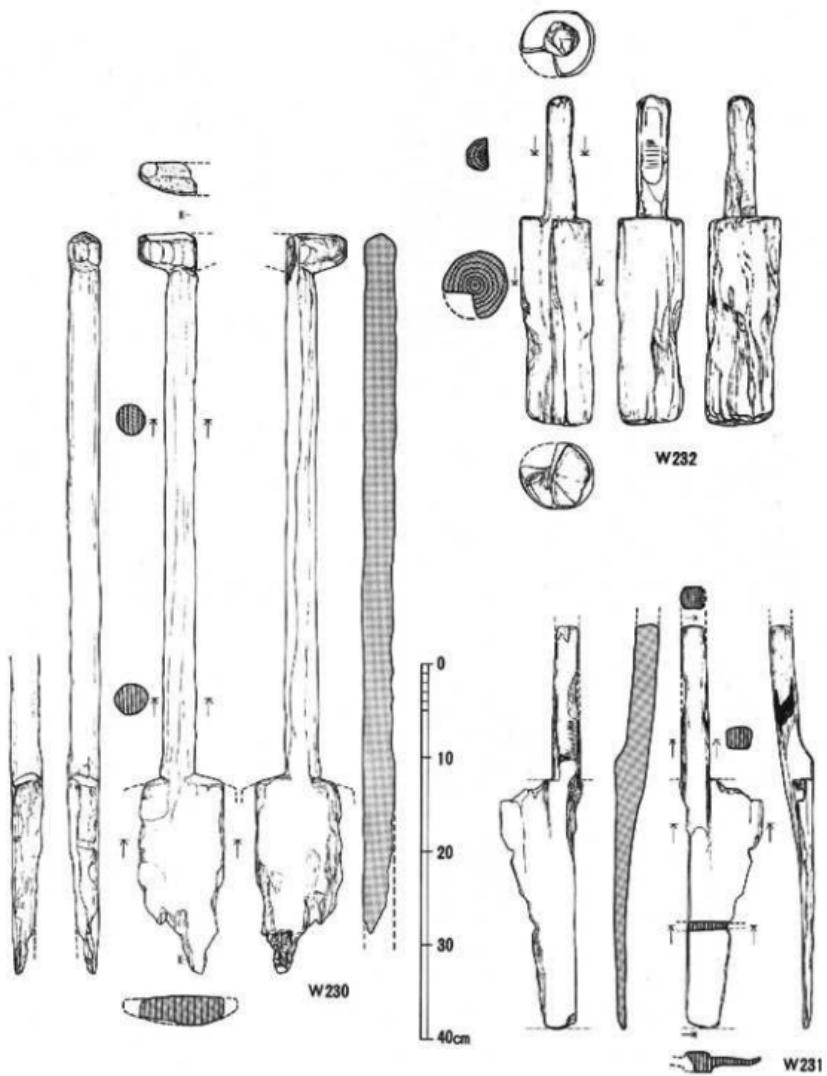
W228は鍔の未成品で、上方に図示した面には、両方の端辺に近い部分に不整多角形を呈す船形隆起が粗く削り出されている。下方に図示した面はほぼ平坦となっている。この面の上辺中央と下辺中央には狭くかつ浅い溝が認められる。これは以後この部分から分離切断しようとするための目印と推定される。

この部分から切断されたものとすれば、長さは両者とも30cm前後となる。広鍔の未成品と推定される。

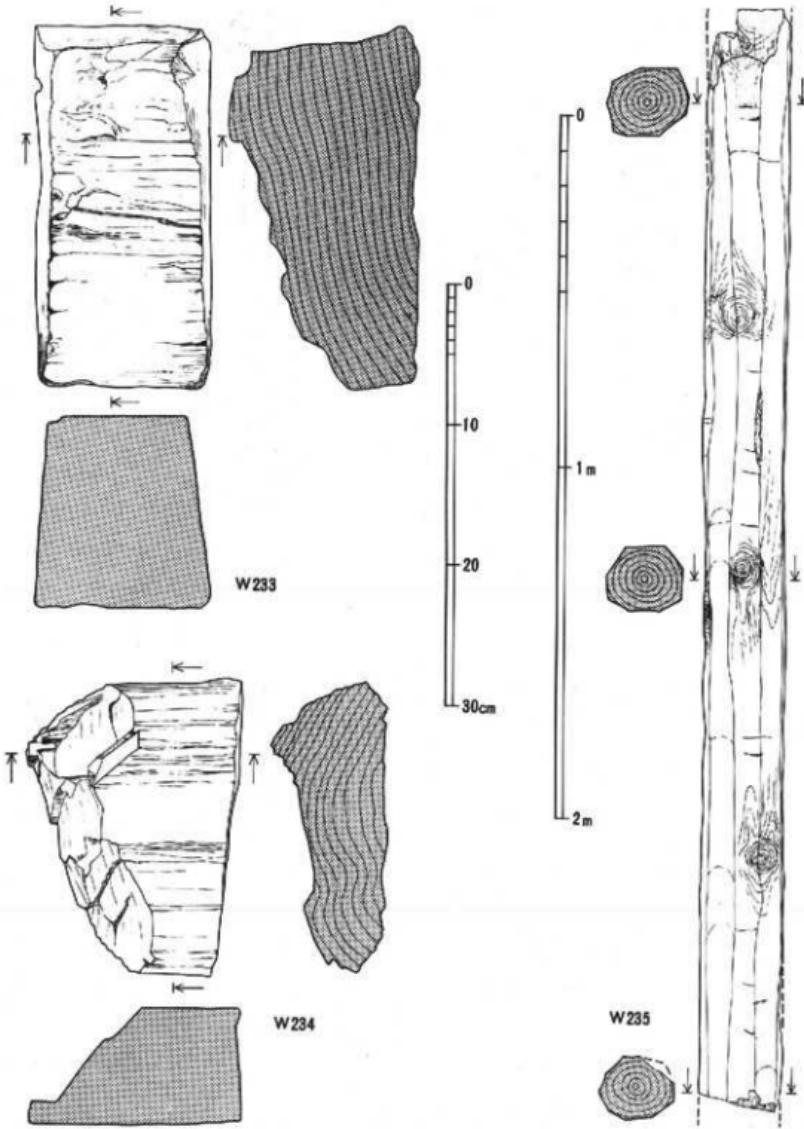
W229はナスピ形を呈する鋤の肩部であろう。鋤B₁類の破片と推定される。

W230は一木から削り出した鋤である。鋤先を欠損しているが、柄の長さ5.8cmを割り、把手の部は「T」字形となっている。鋤の身は両側面を欠損しているが、肩部は横方向に張っているので、踏み鋤であろうと考えられる。鋤A類としたものである。

W231も鋤A類に属するものである。柄の基部付近と、身の中央部を残すものである。身の裏面は柄との間に30度の角度をもたせ、表面には柄がその延長線上に若干伸びている。W230と比較するとやや華奢な感じを受ける。



第184図 鋸A・植実測図(60) 1:6



第185図 余材・建築材実測図(61) 1:4 1:16

W232は横植で、柄の長さ13.3cm、身の長さ22cmを測り、径は7.4cmとなっている。身は縦方向に「V」字形に欠損している。この破面にも使用痕とみられる磨滅や、擦痕が認められる。破損した後も統一して使用されていたことを示している。

建築余材（第185図W233・234 図版162） いずれも建築材を加工した折に出た木端であろう。W233は両木口切断面を比較すると、左側木口は若干の凸凹が認められるのに対し、他方の面はそれが認められない。どちらの面が主要材に接していたかは速断しがたいが、右側木口面は鋸によつて切断されたものであると判断された。

W234は左木口面は手斧様の刃物痕が認められ、右側木口面はやや内割りを呈す刃物痕がある。この余材には鋸を使用した痕跡は認められない。

建築材（第185図W235） 第2河道西岸に沿つて横たわる状態で検出された柱材である。残存長3.14mを測るが、調査時に両端を欠損したので、この部分も加えると4m前後であった。

表面には縦方向に手斧によつて研られた、幅10cmの稜線が走り、横断面は不整八角形を呈す。材は芯持材で、約60cm間隔で、節が各所に認められる。

W232・234に見られるような余材があることは、この柱材も付近で加工された可能性も考慮されよう。

杭状木製品（第186図W236・237） W236は木目の細かい柾目材を使用した杭である。断面は方形を呈し、先端部は一面を残し、3面を削り尖らす。

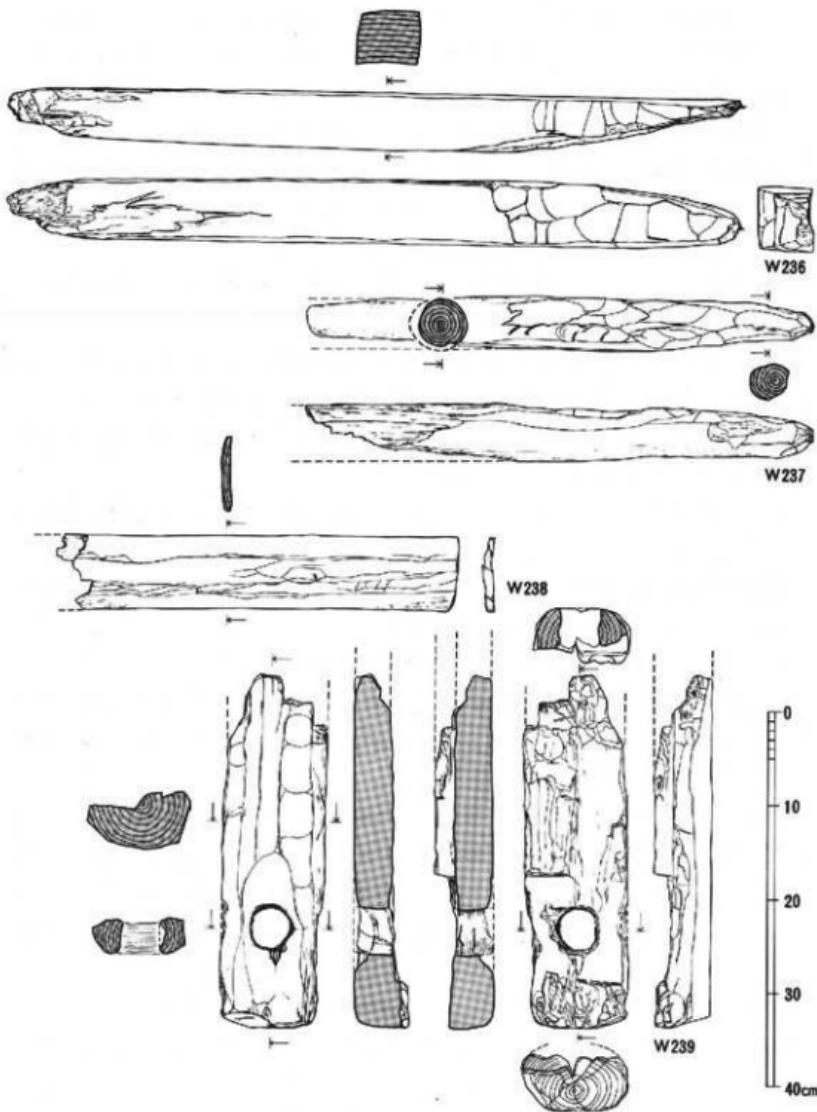
W237は芯持の一端を削り尖らす。ただし端はさほど鋭くない。

板状木製品（第186図W238） 幅8cm、厚さ1.5cmを測る、短冊形を呈すもので、一端を欠損している。木表面には縦方向に手斧による研り痕が認められる。残存する一方の端部は刃物があてられた痕跡がある。

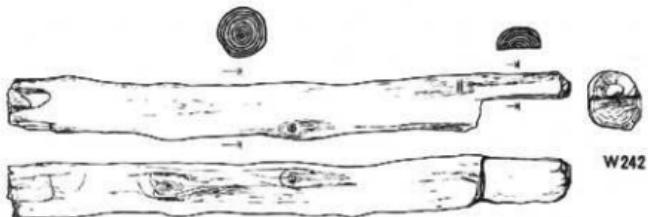
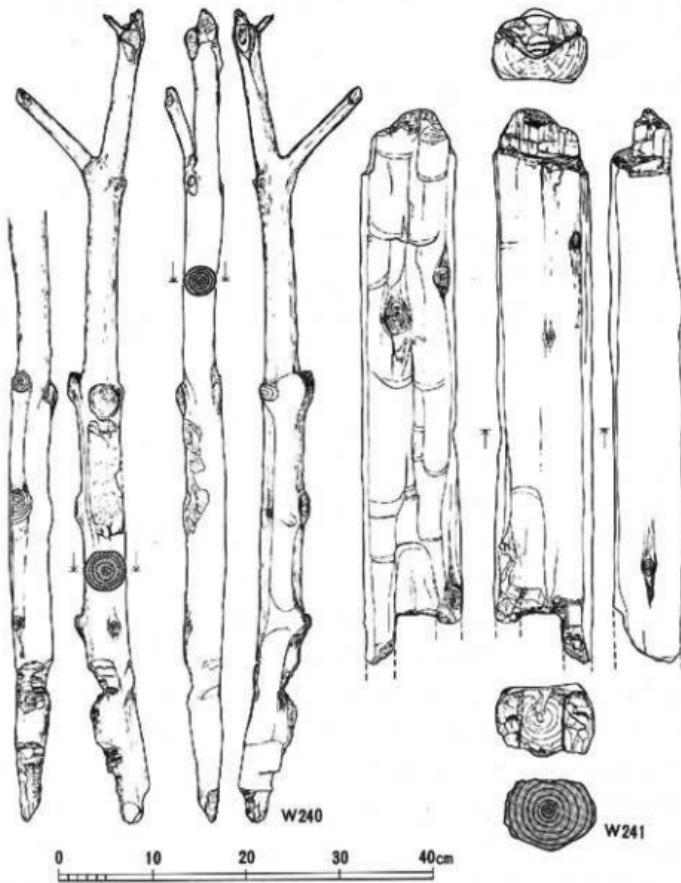
建築材（第186図W239） 径10.9cmを測る芯持材の端部付近に円孔を穿つもので、大きさから建築材と推定される。全体に腐蝕が進み、磨滅も著しいものである。外面の加工痕からすると、縦方向に手斧で研った痕、円孔を穿つあたりを前もって平坦にしている。この反対の面は「コ」の字状に欠き取られている。この「コ」の字状に欠き取られた部分中央から、前記した反対面の平坦面中央に向つて径4cmを測る貫通孔が穿たれている。

芯持加工材（第187図W240 図版162） 呼称が適切とはいひ難いが、上端が幹と枝により二方に分岐するもので、中央部分にも3本の枝を基部から切断した痕が認められる。下端は粗い刃痕が各所に見られる。ただし、これらの刃痕が何を意図したものか速断しがたい。

建築材（第187図W241） 芯持材を研ることによって、相対する平坦面をつくり出している。上端には断面三角形を呈す枘状の突出部を削り出す。下端は欠損している部分もあるが、木口を「コ」



第186図 杭・板状木製品・建築材実測図(62) 1:6



第187図 先端加工木製品・建築材実測図(63) 1:6

の字形に割り込みを入れる。ただしこの加工がもっと長い材に方形の貫通孔を穿った後に破損した可能性も考慮される。

W242は芯持材の一端を直径の1/2ほど欠き取り、断面半円形を呈す柄状の突山部を削り出すものである。ただし、もう一方の端部は粗い刃痕が認められるが前記の刃痕と異なるので、この方は二次的なものと判断される。

第2 河道出土木製品

以下第2河道出土木製品の概要について記すことにしてみたい。

札状木製品（第188図～189図）

順礼札（W243）上端を山形に加工する木札で、上端から下方へ1.5cmの位置に方形小孔が貫通する。出土時点では表面の下方に墨書きされている「札」の一字がかろうじて判読しえる状態であった。

昭和64年1月、国立歴史民俗博物館において赤外線ビデオによって、表裏全文を判読することができた。図示した実測図は順礼札の輪郭に赤外線ビデオによって得られた写真を寸寸に焼き付け重ね合わせたものである。表面には中央に「三十三所順礼」その下方に携帯者名「道円」、右側には「天正十六年」と墨書きされている文字が読みとれる。左側は若干の欠損が認められるが「三月吉日」であろうと推定される。裏面には、方形小孔の直下より「父母六親菩提也」と墨書きされている。

これによれば、この木札は天正16年（1588）3月に道円という人物が、父母をはじめとする親族の菩提を弔うために三十三所巡礼の旅に携帯したものであることが知られる。

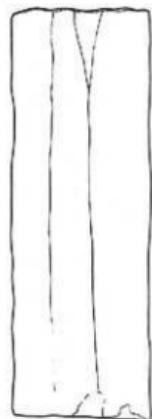
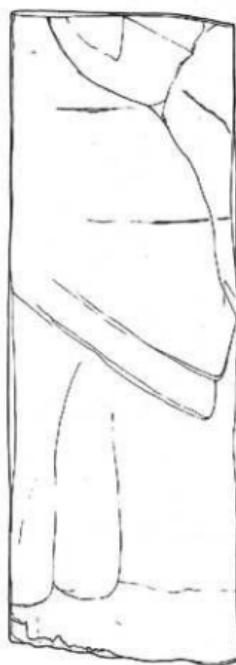
W244は上下の木口を横一文字に切り整える、方形板状を呈すものである。左の面には剃刀状の刃物によったとみられる擦痕が認められる。肉眼で見る限り、墨痕等は認められない。

W245は上端の木口を横一文字に切り整えているが、下端は若干のさくくれが見られる。表面は小刀状の刃物による刃痕が見られ、この面を平滑にしようとする意図がうかがえる。

W246は上下端部を横一文字に整えることは前記したものと同様であるが、両側辺上方に相対して「V」字形の割り込みを施す点が注意される。左側に図示した面には上端に沿って剃刀状刃物によったとみられる擦痕が認められる。これ以外には右下りの同様な擦痕が無数に走る。下端の木口には厚みの中心に、納状の突出が認められる。その端部はややさくかれている。これは表裏から木理を切断する浅い刃痕を入れ、折り取った際の痕跡であろう。

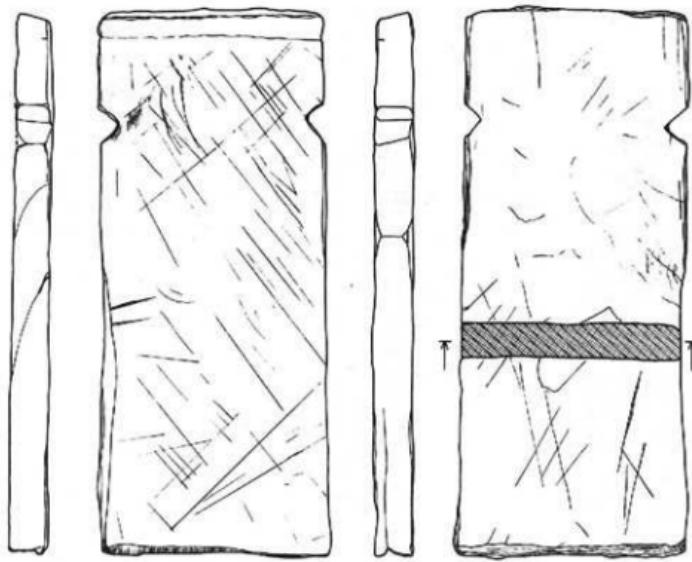
W247は長方板状を呈すもので、表面は平滑になっている。上端は明瞭ではないが、下端は刃物により木口面が整えられている。

W248は横長の方形板状を呈すもので、上辺よりの中央に径0.2cmを測る不整形な貫通孔が認められる。全体に磨滅が著しい。

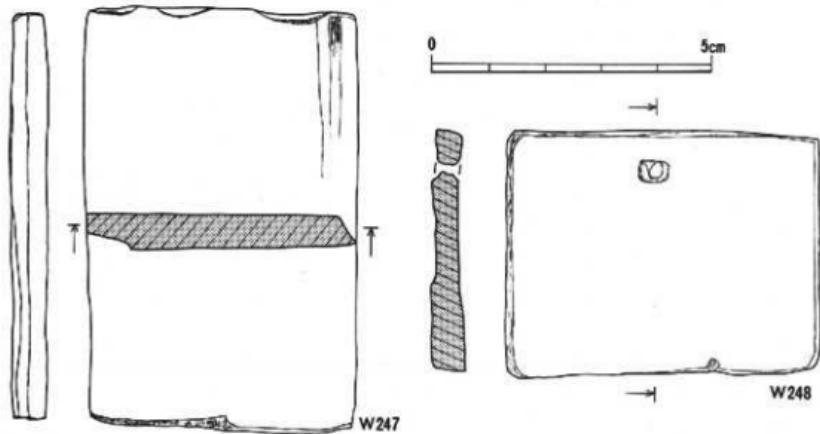


0 5cm

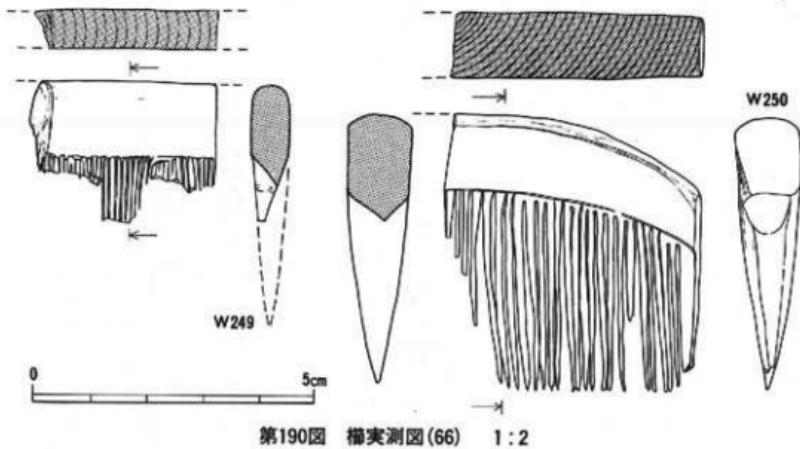
第188図 順礼札・札状木製品実測図(64) 1:2



W246



第189図 札状木製品実測図(65) 1:2



第190図 横実測図(66) 1:2

櫛（第170図W249・250） いずれも横櫛である。W249は棟部と歯の基部が残存するもので、断面は上方が丸くおさまる形となっている。

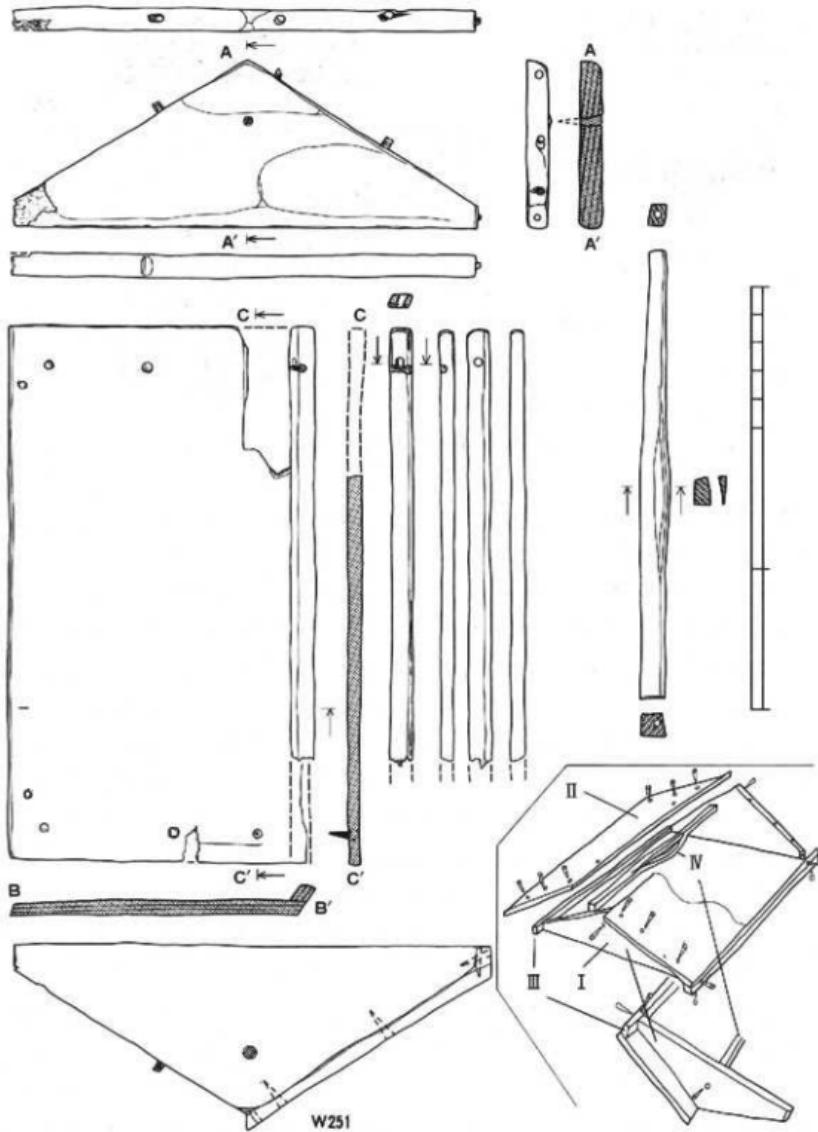
W250は全体のはば1/2が残存するものと考えられる。棟は弧を描き、平面形は半円形を呈す。全体に入念な研磨が認められる。断面はW249と比較すると略相似形を呈すが、棟部の面取部両端に稜が認められる。身幅はさほど差はないが、前者の歯の間隔が密であり、後者は疎らとなっている。

家形木製品（第191図W251） 図示したものは展開図風にしたため、かなり煩雑な感じとなったが、出土した各部材は以下のとおりである。上方に図示した二等辺三角形を呈す破風にあたるもの（I）、中段左側に示した長方形を呈す屋根板にあたるもの（II）、中段中央に展開図の形に図示した割箸状に軒先材にあたるもの（III）、中段右に示した棟木にあたるもの（IV）の計4点である。

上方に図示した（I）は二等辺三角形を呈し、両端部をわずかに切り落す。この切り落した右側の木口中央には木釘が残存する。ただし、左側は若干欠損しているため木釘が当初からこの位置に無かったのか、判断しがたい。木釘はこの他に左斜辺中央に1本、右斜辺に2本残存し、木釘孔1が認められる。

（II）は長方形を呈す板状材で、左側の上下隅に各1、上辺に沿って2、下辺に3の計7孔が認められる。なお、左側辺の2孔は他のものと比較するとやや小さいことが注意される。

（III）は（I）の右側辺に压痕が認められたので、压痕に沿わせてみたところ一致し、しかも（II）の外表面端の傾斜も一致した（II）の横方向断面B:B'を参照）。この材を（II）に固定する際しては、軒下から屋根板に向って木釘を打ち込む方法がとられたらしい。ところで（I）の左斜辺に打ち込ま



第191図 家形木製品実測図・模式図(67) 1:2

れた木釘の痕跡は3ヵ所あって、(II)の下端辺沿に認められる3個の小孔の位置と整合する。このことを外面裏方向から図示したのが、第191図の下段の図である。

(IV)は長さ16cmを測り、中央に長さ5cmの亀裂がある。両木口には木釘が打ち込まれていた小孔が認められた。この材の長さは、(II)の上下両端辺に(I)を固定した場合の、内法と一致するものであった。このことから(I)の中央よりやや上方に打ち込まれている木釘は(IV)を(I)に固定するものであると考えて間違いないであろう。

残存しない部材もあるが、木釘の位置等を考慮すると右下に図示した模式図のようなものであったと推定される。

木像（第192図W68） 良質の柾目材を用いて作る五頭身の木像である。

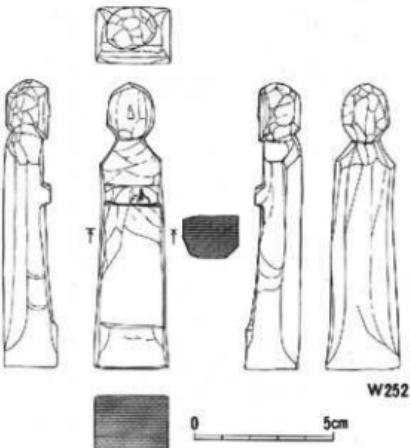
頭部は入念に刃物があてられ、後頭部は多面体を呈し、顔面はそれと比較すると平面的である。顔面中央には二等辺三角形の鼻が表現されているが、上面は平坦となっている。肩部から下方は直線的な線を描いて裾部まで降下する。手は胸よりやや下方に幅0.9cmの突帯として表現されている。木取り等からすれば、手の細部はこれ以上表現することは不可能であって、欠損したとは考えがたい。

背の部分は縦方向に削り作業時の棱線が走る。この棱線は裾部付近で左右両隅へ流れる形となっている。衣の襞が裾に向う状態を表現したものであろうか。底部にあたる木口は鋸によって切断されたらしく平坦となっており、小刃等の刃痕は認められない。つまり鋸の挽き放しと推定される。

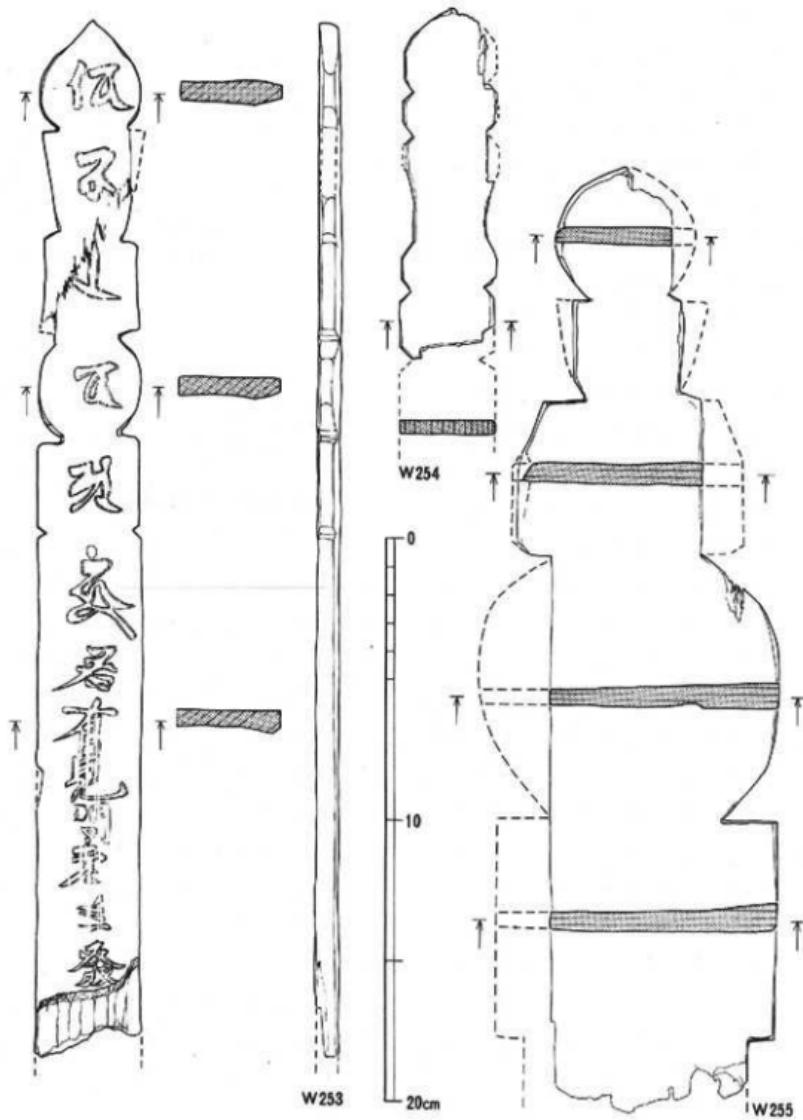
板塔婆（第193図W253～255） 板塔婆は3点出土している。いずれも下方を欠損するものである。W253は幅3.8cmを測る短冊形の板材上方を、両辺から大小10ヵ所「V」字形の刻みを入れて五輪を表現している。この板塔婆は長期間風雨に晒されていたことがあったとみて、墨書きされていた文字の部分がレリーフ状を呈している。それによると空輪～地輪の下方にかけて梵字6文字漢字7文字が記されている。「観音□宣開^ス若^ハ有^ハ見^ハ問^ハ發^ハ□」と読みとられている。

W254は板塔婆の上部で、地輪以下を欠損している。梵字等の文字は認められない。

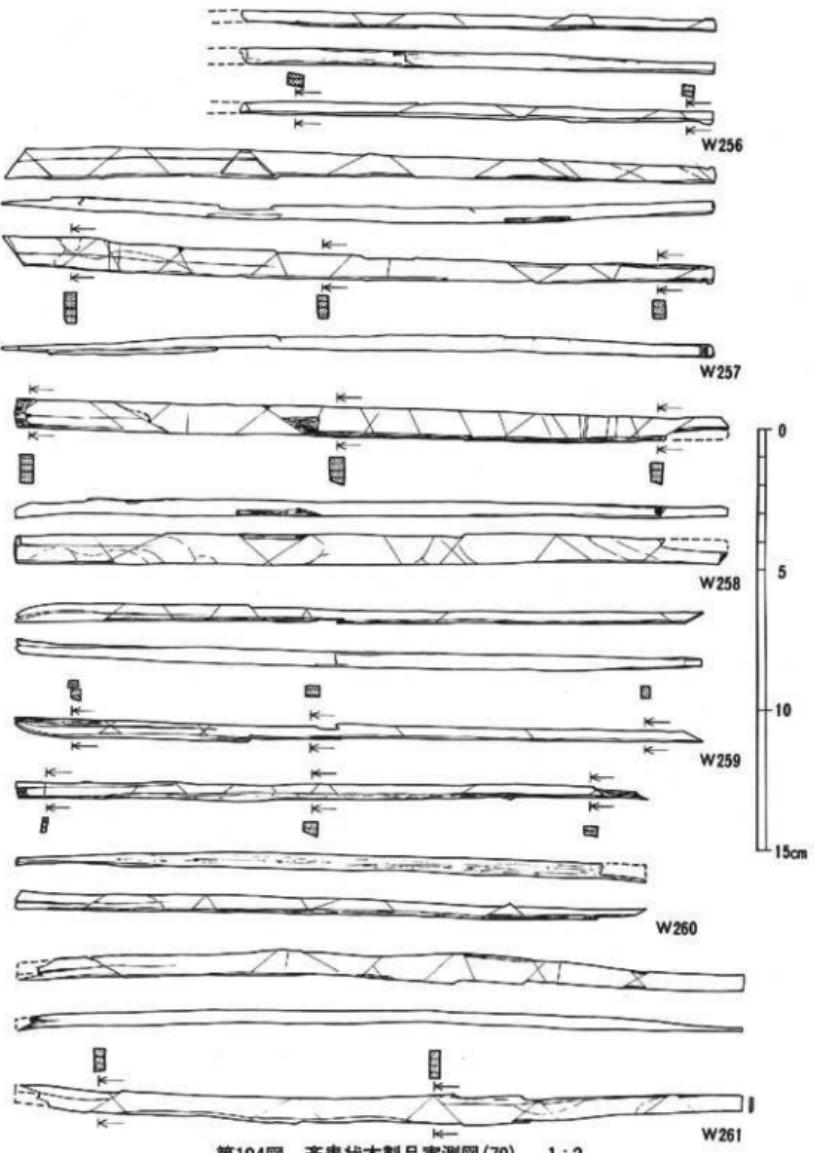
W255は幅8cmを測るかなり広い短冊形の板材を加工するもので、空輪・風輪・火輪部分と、水輪・地輪部分を比較すると前者がやや小さめに削り出されている。これも表裏とも文字等は認めら



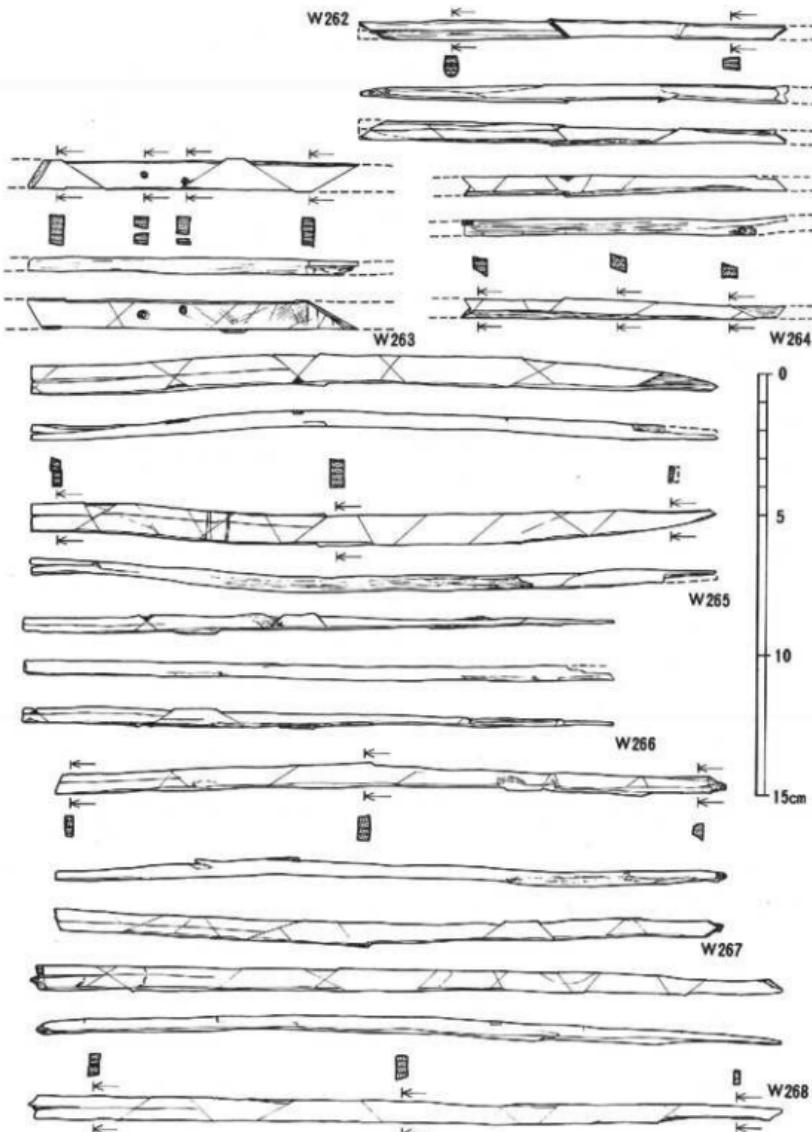
第192図 木像実測図(68)



第193図 板塔婆実測図(69) 1:2



第194図 斎串状木製品実測図(70) 1:2



第195図 斎串状木製品実測図(71) 1:2

れない。

薺串状木製品（第194図～第195図）一部に欠損したものもあるが、13本分が1束となって出土した。これらは長さ25cm前後、上端幅1cm前後、下端幅0.5cm前後を測り、厚みは0.4cmとなっている。上端を欠損したW256・262～264を除くと他はいずれも上端の幅を二分するように切り込みが入れられている。この切り込みによって、かなり下方まで亀裂を生じたものもある。W257・265がそれである。下端部については、横一文字に切断されるもの（W256・257・261）と、斜めに削って尖らすもの（W258～260・267・268）がある。

表裏ともジグザグ方向に剃刀状刃物によつたとみられる刃痕が例外なく認められる。この中には墨で何かを描こうとしていることがうかがえる。W257・258・260・261・263・264～268がそれで、特にW268は「波」状の描写が認められる。またW263には上下2ヶ所に小孔が貫通している。

ところで、薄板にジグザグ方向に刃物痕を入れるのは第203図W331に代表されるように曲物の側板内面に見られることがある。このことから、曲物の側である可能性も考慮して、刃物痕を手がかりに接合を試みたが、いずれも接点をもとめることはできなかつた。また曲物であれば、どちらかの面に湾曲しているはずであるが、その形痕はない。さらに表裏に刃物痕が入れられることからすると無理に曲物に関連させる必要はないようと思われた。上端部に切り込みを入れる例は神事に使用される幣串等のような用途が推定されよう。

漆器（第196図～第200図W308）今回出土した漆塗椀は断片もいれると40点以上にも及んでいる。これらを形態の上から分類すると以下のようなようになろう。

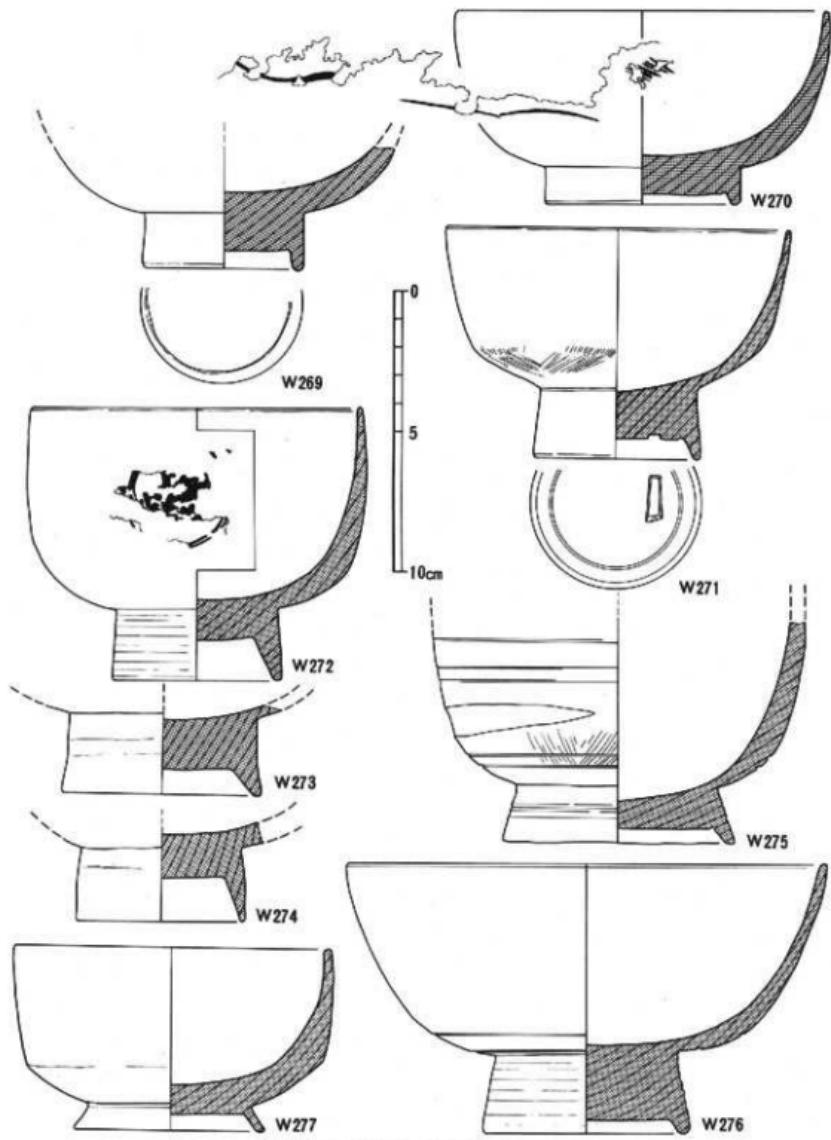
a 底部の器内の厚さが体部の器肉より厚いものである。つまり高台が比較的高いにもかかわらず、裏面の切り込みが浅い構造のもので、安定感がある（第196図W269～276）。

これに分類したもののなかには1) 高台外面の傾斜がほぼ垂直となるもので、W269～274にその特徴が認められる。2) はW275～277にみられるように、高台の断面が「ハ」の字形を呈すものと大別される。

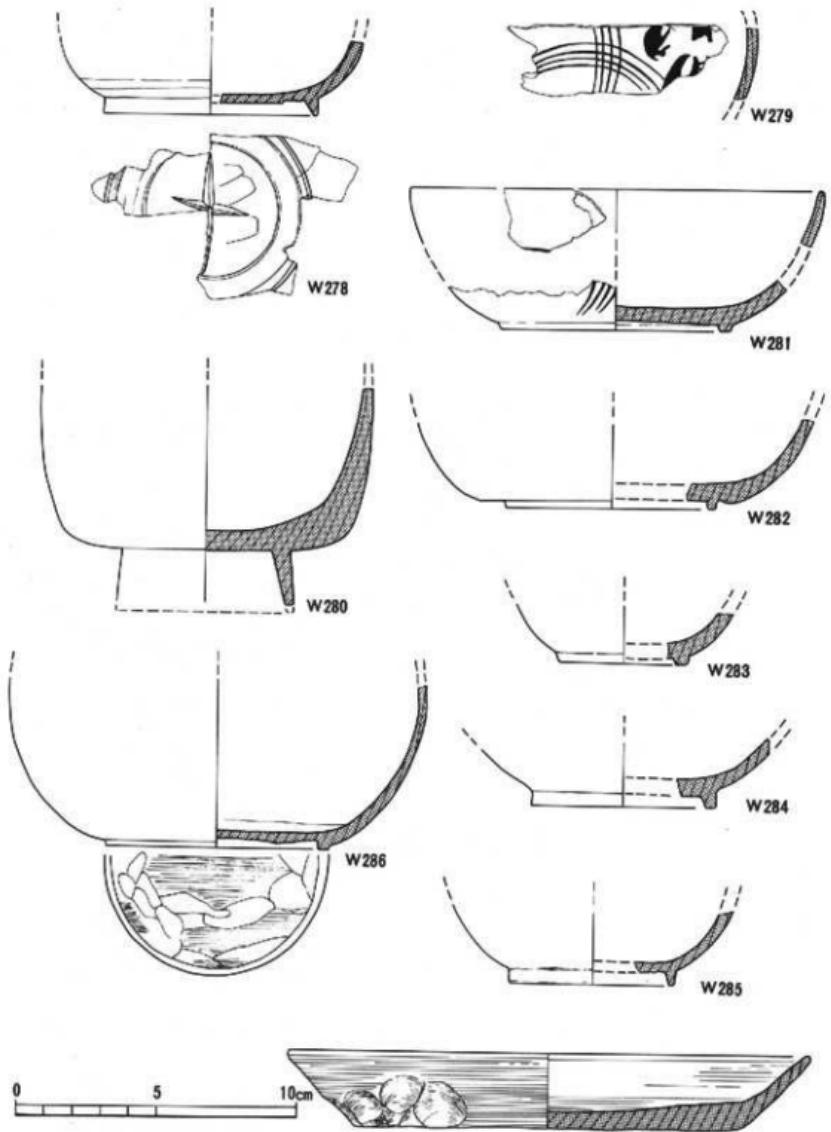
W269は内面を赤色（ベンガラ）漆、外面及び高台裏を黒色漆塗りとする。見込み面に火を受けた痕跡がある。

W270は内面赤色漆、外面及び高台裏を黒色漆塗りとする。外面黒漆地に赤色漆で絵が描かれていたらしいが剥離しており、図柄は不明である。内面全体に断文が認められる。

W271は内面赤色漆、外面及び高台裏を黒色漆塗りとする。高台裏中央よりやや外れた位置に浅い長方形の掘り込みが認められる。この掘り込み内にも漆が塗布されている。高台外面には漆の上からロクロ目が観察できる。体部の高台脇付近にはロクロ挽き後に施された研磨痕が認められる。W272は内面赤色漆・外面及び高台裏を黒色漆塗りとする。内外面とも漆膜は厚い。内面及び高台

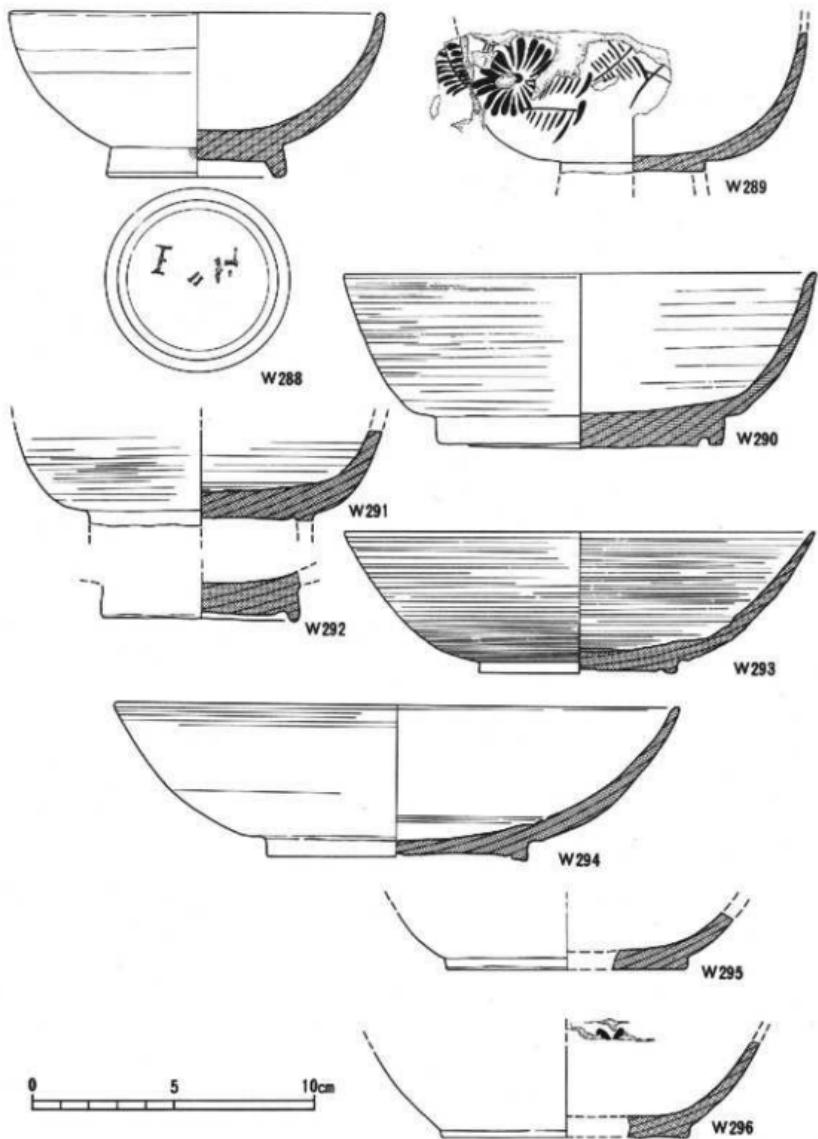


第196図 漆塗椀実測図(72) 1:2

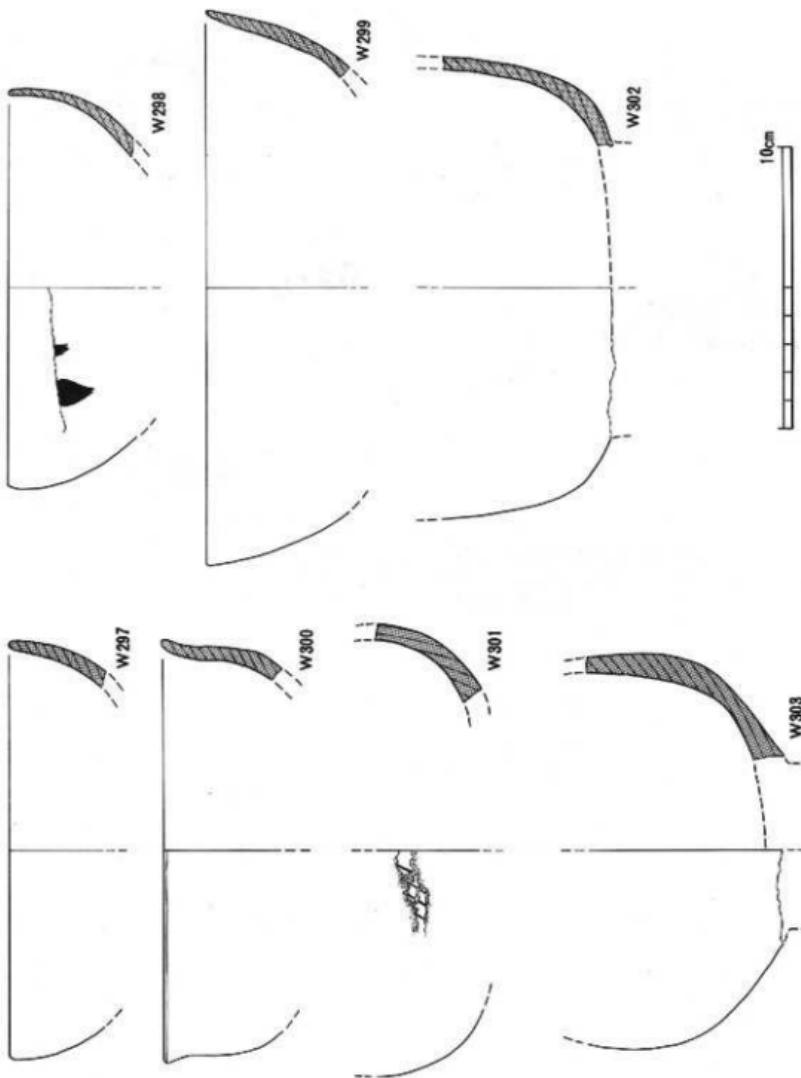


第197図 漆塗り椀・皿実測図(73) 1 : 2

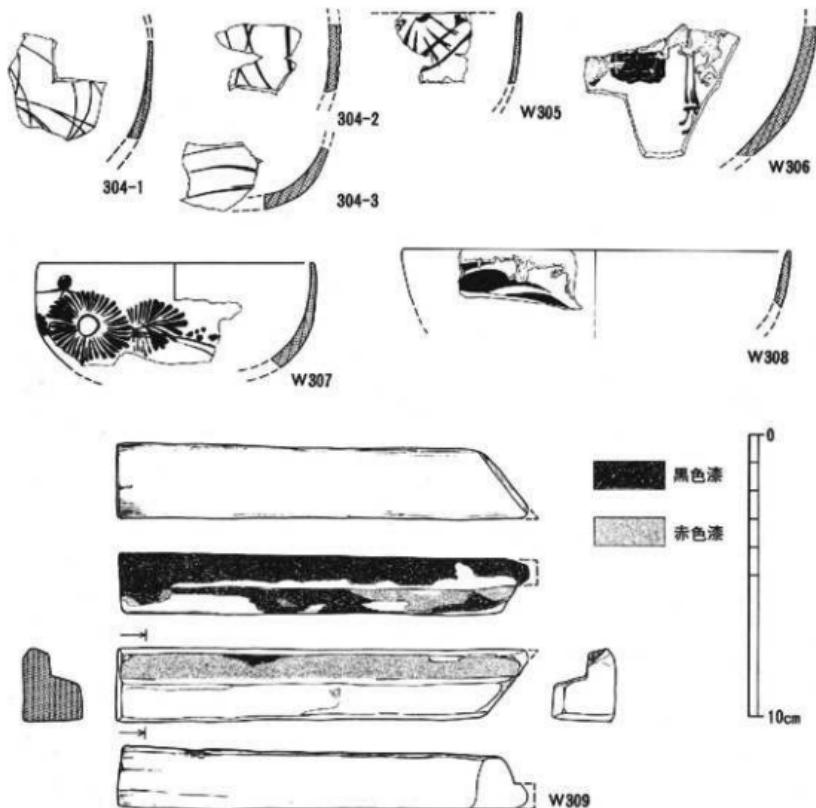
W287



第198図 漆塗り椀実測図(74) 1:2



第199図 漆塗り椀実測図(75) 1:2



第200図 漆塗り椀・縁状木製品実測図(76) 1:2

外面には刷毛目が明瞭に認められる。体部外面には赤色漆で二重輪紋を2ヶ所配す。間隔からすると、もう1ヶ所配されていたと考えられる。二重輪内の具体的な図柄は剥離のため不明である。W273～275は内外面及び高台裏面を黒色漆塗りとする。W275は体部高台側に2条、上半に2条の比較的深いクロ口が走る。その間には木地製作工程で刃物が深く入ったとみられる刃痕がある。体部下半に不正方向の擦痕がある。W276は大ぶりの椀で、内外面ともに黒色漆塗りとする。外面に赤色漆が残存することから、黒地に漆絵が描かれていたことが知られる。W277は体部のやや下方に横方向に走る縦線がある。内外面とも赤色（朱）漆塗りとする。塗膜は厚い。

b W278・281～286は、高台裏面をわずかに凹め、調整する。結果底部の厚さと体部の厚さがほぼ等しくなる。W278は内外面とも黒色漆塗りとする。高台裏面は素木となっており「十」字形の刻みが認められる。W281は口縁部として、図示しているものと、底部とは遊離しているが、色調、器厚から同一固体と判断したものである。内面赤色（朱）漆、外面黒色漆塗り放しとなっている。外面は黒漆地に赤色（朱）漆で漆絵が描かれている。筆法等からW279はW281と同一個体であろう。W282は内外面とも黒色漆塗りとしている。W283、やや小ぶりの椀で、内面赤色（ベンガラ）漆、外面高台蓋も含めて黒色漆塗りとしている。W284は内面赤色（ベンガラと朱を混合）漆、高台痕も含め黒色漆塗りとしている。W285は内外面黒色漆塗りとするが、高台裏面は素木のままとなっている。

これまで椀類の高台の形態によって分類してきたが、W286は上半部を欠損しているので途断できないが、椀というよりも蓋物である可能性もすてきれない。内外面に塗布されていた漆はほとんど剥落しているが、内面黒色・外面赤色（朱とベンガラ混合）漆塗りであったことが知られる。

c 比較的高い高台の裏面を削り込むことによって、体部と底部の厚さがほぼ等しいものである。これはaの高台裏面を削り込んだものでW280・288・289がこれにあたる。

W280はやや下ぶくれがする体部をもち、内面赤色漆・外面及び高台裏面を含め黒色漆塗りとしている。内外面とも塗膜は厚い。W288は中形の椀で内面赤色漆、外面は高台裏面も含めて黒色漆塗りとしている。高台裏中央にはロクロの爪痕が認められる。W289は高台を欠損している。

内面赤色（ベンガラ）漆、外面は高台裏面も含めて黒色漆塗りとしている。外面には黒色漆地に菊花様の文様を蒔絵で表現している。ただし摩滅しているため、文様部分は灰色を呈し、花弁の一部に金色の粒子が若干認められるにすぎない。

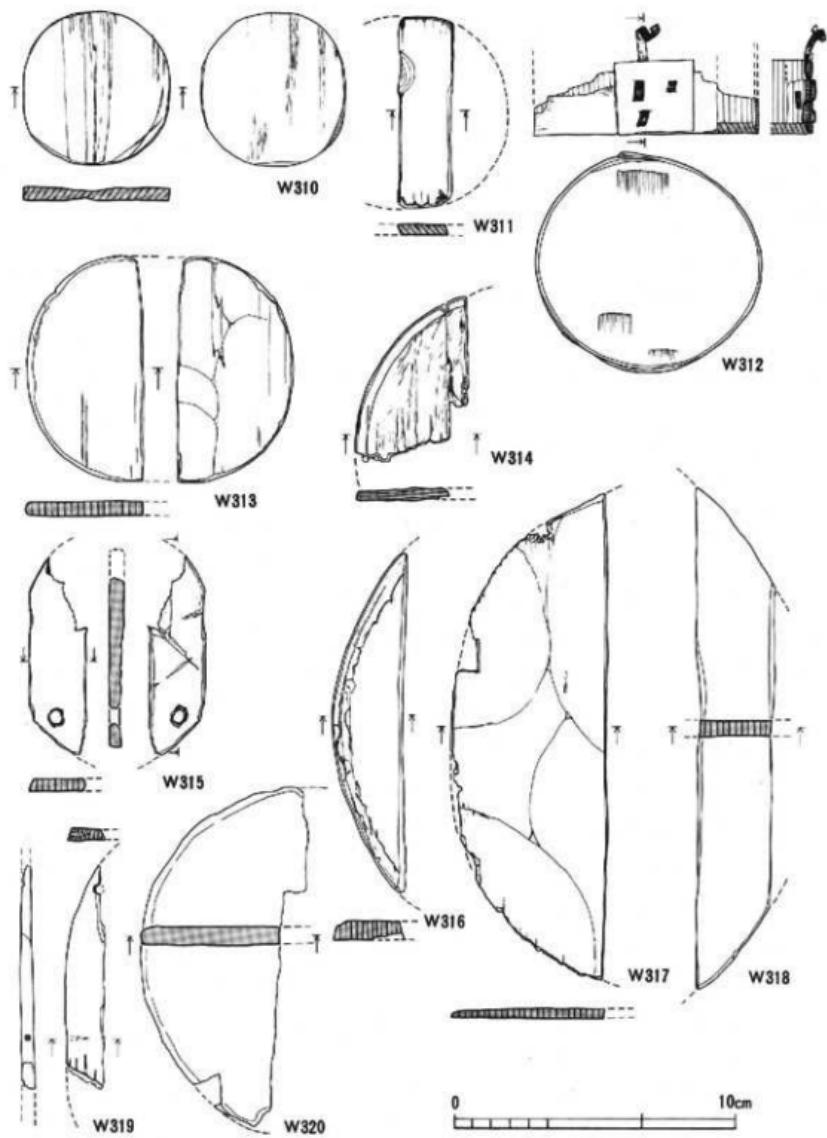
W291は内外面とも黒色漆塗りとし、高台裏面が塗布されていない。高台部分は欠損している。dは高台裏をわずかに調整するもので、W290・292～294がこれに含まれる。W290・293・294は高台裏面を除き、内外面を黒色漆を塗放しとする。内外面ともロクロ目が明瞭となっている。W292には漆を塗布した形跡はない。

Eは高台裏面を未調整のベタ高台とするもので、W295・296がこれに含まれる。高台裏を除き、内外面とも黒色漆塗りとする。W296は見込みに赤色漆で、文字が文様されている。

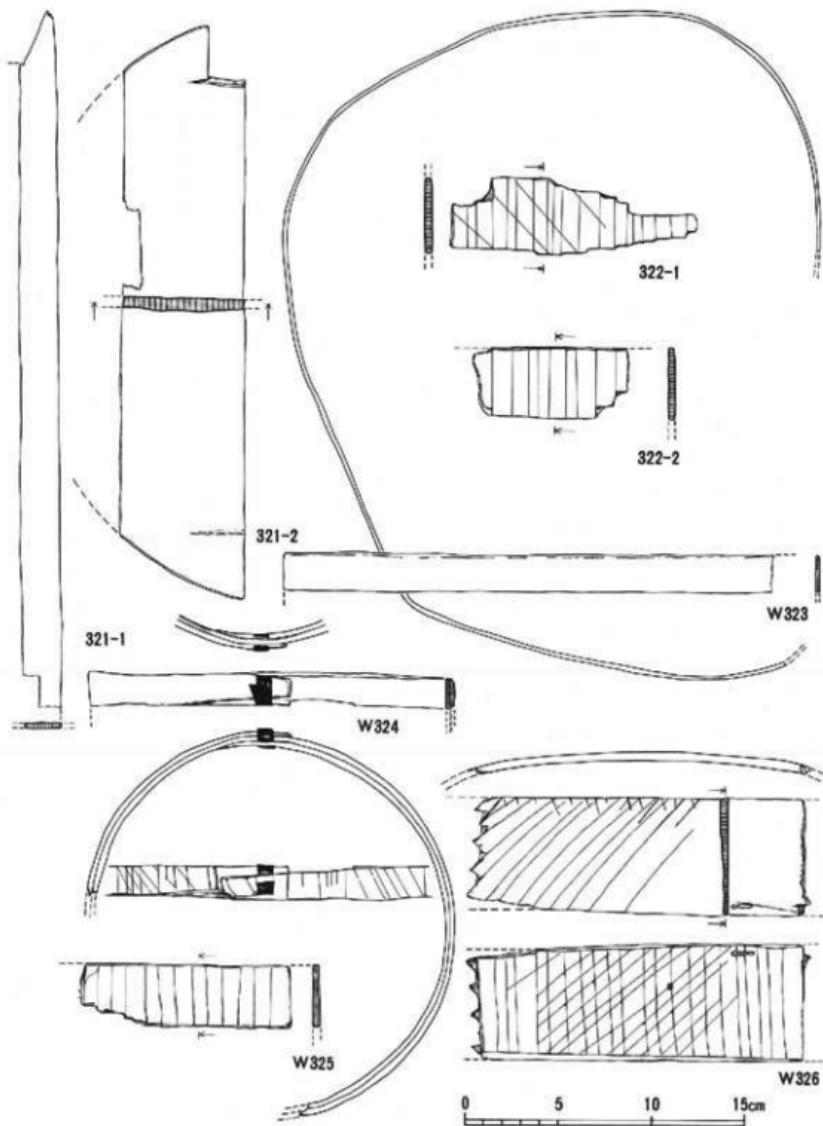
W287は皿で、漆を塗布した形跡は認められない。外面にはロクロ挽き以前の粗木取り工程の刃痕が認められる。ロクロ目は明瞭である。

W297～303は高台部を欠損しているものである。W302は内面を赤色（朱とベンガラを混合）、漆塗り、W303は赤色（ベンガラ）漆塗りである以外は内外面とも黒色漆塗りとしている。

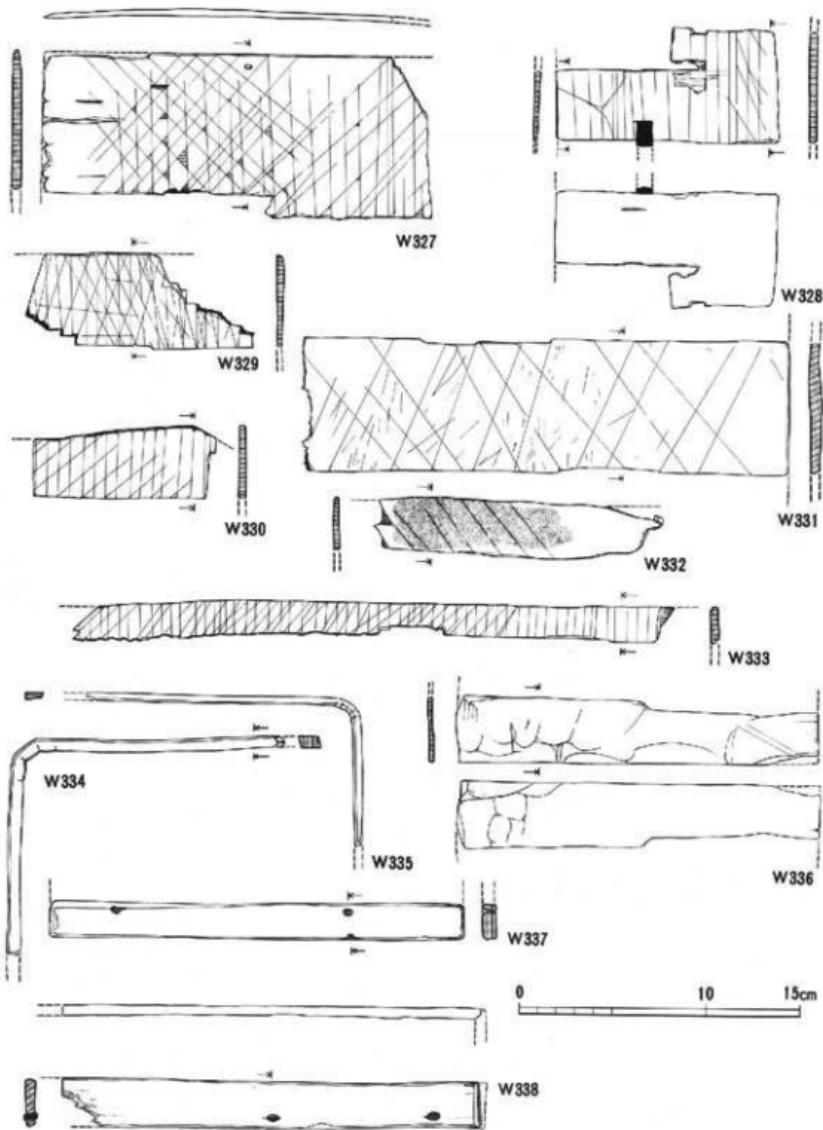
W298・301は外面に漆絵が描かれてあったらしく、その一部が残存している。前者は朱を用い、



第201図 曲物実測図(77) 1:3



第202図 曲物実測図(78) 1:3



第203図 曲物・折敷縁実測図(79) 1:3

後者は朱にベンガラを混合して赤色漆としている。

W304-1～4は内面赤色（ベンガラ）漆塗り、外面黒色漆塗りとしている。外面には赤色（ベンガラ）漆を用いて、漆絵が描かれている。内面の色調、漆絵の筆方等から同一個と判断したものである。W305は内外面とも黒色漆塗りとし、外面には赤色（朱）漆で漆絵が描かれている。

W306は内面を赤色（朱）漆塗り、外面を黒漆塗りとしている。外面には赤色（朱）漆で漆絵が描かれている。右側には竹様のもの、左側には俵様のものが表現されている。俵様の細部は赤色漆を塗った後、引摺文によって表現されている。

W307は内面暗赤色（ベンガラ）漆、外面を黒漆塗りとしている。外面は黒漆塗地とし赤色（ベンガラ）漆で花文様が描かれている。W308は内外面黒色漆塗りとし、外面は黒漆塗地に赤色（朱）漆を用いた漆絵が描かれている。

W309は左端部を一文字に、もう一端を留形に尖らすものである。一方の面を断面「L」字形に削り取っている。この面には黒色漆と赤色（ベンガラと朱を混合）漆を塗り分けている。この塗り分けは黒色漆を塗布した後、赤色漆を上から塗布している。なお留形部分の角度は46度を測る。

曲物 ここで曲物としたものには円形曲物（W310～333）と方形曲物（W334～344）に分けることができる。

W310は径8.1cmを測る円板状を呈す。木釘等の痕跡は認められないで、蓋である可能性もあるが、底とすれば側板との接合は嵌殺しの方法しかなく、後記する桶や樽との関連も考慮する必要があろう。

W311は大部分を欠損しているが、やはり円形を呈すものであろう。W312は上半部分を欠損するが、側板と底部の接合を知ることができる資料である。側板内面は剃刀状刃物によった木理直交刃痕を入れて曲げ、両端部は桜皮止めとしている。側板と底部の接合は嵌殺しの方法をとっている。

W313・316・317・318・321-2は円形を呈すものでW311と同様、円辺にも側面にも側板を固定した痕跡は認められない。ただW316～318・321-2はかなり小さな破片であり、欠損した部分に存在した可能性も考慮しておく必要はあろう。

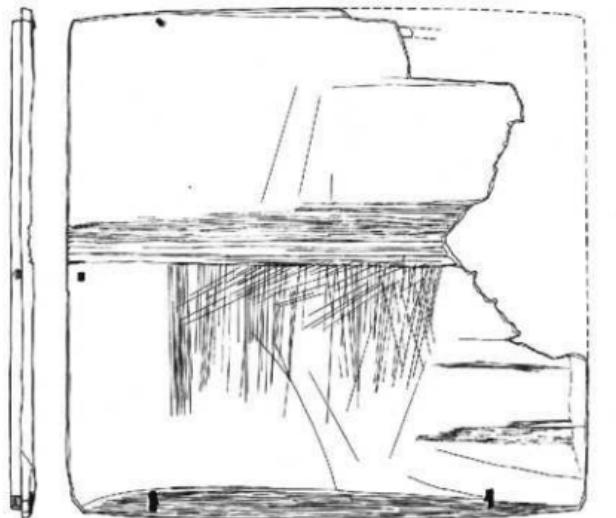
W314は破面左隅に桜皮で側板を固定するための小孔が2個、W315は1個が認められる。

W319は円辺に小孔が1個、側面に木釘用の小孔が1個認められる。円辺にある孔が木釘用か桜皮用かは速断しがたい。W320は側板と底板に際して木釘（矢印）によったことが知られる。

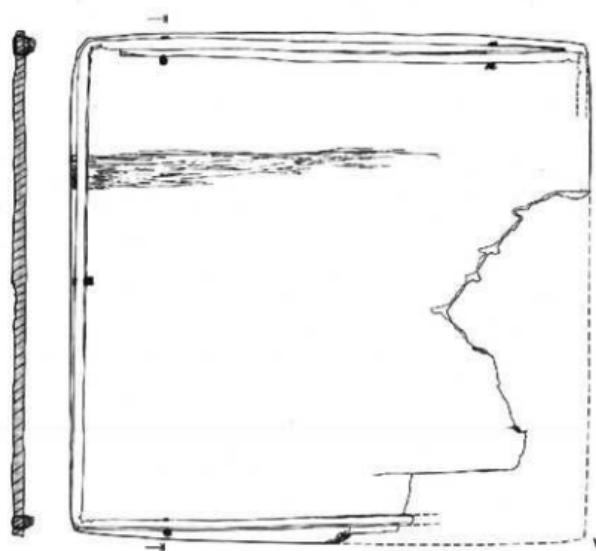
側板（W321-1・322-2・323～333）　円形曲物の側板には内面に剃刀状刃物によった木理直交刃物を入れないもの（W321-1・323）と入れるもの（325～333）がある。

W323は径27cm以上の底部に沿っていたものであろう。

W332は内面に火を受けている。おそらく曲げ工程時に生じた痕跡であろう。

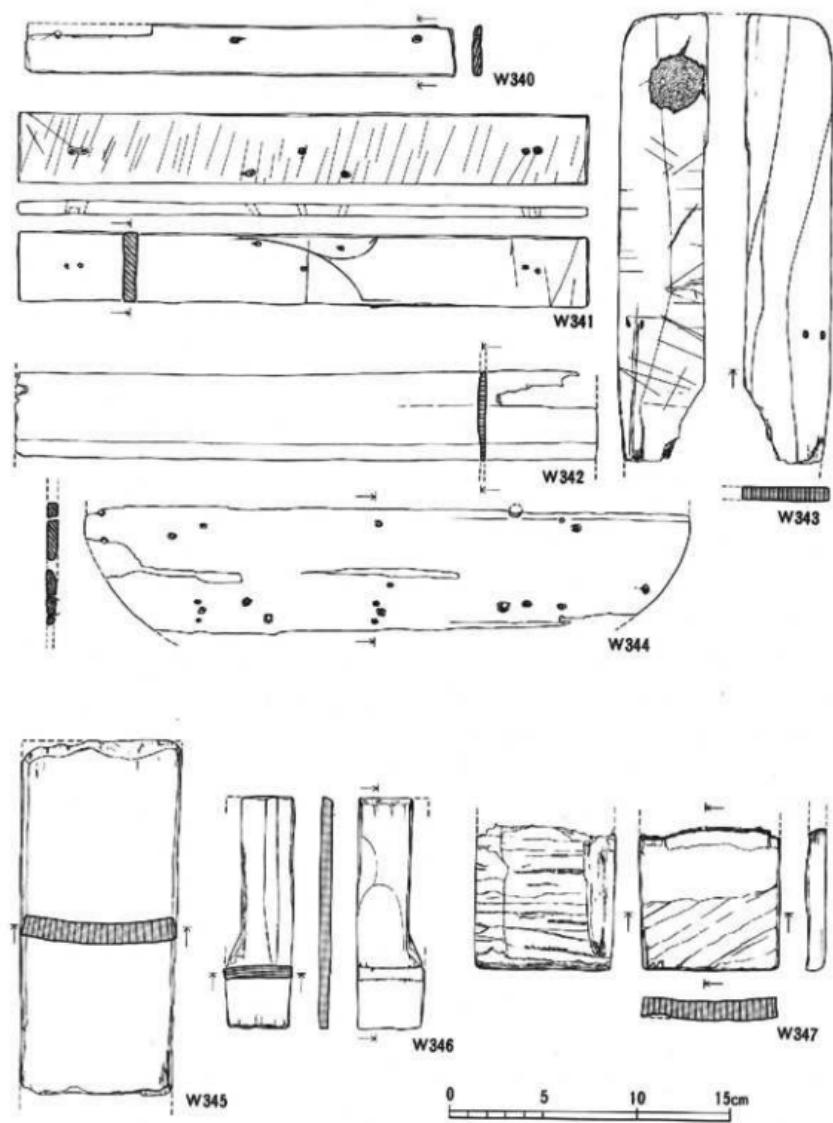


0
10
20
30cm



W339

第204図 蓋実測図(80) 1:3



第205図 折敷・桶実測図(81) 1:3

折敷底板 (W337・336・340~344) いずれも小片となっているが、入念な削りを加え、平坦面は平滑となっている。W336・342側板を桜皮で固定するための小孔が認められる。

W344は桜皮で固定した後、さらに木釘で補強しているらしい。円辺の孔は補修孔の可能性がある。

W339は平面やや胴張りする方形を呈すものである。当初折敷と考えていたが、方形曲物の蓋と推定した。折敷であれば縁を付けた面の方に使用痕が多く存在するはずである。にもかかわらず、その反対の面に擦痕が認められる。さらに擦痕のある面は中央部分がやや高く甲が張る形態となっているので折敷より、蓋となる可能性が大きい。

桶類側板 (W345~347) いずれも磨滅が著しいが、両側面は以外とシャープな平坦面を保ち、やや傾斜していることが注意される。しかも横断面はやや内湾し、前記側面の傾斜は内湾する面に存在するという点で共通している。このことから桶の側板と判断した。W345は下方を、W347は上方を欠損しているため、底や擁の痕跡は認められない。W346は長さ12.3cmを測り、上端から9cmの位置に幅0.4cmの底板の圧痕が認められる。このことから、この桶は深さ9cmを測るもので約3cmの上げ底であったと推定される。

鎌及び柄 (W348~350) W348には鎌の茎から刃の基部にかけての部分が残存する。他は柄尻に若干の形態差が認められるが、鎌は同様な形態のものであったろうと推定される。

W348は鎌の身上半と、柄下半を欠損しているが、着挿方法を知ることができる好例である。鎌は片刃地ごしらえ型と称されるものに似ており、柄に茎を挿入後、蔓を巻き、補強している。

W349・350は柄尻にすべり止めを削り出るもので、上端を厚さを2等分し、その亀裂に鎌の茎を挿入したものと考えられる。両者の背には鉄銷が付着し、やや凹む部分がある。これはW348のような細長い茎ではなく、舌状を呈す茎端を「L」字形に曲げたものであった可能性が高い。柄に残存する銷は茎端がはみ出していた痕跡であろう。

短刀 (W351) 柄を呑口式とするもので、刀身は平造りとなっている。柄の中央には鉄製の目釘が残存している。

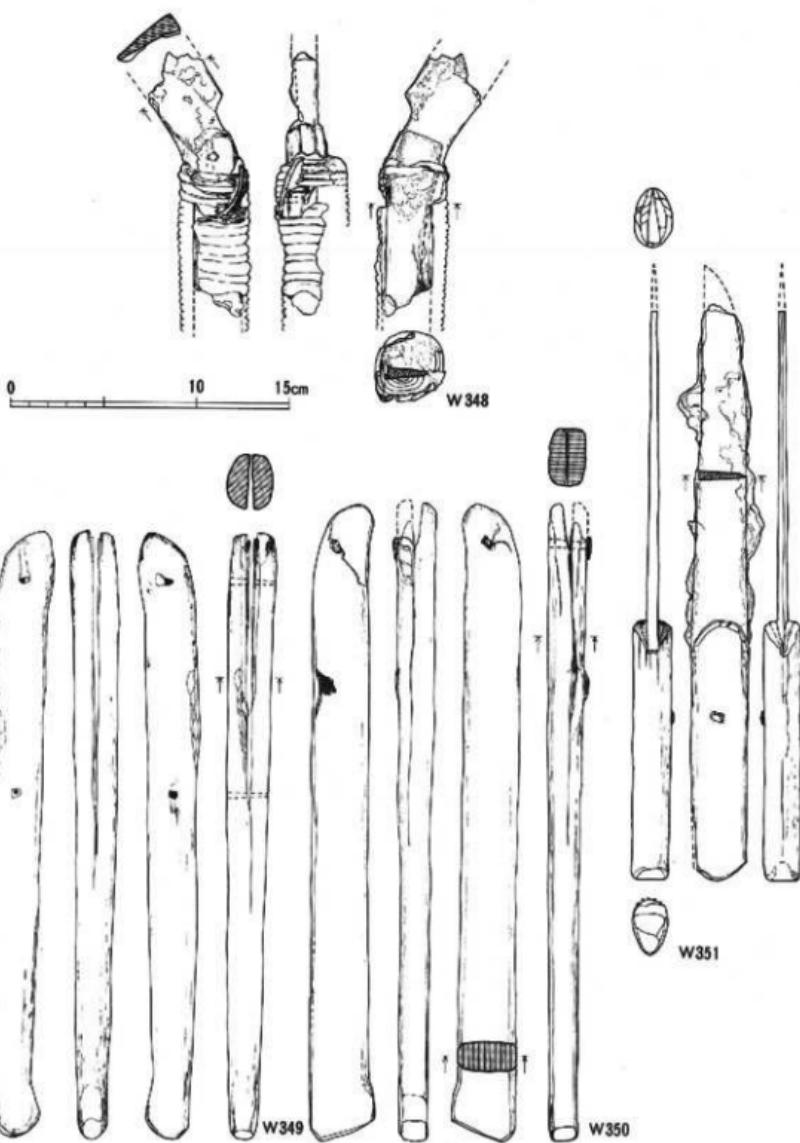
下駄 (W352~362) 下駄は歯も含めると12個体分出土している。

W352は露卯差歎高下駄の歯。一枚平納で台に挿入されていたものと推定される。下端木口は使用痕のささくれがある。W353は露卯差歎下駄の歯で、瓦灯歯と称されるものである。

W354は上部に二枚平納があったものが欠損している。露卯差歎高下駄の歯で、銀杏歯型と称されるものである。W355は陰卯差歎下駄の歯。下端木口はかなり摩滅している。

W356は台と歯を一本で作る連歎高下駄で、歯は下端が瓣形に開く。銀杏歯型である。台には足の痕跡があって、左足用と考えられる。

W357は露卯差歎下駄で、前方の歯穴には三枚平納が折れた状態で残存している。



第206図 鎌柄・短刀柄実測図(82)

1:3

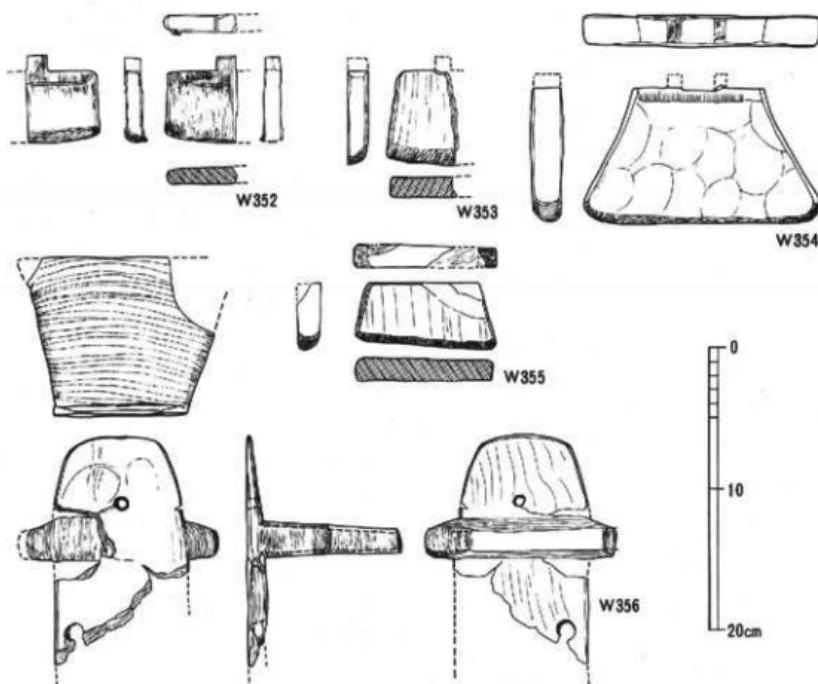
W358は連歯高下駄である。前後の歯は基部から欠損しているが、前歯上面には2本の補強用の円孔がある。

W359は露卯差歯下駄である。歯は二枚平納の瓦灯形を呈す。後歯の納は、穴が斜めにあけられたうえ、それに無理に打ち込まれている。結果納も穴の中で屈曲している。後緒孔には鼻緒が残存する。左足用と判断された。この下駄台はニレ科、後歯はアカガシを使用している。

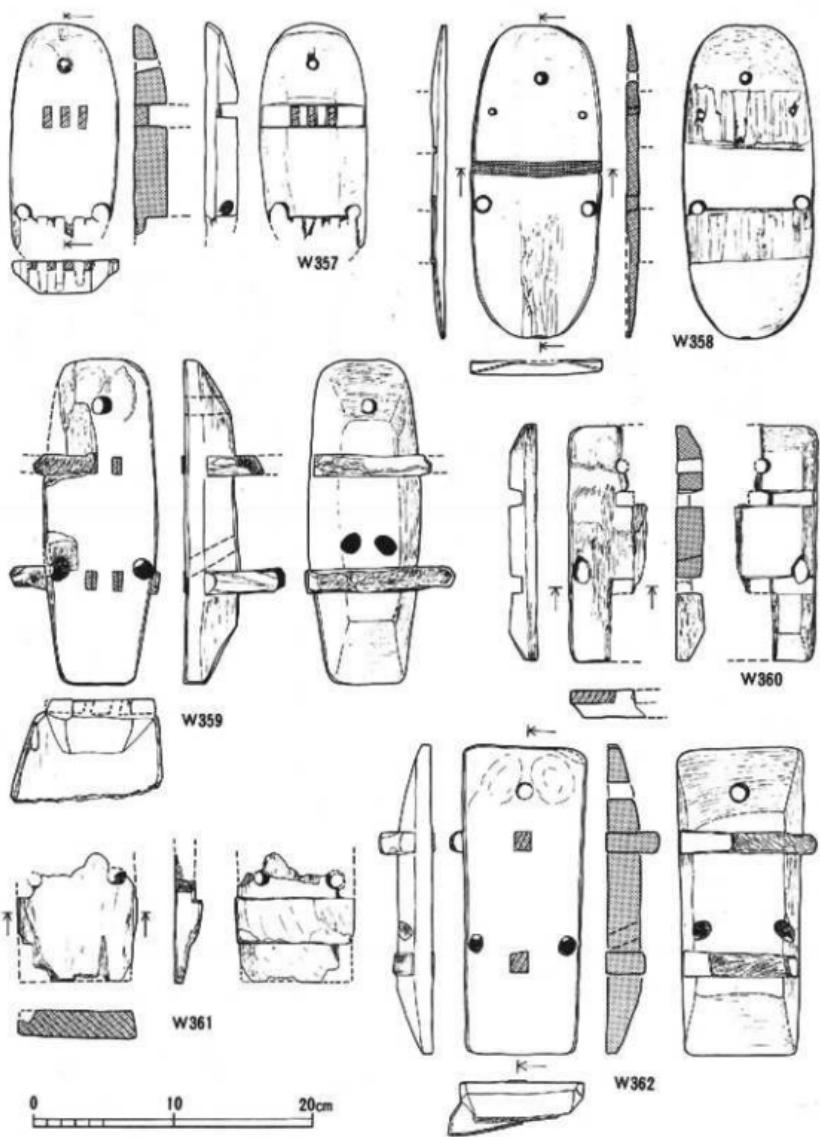
W360は露卯差歯下駄である。中央から半分を欠損している。子供用で右足用と判断される。なお、W352がこの台にはまる可能性が極めて高い。

W361は連歯下駄である。歯の下端は著しく磨滅している。

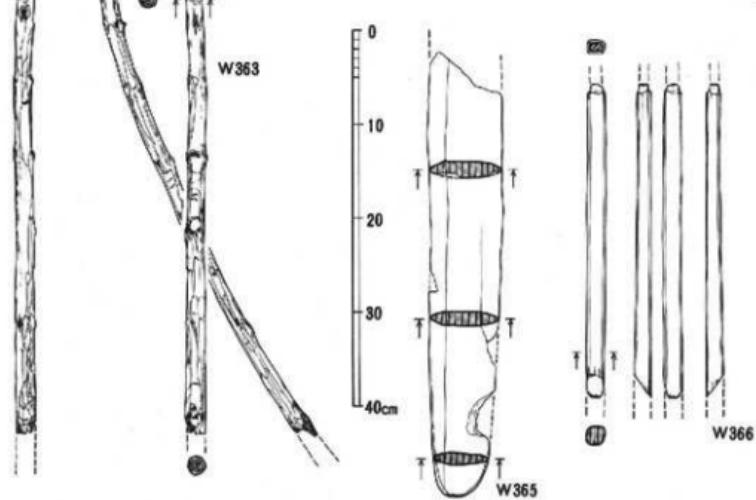
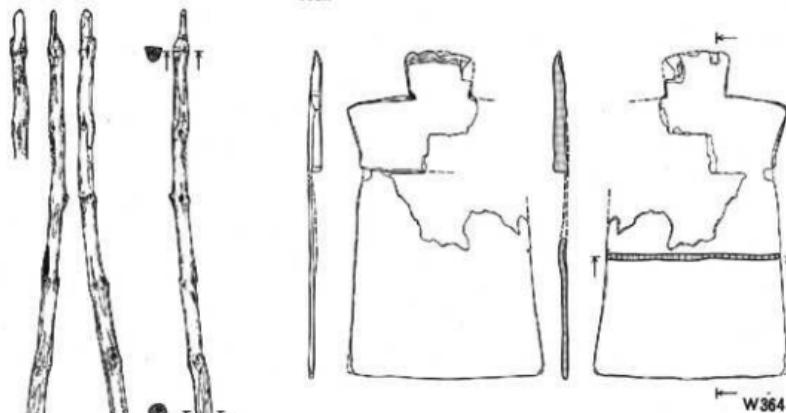
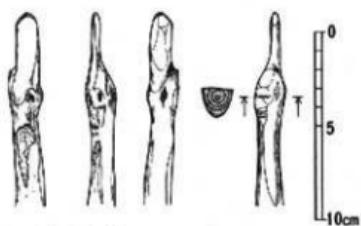
W362は露卯差歯下駄である。前後の歯は一枚平納で挿入する。前後の歯の下端はかなりの差がある、台の上面は水平とはなりえない。著しい履き癖があったことがうかがえる。なお、指の圧痕から左足用であろうと判断される。



第207図 下駄実測図(83) 1:4



第208図 下駄実測図(84) 1:4



第209図 弓・錐状木製品・椎状木製品・棒状木製品実測図(85) 1:6

弓、鉤状木製品・楕状木製品、棒状木製品（第209図W363～366）

この4点は第1河道の水が流れている時期に使用されていたものではなく4～6層内に埋っていたものが第1河道の流水によって洗い出された可能性を考えておく必要がある。

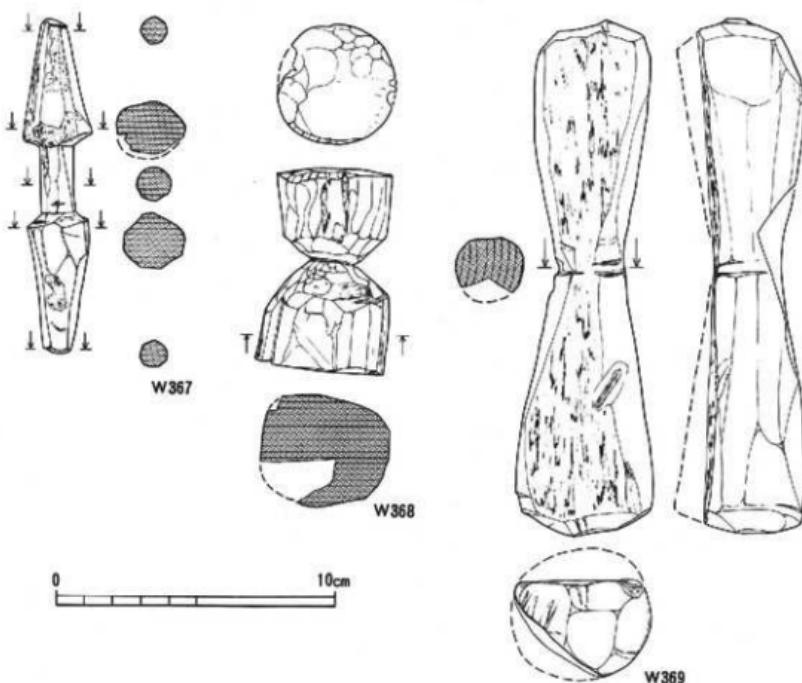
丸木弓（W363） 節の多い小枝を用いて作る弓。上方が木末であるから現存するのは上弦であろう。

全体に面取りをして形を整えようとはしているが、刃物痕は粗く、狩の場で即応して作られたという印象をもつ。

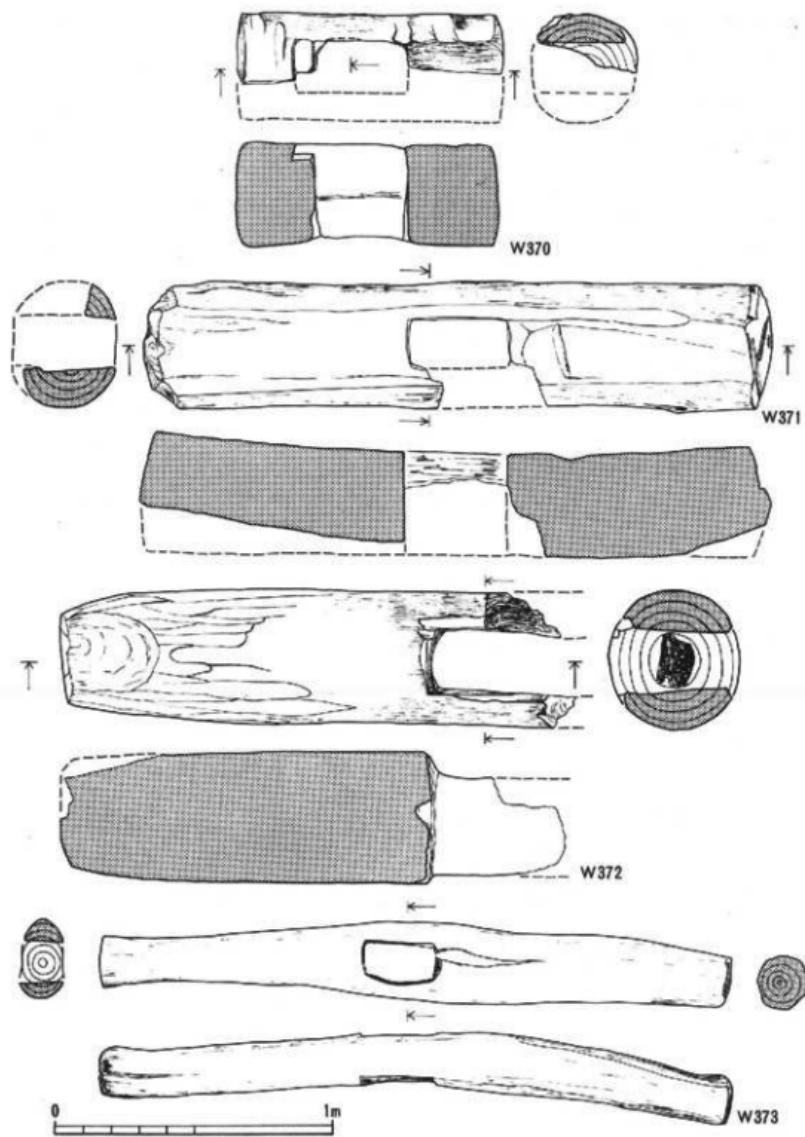
しかし、羽の部分は磨滅が著しいことから比較的長期間使用されたのであろう。

鉤状木製品（W364） 鉤の未成品と考えられるものである。

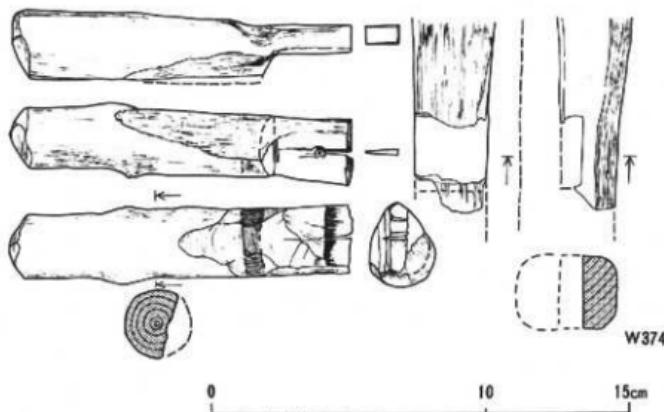
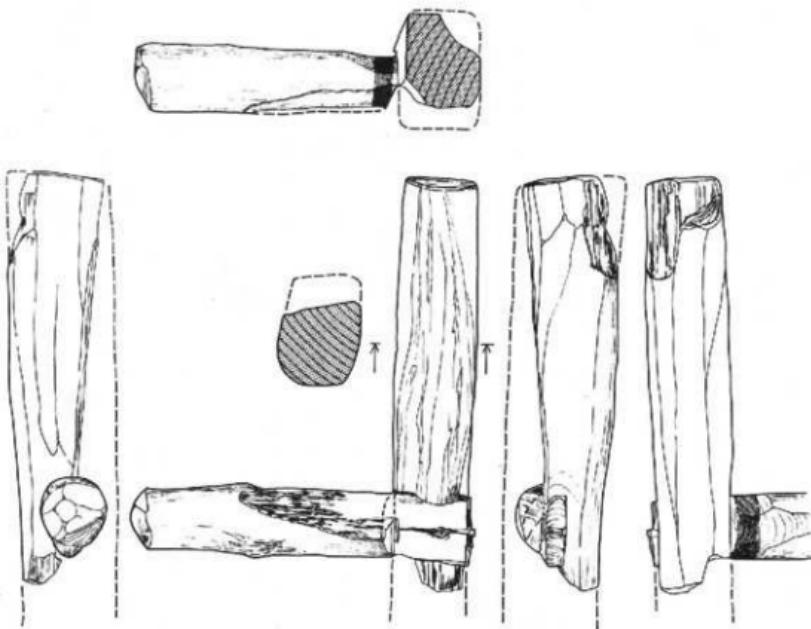
槽状木製品（W365） 下端を舌状に加工し、横断面はレンズを呈す。昭和52年度の調査においても同様な形態のものが若干出土している。



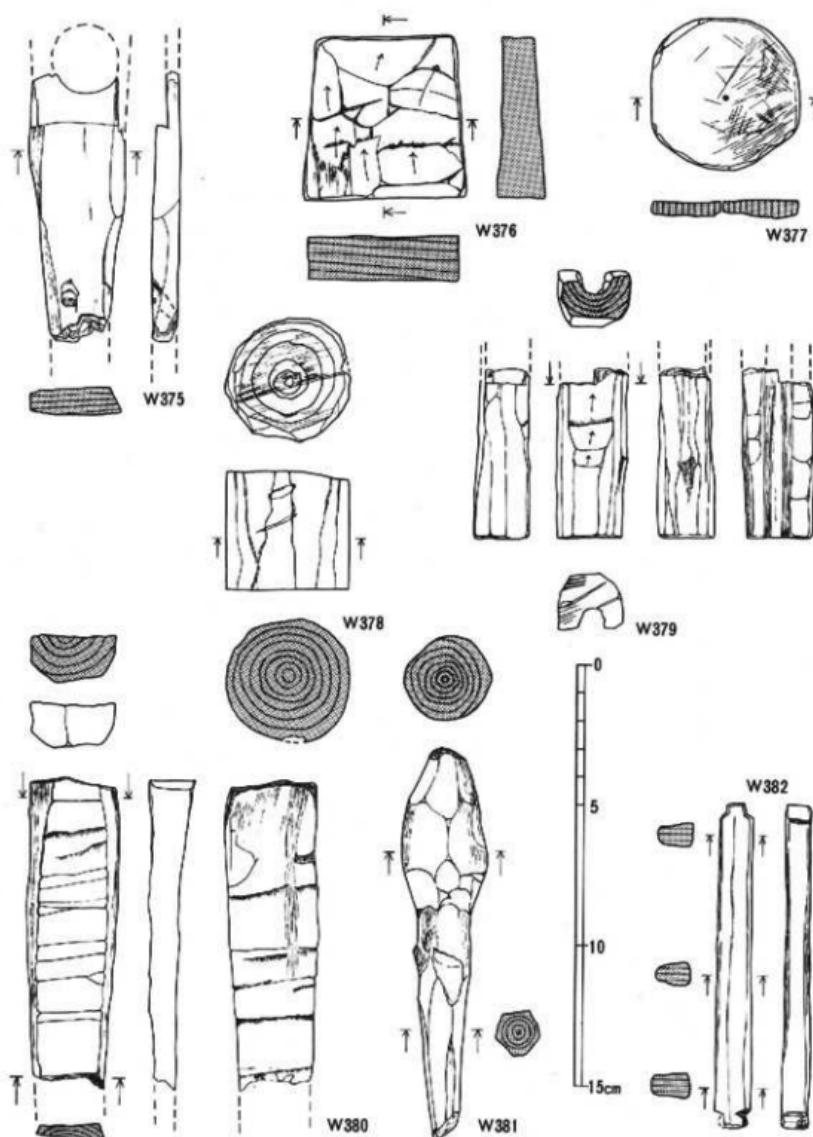
第210図 ツチノコ実測図(86) 1:2



第211図 把手実測図(87) 1:2

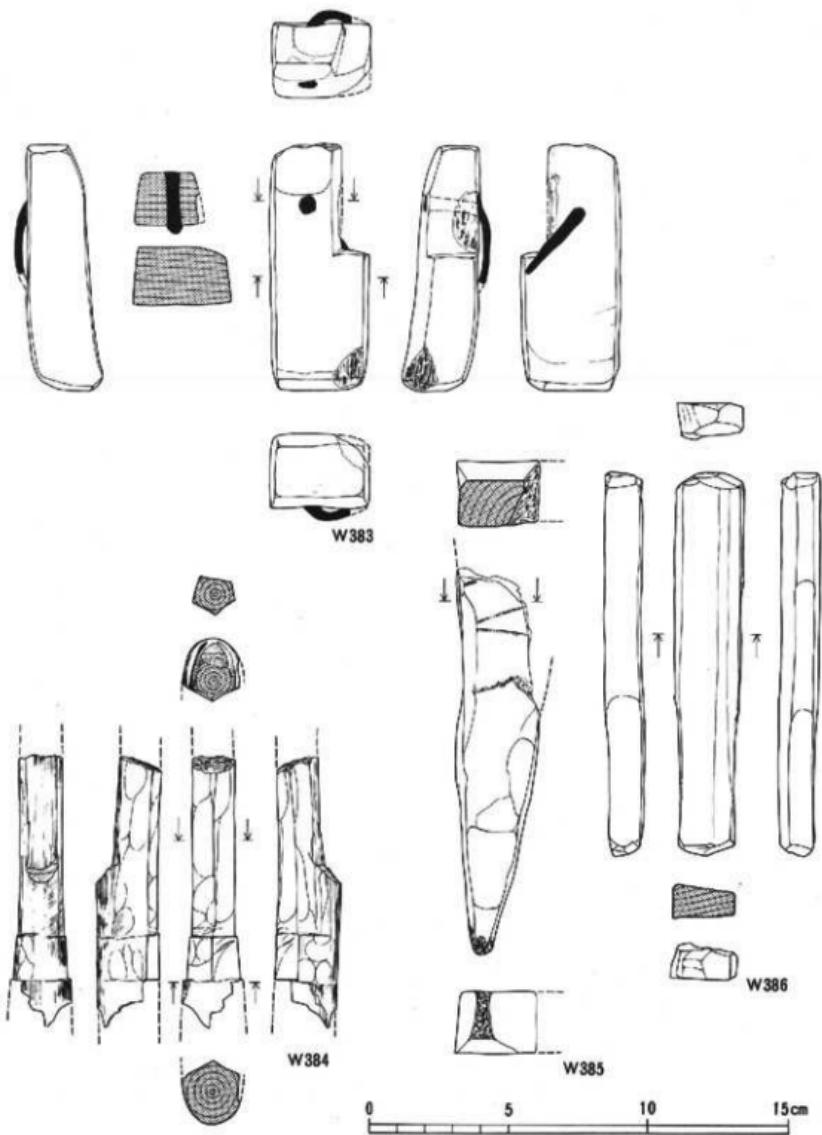


第212図 把手実測図(88) 1:2

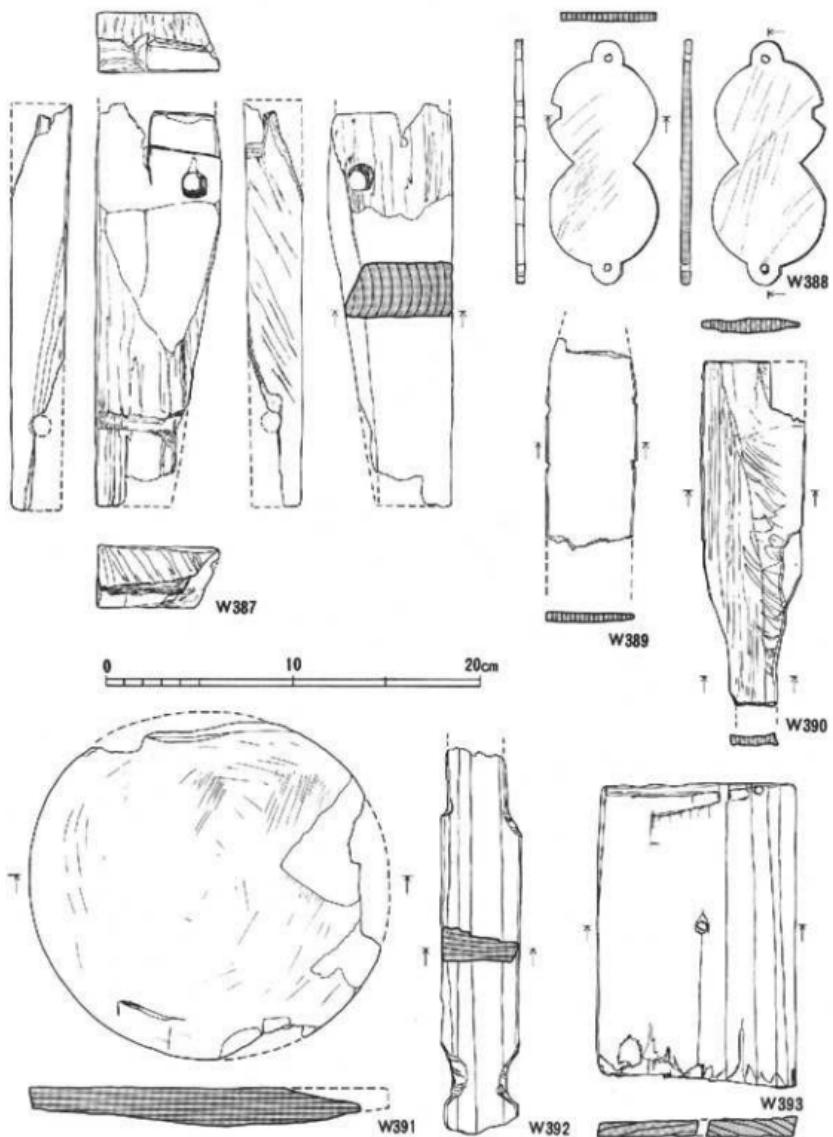


第213図 細車・円板形木製品・クサビ形木製品実測図(89)

1:2



第214図 脚形木製品・クサビ形木製品実測図(90) 1:2



第215図 板状木製品実測図(91) 3:3

棒状木製品（W366） 上・下端は欠損している。横断面は隅丸方形を呈し、上端部は四方から細く削り込むものである。

槌の子（W367～369） 形態の異なるもの3点がある。W367は両端を円錐形に加工し、中央軸はやや細い円柱形を呈すものの中では入念な作りとなっている。W368は両端木口に鋸歯痕が認められる。

W369は3点のうち、大きいが作りは稚で、刃痕も極めて粗い。

把手（W370～373） いずれも芯持材を適当な長さに切り整え、その中央に長方形孔を穿つものである。

把手（W374） 把手と呼称するのは適当でないかもしれないが、横断面・隅丸方形を呈す比較的太い材に長方形孔を穿ち、その孔に芯持材を「T」字形に固定とする。芯持材は片側付きの加工を施し、孔に納めた後は納の中央にクサビを打ち込んで固定している。横方向から挿入した芯持材の端部には入念な面取りが施されている。また図にトーンをかけて表現しておいたが、この部分には帯状の磨滅痕が認められる。あるいは紐のようなものをかけて頻繁に使用したことをうかがわせている。

糸車軸受部状木製品（W375） 糸車の軸受け部の破片であろうと考えられる。上方の欠き取り部は相欠巻きとなり、円孔部分には軸が挿入されるのであろう。

方形板状木製品（W376） 全体に入念な調整を行なうが、用途は不明である。

円板状木製品（W377） 円板状を呈す薄板で、中央に0.2cmの小孔が貫通している。両面に擦痕が認められる。紡錘車状を呈すものの重量はない。

円柱状木製品（W378） 両端を鋸で切り整える円柱状を呈すものである。側面を縦方向に面取りを施し、横断面正円形に近いものにしている。

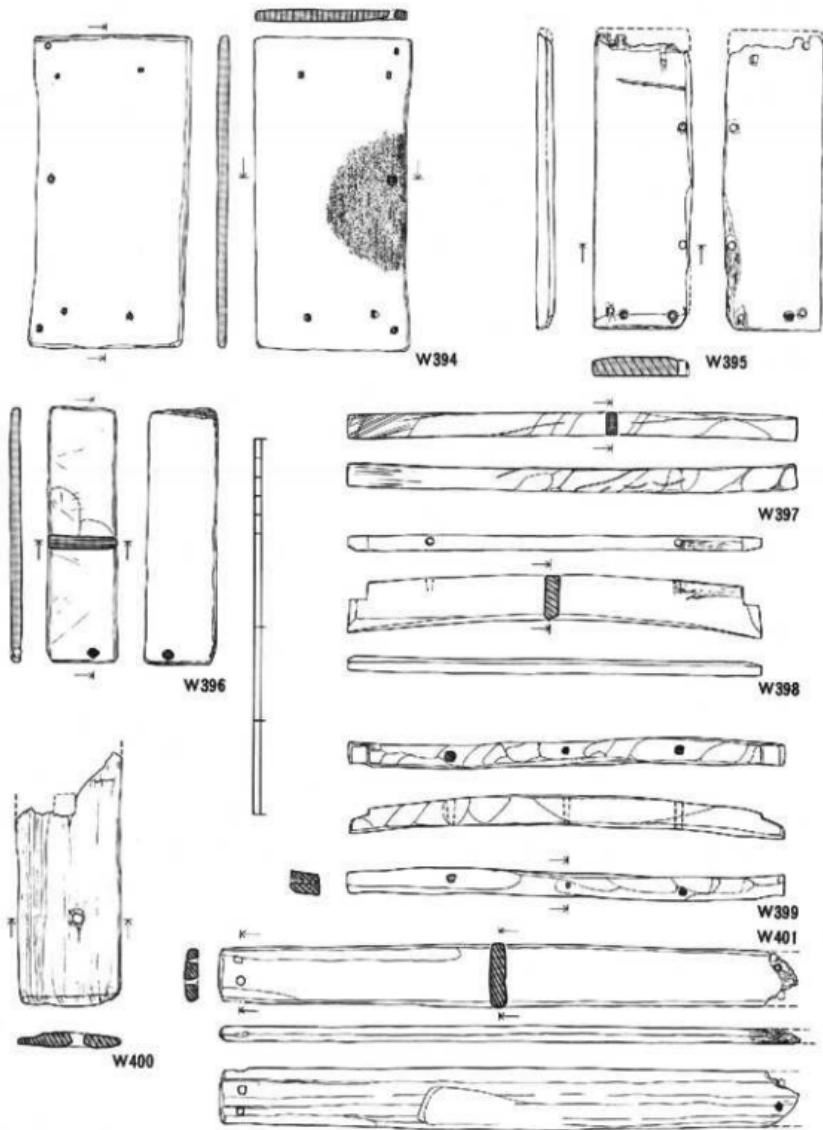
割竹形木製品（W379） 半截竹材を思わせるように、横断面、半月形を呈し、平坦面に断面「U」字形の溝を縦方向に掘る。刃物運びは比較的入念である。用途は不明である。

クサビ形木製品（W380） 芯持材を縦割りにして、下方をやや薄く削るものである。下端を欠損している。

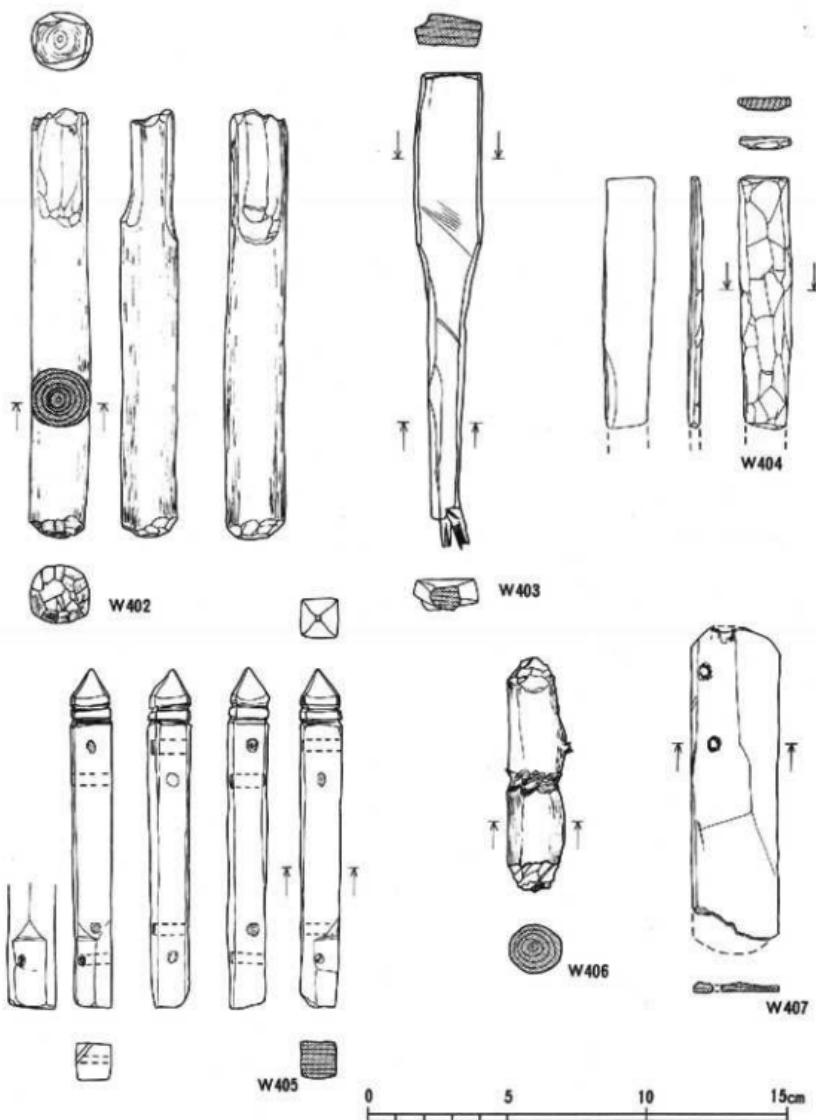
乳棒状木製品（W381） 芯持材の上方をコケシの頭状に加工し、下方をやや細くするものである。男根状木製品とする意見もあるが、速断しがたい。

棒状木製品（W382） 細長い棒状品の両端を短い約状に削るものである。用途は不明である。

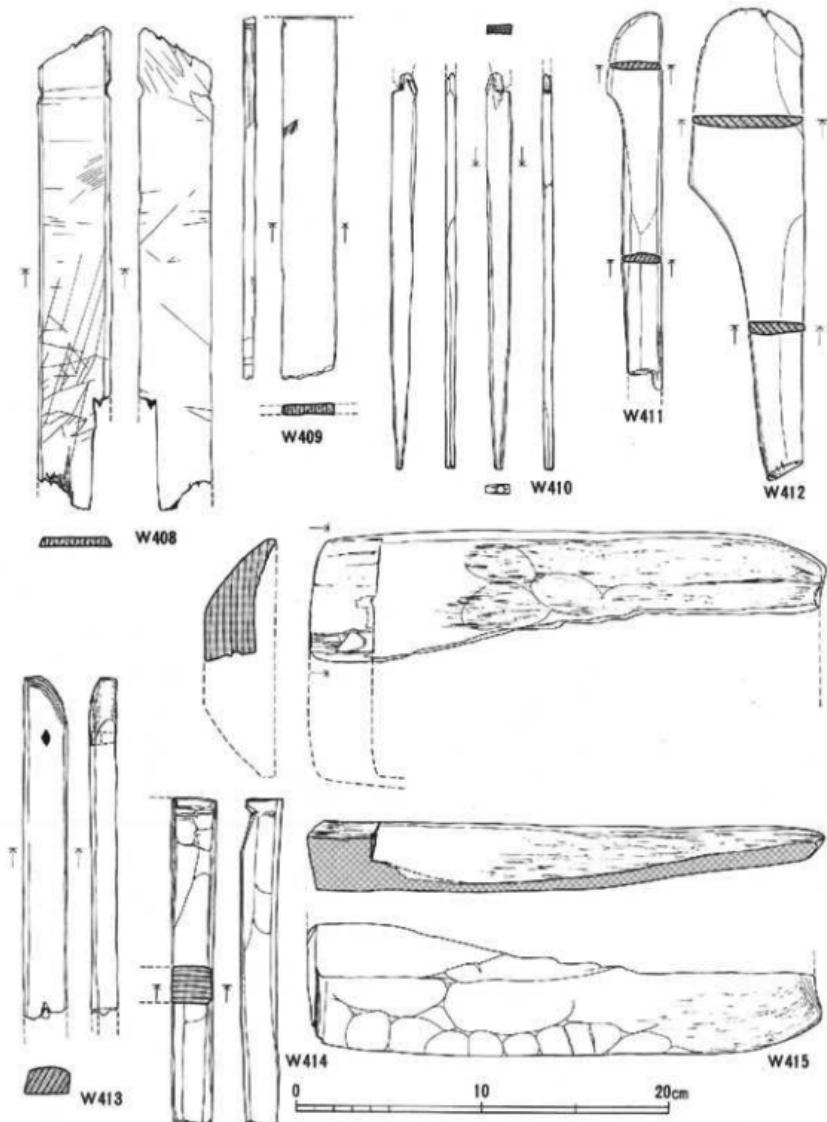
脚状木製品（W383） やや掘曲する脚状の木製で全体に入念な刃物運びがうかがえる。上方の一端を「L」字形に欠き取っている。長さ5cmを測る鉄釘が丸味をおびた面から打ち込まれ裏面ではその先端が打ち曲げられている。小さな樋の脚となるのではないかと推定される。



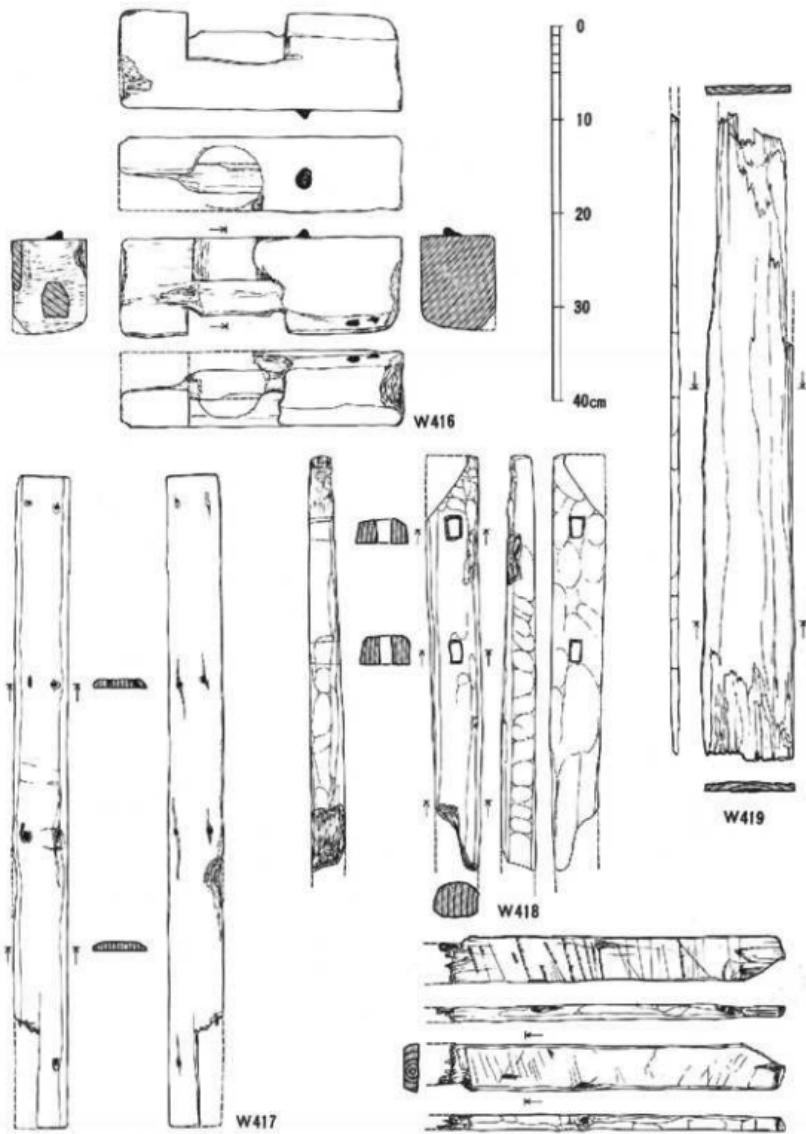
第216図 箱形木製品実測図(92) 1:3



第217図 板状木製品・題簽状木製品・隅飾形木製品実測図(93) 1:3

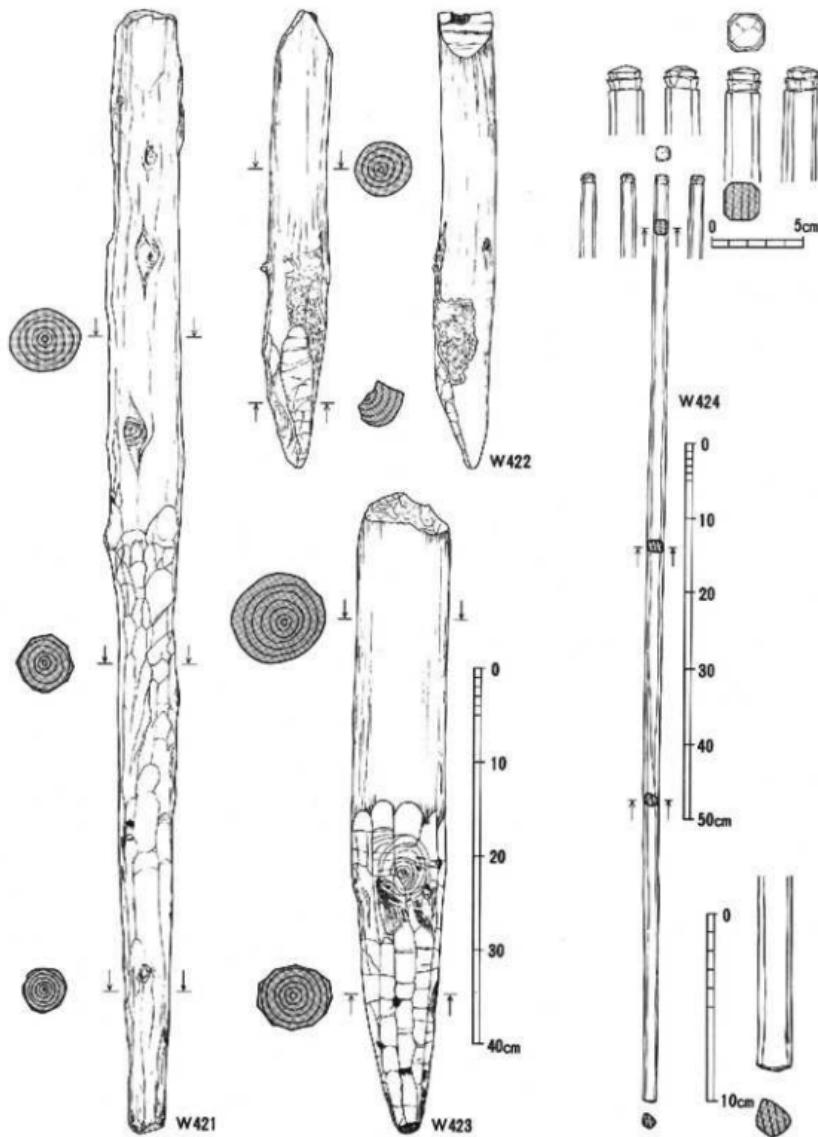


第218図 板状木製品・杓子・アカトリ実測図(94) 1:3



第219図 建築部材・板状木製品実測図(95) 1:6

W420



第220図 木元・杖状木製品実測図(96) 1:6

彌状木製品 (W384) 弓の頭を思わせる芯持材で背の中心に縫を走らせ、腹の部分は丸く面取りする。上端は横断面略五角形を呈す。

クサビ状木製品 (W385) 上端を欠損する四角錐形を呈す木製品である。

棒状木製品 (W386) 横断面略台形を呈す棒状層の下方を両側面から削り込み、やや細くするものである。何かの柄の未成品かとも想像される。

有孔板状木製品 (W387) 平面上方右よりには小円孔が、また下方側面には先のものと直交する形で小孔が貫通している。

双円板状木製品 (W388) 小さな円板を2枚連結させた形のもので、両端に舌状の突出部をもち、突出部には不整形な小孔が貫通している。円辺に接して台形の削り込みが1ヵ所認められる。用途は不明である。

板状木製品 (W389) 上下を欠損するが、上方は流線形に尖るものと考えられる。側辺には相対して計4ヵ所の「V」字形の削り込みが施される。

羽子板状木製品 (W390) 長方形板状材の下方を両側面から削り込み、羽板状とするもので、表面は粗い刃物痕があるが平滑になるまでには加工されていない。

円板状木製品 (W391) 円板状を呈すもので、かなりの厚さがある。この点は円形曲物の底部とは趣きを異にしている。表裏にヤスリをかけたような擦痕が認められる。

両端加工木製品 (W392) 長方形板状材の両端付近を双方から削り込むことによってくびれる表現をしている。上方は欠損しているが、下方よりくびれがやや長いように見える。

有孔板状木製品 (W393) 方形板状材の中央に小円孔を貫通させるものである。

箱物部材 (第216図W394~396・401) いずれも長方形を呈すものであるが、短辺に沿って木釘を打ち付けた痕跡が認められる。W394は内面と考えられる一部に火を受けた痕跡がある。W395・396には木釘が残存する。W396は木釘が1本残存するのみであるが、他の辺は二次的加工の可能性がある。

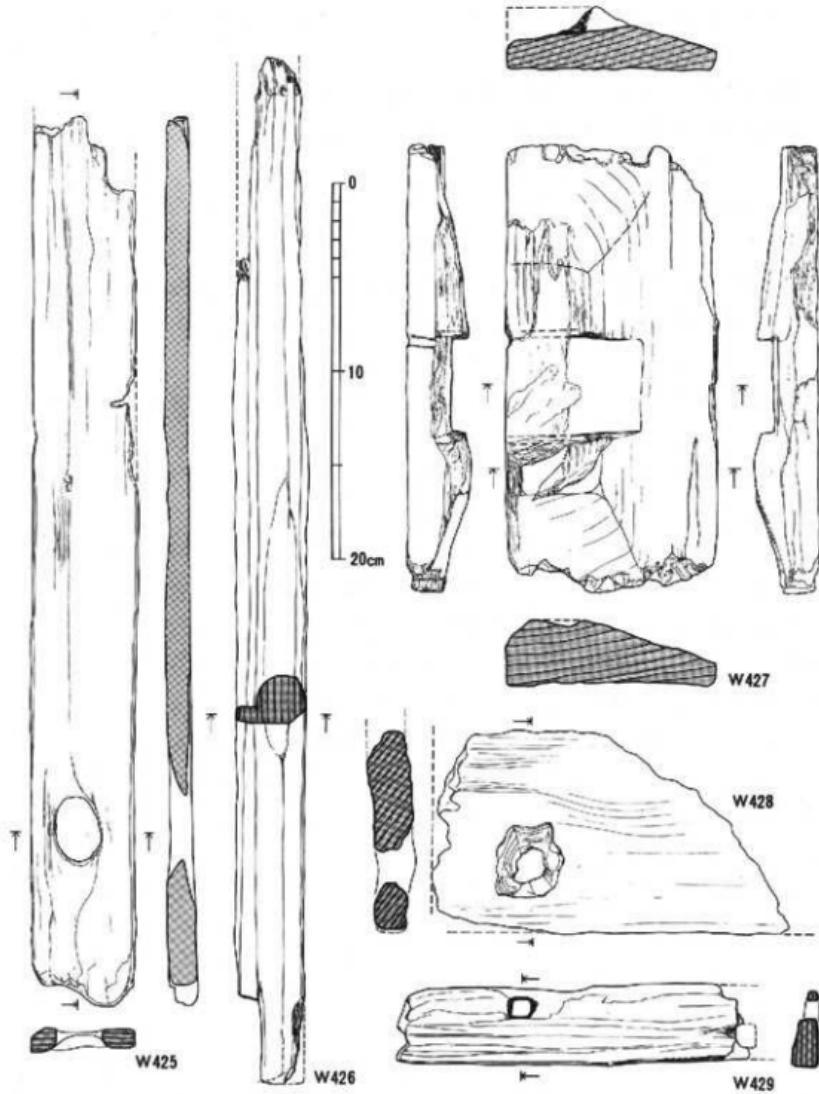
板状木製品 (第216図W397) 細長い物指状の木製品で、両端木口も入念に刃物があたっている。

棟木状木製品 (W398・399) 両端が下方にやや反り気味となり、両端には「L」字状の欠き取りが認められ、鳥居の棟木を小さくした感じがするものである。W398の木端には木釘孔が2、W399には3孔がほぼ等間隔に穿たれ、後者の釘孔は反対側の木端面にまで及んでいる。

柄状木製品 (第217図W402) 芯持材の先端を相対する二方向から削り込むもので、比較的入念な面取りを施す。W374の芯持材に似る。

題簽状木製品 (W403) 細長い方形板状材の下方両側辺を削り込んで細い軸を作り出している。

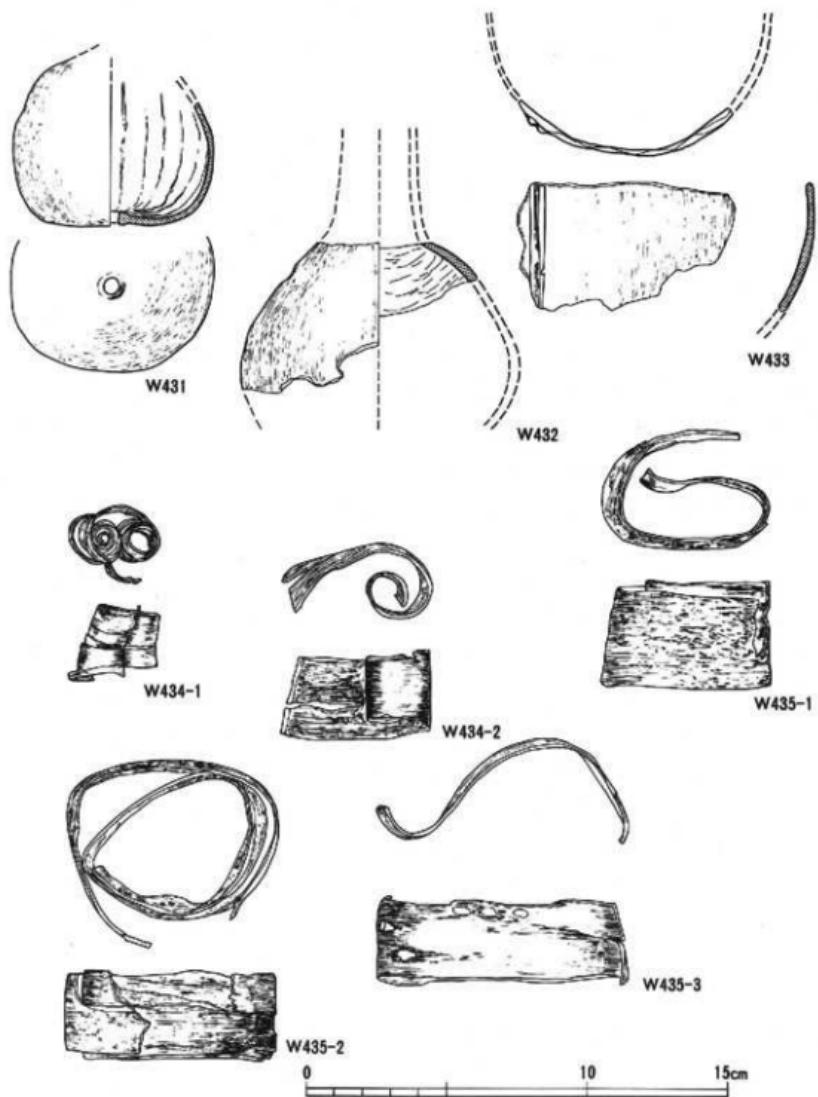
クサビ状木製品 (W404) 下半を欠損しているが、片面はケギ面とし、もう一方の面は入念に



第221図 板状木製品・面縁状木製品実測図(97) 1:3



第222図 縫編笠出土状態実測図(96) 1:3



第223図 ヒヨウタン・ヤシの実・桜皮実測図(99) 1:2

刃物をあてて、中央をやや高くする。札のようなものである可能性もすてきれない。

隅飾形木製品（W405） 上端を四角錐に尖らし、その直下に2条の細い溝を入れる。木釘孔とみられる小孔が上下2段に直交する方向から貫通している。下端の角の棱線が一部削り取られ、平坦面となっている。小形の御輿等の欄干隅に使用されていた隅飾りではないかと推定される。

槌の子状木製品（W406） 小枝を8.3cmほどに切り、その中央横方向に溝状の割り込みを入れる。

有孔板状木製品（W407） 上部を舌状に加工する板状品で、上半左辺よりに小孔が貫通する。

板状加工品（W408～410・413・414） いずれも用途が不明の木製品である。W408は細長い板状材の方面のみに、側辺面取り、上方に溝状のえぐり等の加工を施す。W409は表裏とも平坦な面をもつことから、折敷の底になる可能性もある。W410は扇骨状を呈すものであるが、幅広となる一端に「V」字状の切り込みがある。細く削られている部分は先端部横断面が正円に近い。

W413は横断面略台形を呈す加工材である。上下2ヶ所に鉄釘を打ち込んだ小孔があって、鉄錆が孔内に残存する。W414は板材の一方の面の上辺付近に、断面「V」字形の溝を施すものである一方の側面（木端）には刃物痕がないので、幅広の製品であったものが欠損した可能性がある。

杓文子状木製品（W411・412） 先端部を舌状に加工し、把手部分を片辺のみ、割り込むもので両者は相似形を呈す。

アカトリ状木製品（W415） 全体の約1/2を欠損しているが塵取り状を呈す木製品と推定される。

建築材（第219図W416～420） いずれも全形をうかがうことができるものではなく、中には二次的な加工を受けたものもある。W416は柱材の一部を切断したものと推定され、I形の納穴とみられる中に、小さな柱状の加工が施されている。黒色塗りつぶして表現したのは鉄釘の頭部である。W417はW408と同様に、内辺に面取りを施すもので、7ヶ所に鉄釘が残存する。

W418は横断面略台形を呈すもので、貫通する方形孔2ヶ所が認られる。

W419は上下を欠損する板状材で一方の側辺に手斧による研痕が認められる。

W420は芯持の板材で、表裏とも粗い研痕が認められる。

杭（第220図W421～423） これ以外に杭は若干出土したが、加工の明瞭なもの、特徴的なものを抽出した。いずれも芯持の丸太材の下端を尖らすもので、円錐形にするもの（W421・423）と、片面からのみ研るもの（W422）とに分けられる。W422は打ち込む際、上端木口の割れを防止するために、二方向からそぎ落しがされている。

金鋼枝状木製品（W424） 上端頭部の加工からこのような呼称としたが、全体に華奢な感じがする。

建築材（第221図W425～427） 板材の下端中央に、橢円孔が貫通する。全体に磨滅が著しい。

W426は扉の面縁材であろうと推定される。W427は（第151図W177）にみられるものの類品では

なかろうか。W428は板状材の一隅に不整形な貫通孔をもつものである。

W429は板材に方形の貫通孔が2ヶ所認められる。また、一方の木口には「V」字形の割り込みがある。この孔は位置が互にずれて穿孔されている。このような例はW400にも認められる。

縫編笠（第222図W430） 幅0.4cmの柾目材を厚さ0.1cmにへぎ、テープ状にしたもので縫い込んである。当初籠であろうと考えていたが、笠が土圧でつぶれ、展開図状になったものと判断した。これはもとは鉢の広い円錐形を呈し、その径は50~60cmを測るものであったと推定される。

植物性遺物（第223図W431~434） 人為的な加工がなされたもの、あるいは作業上必要なものとして採集されてきたものである。W431・432は瓢箪で、431は底部に小孔があげられている。

これは細長い棒状の柄をさし込んで拘とするものであろうか。

W433帽子の実の外皮を除去したものの上半部を横方向に切断して作るカップ形容器であろう。

W434・435は桜皮である。435-2は巻き込んだ状態となっているが、全長41cmを測る。いずれも加工痕はないが、これほどの長さのものが自然に剥離することは考えられない。おそらく曲物の縫い合わせに使用する意図から採集されたものであろう。

小 結

以上、旧河道出土木製品の概要を記してきた。この二つの河道は土層堆積状態から第1河道（新）、第2河道（古）という関係が確認されている。それぞれの旧河道から出土した遺物によって第1河道は、室町時代後半、第2河道は平安時代に水が流れていたと推定された。

ここでは、出土木製品から派生する若干の問題点を記して小結としたい。

今回の調査で出土した木製品のうち注目すべきものとして、信仰に関係する遺物がある。第2河道では人形代・舟形木製品、第1河道では順礼札・木像・板塔婆・斎事木製品等が出土している。

人形代は4点あって、このうち2点に打ち込んだ木釘。あるいは打ち込んだ痕跡が認められた。

これは特定の人間に対して怨みをはらす目的で作られた呪の人形代、あるいは呪詛札と称されるものであった。

そのうちの1点は墨で人物像が描かれていた。

人形代の出土例は全国的に見ればかなりの数にのぼるもの、今回のように墨書きの人物全身像は他に例を聞かない。

これは単に稀有な人形代が出上したというにとどまらず、古代末期の風俗をうかがい知ることができる絵画資料としても貴重である。本文中でも若干ふれておいたが、膝まで垂れるような袂を備えた衣が機能的でないことはいうまで



第224図 深衣模式図
(註1より引用)

もないことであろう。図示したものは深衣と称され、「上着の二部式のスカート形の衣服を一つに縫ったワンピース型のもので、儒教の礼的秩序にのっとった衣服」に類似点が多い。人形代に描かれた人物の衣服がこれにあたるか否かはさらず検討を要するが、高位の人物であることを示唆するものであろう。当地における、この種の祭祀にかかる研究は資料が僅少であるため、とり組まれることはこれまでなかった。今回の調査によって人形代を用いた祭祀が古代出雲にも浸透していたことが確認できた意義は大きい。

これら人形代は水辺で流される例が多い。そのような観点からすると第2河道出土舟形木製品や第1河道出土板塔婆も同様であったと解される。たとえば板塔婆は近くの寺院や墓地から流出したこととも考えられなくもないが、²¹⁹ 流瀬頂等の行事の際に水辺に立てられていた可能性が大きい。²²⁰

第1河道出土斎串状木製品もそれらと関連するものではなかろうか。

水に関連する祭祀なり、行事といえば、舟形木製品（第2河道出土W202・上流の第Ⅲ試掘区出土第249図-2）がある。両者は出土地点や形態も大きく異なるが、同様な営みがこの流域に分布していたことを示すものとして興味深い。

この他の木製品として多くの容器が出土した。それらの製作技術としては1) 円形曲物、2) 方形曲物、3) 箱物、4) 箍物、5) 剣物、6) 挽物があつて、第1河道・第2河道ともほぼ同様な傾向を示している。つまり第2河道の時代に至って木製容器の製作技術が出そろった觀がある。

このうち1)の円形曲物、6)の挽物は今回出土した木製容器の中ではかなりの比重を占めている。これは第2河道以前には認められないことで、一般生活における木製容器への依存度や器種構成要素に大きな変化が生じた結果であろう。6)は漆塗挽にみられるように、比較的耐久性に富み、一般的な木製容器であろう。この挽には内面赤色・外面黒色塗籠りとするものが多い。そこで使用されている赤色顔料は①ベンガラ（酸化第二鉄）、②朱（辰砂もしくは水銀朱）、③ベンガラと朱の混合の三種に大別される。²²¹

ところで朱は微量とはいえ、高価な顔料であったと推定されるが、挽の各所に使用されている。しかしそれらの挽を詳細に見ると、漆を塗布し終ったものでも、ロクロ挽き工程の刃物痕が明瞭に認められるものが多い。これは挽を挽き上げる段階においても、木地の表面は滑かに仕上げられなかつたことを示している。一方漆を塗布したものの刷毛目が消えていないものも散見される。²²² このように良質の赤色顔料を用い、鮮かな発色をさせる努力をしながら、木地や素地の体裁には全く無頓着であるように見える。これは中・近世の伝世品中に見ることができる漆挽とは趣を異にしているものといえよう。このような挽頭が出現するのはなぜであろうか。あるいはこれが当時の一般的なものであった可能性も十分考えられるのであって、地域と時代背景を考え合わせ検討すべき内容をもっている。

漆塗椀といえば、昭和52年度調査時に、第Ⅲ調査区東壁沿の旧河道内から、漆絵の描かれたものが出土している。しかし当時、分層の検討が不十分であったことから、河道も1本と判断された。さらに伴出遺物も僅少であったことから、その所属時期も判然とせず、平安時代～鎌倉時代と報告したことがある。^{註16} 今回の調査によって第1河道から出土しているものの中に以前出土した漆絵と図柄が類似しているものが確認できた。このことから以前報告した時期よりやや遡るものであろうと判断するにいたった。

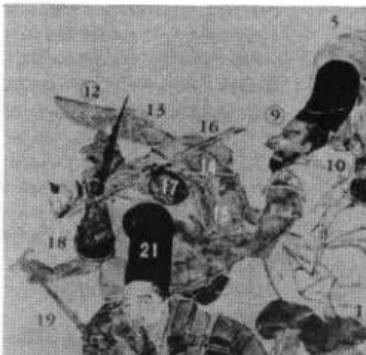
これ以外に容器としては植物種子の外皮等を用いたものがある。瓢箪の底部に小孔をあけるもの、^{註17} 椰子の実の上端を切り取り容器とするもので、いずれも自然の形態を呈している。これらは第1河道から出土したとはいえるが、第2河道を含む、より古い包含層から流出した可能性もあり、時期を特定しえないものであった。

綾編笠としたものは第1河道内の出土遺物で、かなり変形して出土したものである。^{註18} 室町時代の風俗を考えるうえでも貴重な資料である。

第1河道内出土順礼札は河道の形成時期や各種出土遺物の年代観を検討するために大きく寄与するものであった。一方「三十三所順礼」がどの寺院を対象としているのか、当時の信仰形態を探るうえでは興味深い資料を得たことになる。

註

- 註1 武田佐知子「中国の衣服制と冠位十二階—五行思想と服色—」『古代国家の形成と衣服制』 1984
- 註2 左胸に2本、右胸に1本の木釘が打ち込まれている事実は、女性の急所とされる両胸と心臓を狙ったものと解される。つまり呪詛の対象は女性であろうと推察される。
- 註3 第1・第2河道出土漆器類の樹種鑑定、木取り、色漆（赤色系漆）の含有顔料の定性分析は財団法人元興寺文化財研究所・保存科学研究室の北野信彦氏にお願いした。
各調査・分析方法は以下の方法を行った。
 - 1) 樹種鑑定 出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することとした。試料は、木口、板目、板面、3方向の切片は、カミソリ刃を用いて作成した。切片は常法に従い脱水し、換鏡プレパラートに仕上げた。
 - 2) 木取り方法 樹種鑑定の切片作成時に同時に行った。
 - 3) 漆膜面の塗り構造 肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察し、簡易顕微鏡を用いて細部の観察を行った。次に1mm×3mm程度の漆膜を採取し合成樹脂（ニボキシ系樹脂／アラルダイト



第225図 綾編笠絵図
(註16より引用)

GY1252 JP・HY837)に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ、塗り重ね構造、色調、顔料粒子の大きさ、下地の状態等について顕微鏡観察を行った。

- 4) 色漆(赤色系漆)の含有顔料の定性分析、色漆(赤色系統)に用いられていた含有顔料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所 S-415Fの走査電子顕微鏡に振動製作所EMAX-2000エネルギー分散型X線分光装置(X線マクロアナライザ)を運動させてそれを用いた。分析設定時間は500sec、分析ポイントは30倍スポット照射。なお分析チャートの補正には Ceobcnical Journal vol.8 Pt75-192 (1974) 「1974 compilation of data on the osj geodemical yefevco sample Jg-1 grandiorite and JB-1 basalt Atusi Ando others の JG-1, JB-1 サンプルを用いた。
- 5) 黒色系漆は顕微鏡観察によると黒色系・わずかに朱粒等を含む暗紫色系・透明感の強い赤褐色系の、3種に大別できる。

このような差異が何に起因するのかという点については詳細な分析が必要であるが今回は行わなかった。

下地については木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析したところ、無機物を含んでいないため、ビーグ自体がほとんど見出されなかった。顕微鏡観察によって漆下地でなく、炭粉下地であろうと判断した。

これらの調査・分析結果は「木製品・観表」及び本文中に記した。

註4 成田寿一郎編『木材工芸用語辞典』1976

註5 文字の判読に際しては山本清、井上寛司、藤岡大拙の各氏の教示を得た。

註6 成田寿一郎『木の匠—木工の技術史』1983によれば「樽の桶板は必ず板目取りであるに対し、桶は板目取りである」とされる。これからすると例外的事例か。

註7 高知県土佐物連合協同組合『土佐物語総合カタログ』1977

註8 類似したものは『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書』—Ⅰ— 島根県教育委員会 1987にはエブリとされている。

註9 註1と同じ。

註10 道澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『日本常民生活辞引』第2巻 1984には「一遍塗絵」第9巻のものとして、人々の多く通る道ばたや橋のたもとに看板を立て、不慮の死をとげたものの供養をしている風景がある。

大島建彦編『無縫仏』1988

註11 北野信彦氏の分析によった。

註12 乾燥時間短縮化あるいは漆面を平滑にする配慮の欠如が認められる。

註13 『タテチヨウ遺跡発掘調査報告書』—Ⅰ— 島根県教育委員会 1979

註14 第1河道出土W279に桜花風の花弁が認められる。

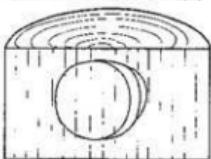
註15 『木器集成図録』近畿古代篇 奈良国立文化財研究所 1985には瓢の杓の例が示されている。

註16 註10と同じ。「北野天神縁起」に荷持ちの男が被縁笠をかぶる図が見える。

椀・皿類の木取模式図



横本地 板目取(追取)
(A)



横本地 枝目取(ニツ割)
(B)



豊本地 心持ち
(C)

塗り構造の分類模式図

漆(I)
炭粉下地
木胎

(I)

色漆
漆(I)
炭粉下地
木胎

(II)

漆(II)
漆(I)
炭粉下地
木胎

(III)

色漆
漆(II)
漆(I)
炭粉下地
木胎

(IV)

漆(III)
漆(II)
漆(I)
炭粉下地
木胎

(V)

木 製 品 一 覧 表

()内の数字は残存法量を示す

種 番 号	図版 ページ	出土 地 点	層位	器 種	法 量(cm)			木取 番 号	備 考
					全 長	幅 (径)	厚 さ		
198	159	N26E8		人形代	56.8	7.3	1.0	A	247
199	159	N26E8	6	人形代	17.5	2.3~1.1	0.2~0.1	A	94
200	159	N25E6		人形代	(20.2)	(3.9~2.7)	(0.4~0.3)	B	92
201	159	N26E8		人形代	28.8	5.3	0.5	A	3 墓室人物像あり
202	160	N10E4	7	舟形 木製品	22.2	5.1	1.8~1.6	B	316
203	160	N25R7		刀子柄	17.9	(1.6~1.3)	—	A	70
204		N17E9	6	皿	—	13.0	(0.9~0.3)	H	337
205	160	N25E7	5	椀	(6.2)	(26.0)	(0.6~0.5)	89	塗り構造 内外面とも青
206	160	N26E8		曲物	—	17.6	(漆) 5	A	198
207	160	N14E6		曲物	(18.1)	—	0.7	A	348 脇と側は板皮止
208		N13E5	7	曲物	—	(19.0~18.4)	0.4	A	372 脇と側に板皮止
209		N13E5	7	曲物	—	12.0	0.6~0.5	A	373 脇と側に木釘止
210	160	N15E6	4	曲物	—	14.3~13.2	0.8~0.5	A	345 脇と側は木釘止
211		N15E8	5	曲物	15.2~14.8	—	—	A	319 脇と側は木釘止

掲図 番号	国版 ページ	出土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取	査 査 番 号	備 考
					全 長	幅 (往)	厚 さ			
212	161	N18E8	4	曲物	16.3	(16.3)	1.1	A	300	底と側は木釘止
213		N16E7 N11E5	6	曲物	(20.8)	(10.3)	0.5	A	286	底と側は木釘止
214		N25E6	2		-	(20.0)	0.9~0.4	B	137	
215		N17E7	4		-	(14.8)	(0.8~0.2)	A	315	
216		N25E7	3	曲物	-	(20.0)	(深) 6	A	1	側板を残すのみ
217	161	N26E8	3	曲物	-	(18.0) (7.2)	0.5	A	6	底と側は板底止
218		N26E7		曲物	(29.5)	(5.0~4.0)	(0.2~0.1)	A	196	側板
219	161	N18E8	4	曲物	-	14.2	0.5	A	301	底と側は板底止
220	161	N26E8	3	曲物	-	14.0	0.5	A	248	底と側は板底止
221		N24E7	3		56.5	7.5	0.6	A	237	
222		N24E7	4-1		(39.0)	5.2	1.1	B	232	折敷の底板か
223		N26E8	5		(28.1)	(1.6~1.0)	0.5	B	47	扇骨状を呈す
224		N18E8	6		11.8	3.0	2.8	C	265	
225		N25E7			8.2	2.0	1.1	B	4	
226		N25R7	細い砂 の層と の間		(12.1)	(0.9~0.5)	(0.9)	A	12	
227		N25E7	3		24.0	1.8~1.0	-	C	130	
228	161	N18E9	7		59.2	20.7	4.2	A	393	広敷未成品
229	161	N25E7	3	織B1	(12.0)	(4.6)	1.3	A	5	
230	162	N18E9	6	織A	76.0	9.2	3.2	A	439	
231	162	N17E8	6	織A	(43.2)	(8.8~2.3)	(3.5~0.4)	A	332	
232	162	N17E8	6	砧	35.3	7.4~3.5	-	C	353	
233	162	N26E8	6		25.6	12.6	13.6		238	建築余材か
234	162	N26E8	灰色色 帶質土層		21.0	15.6	8.3		208	建築余材か
235		N26E8	第2河道 西岸	柱	314.6	23.2		C	346	断面八角形を呈す
236		N26E8		杭	78.8	6.9	6.0	A	239	
237		N18E9	7	杭	54.4	(5.3~3.8)	-	C	389	

説 明 番 号	図版 ページ	出 土 地 点	層 位	器種	法 量(cm)			木取	実 測 番 号	備 考
					全 長	幅 (径)	厚 さ			
238		N24E7	6		(43.4)	8.0	1.5	B	229	
239		N19E9	6		(37.9)	(10.9~2.5)	(6.2~3.0)	C	358	
240		N17E8	6		85.6	(4.5~2.5)	—	C	417	
241		N18E8	6		59.3	10.0	7.0~5.5	C	392	側面に墨痕あり
242		N15~16 E7	7		61.0	6.5~5.3	—	C	434	
243	163	N23E8		麻札札	8.9	(2.8~2.5)	0.2~0.1	B	55	表面に墨書あり
244	163	N25E9	3	札状 木製品	7.4	2.5	0.4	Cか	118	
245	163	N24E8	3	札状 木製品	11.7	4.3	0.5~0.2	A	123	
246	163	N13E6	7	札状 木製品	9.7	4.1	0.7	A	282	
247	163	N25E9	3	札状 木製品	7.6	4.9	0.6	Cか	118	
248	163	N18E5		札状 木製品	5.7	4.4	0.6~0.4	A	136	
249		N16E7 N11E4	6	櫛	(2.6)	(3.3)	0.7	D	287	
250		N21E7		櫛	(4.9)	(4.5)	(1.2)	D	147	
251		N24E9	6	扇形 木製品	—	—	—		19	開口19.4cm、奥行18cm
252	164	N26E9	3	木像	10.3	2.8	2.0	A	112	
253	164	N25E9	3	板塔婆	(37.1)	3.8~2.0	0.9~0.7	A	51	表面に墨書あり
254	164	N26E8		板塔婆	(12.4)	(3.1~2.3)	(0.4~0.3)	A	78	
255	164	N25E9	3	板塔婆	(33.3)	(8.0~3.0)	0.8	A	37	
256	165	N29E9	3	扇形状 木製品	(26.0)	1.0	0.4	A	122	
257	165	N25E9	3	扇形状 木製品	(24.5)	1.0	0.6	A	122	
258	165	N25E9	3	扇形状 木製品	25.8	0.9	0.4	A	122	
259	165	N25E9	3	扇形状 木製品	25.5	1.1	0.4	A	122	
260	165	N25E9	3	扇形状 木製品	24.0	1.1	0.4	A	122	
261	165	N25E9	3	扇形状 木製品	(11.5)	0.7	0.6	A	122	
262	165	N25E9	3	扇形状 木製品	(11.8)	1.1	0.5	A	122	
263	165	N25E9	3	扇形状 木製品	17.0	0.5	0.5	A	122	

捲筒 番号	図版 ページ	出土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取 扱	炎 割 番号	備 考
					全 長	幅 (径)	厚 さ			
264	165	N25E9	3	壺形狀 木製品	(15.3)	0.6	0.6	A	122	
265	165	N25E9	3	壺形狀 木製品	(25.5)	1.0	0.5	A	122	
266	165	N25E9	3	壺形狀 木製品	24.6	0.4	0.5	A	122	
267	165	N25E9	3	壺形狀 木製品	22.6	0.6	0.5	A	122	
268	165	N25E9	3	壺形狀 木製品	21.2	0.7	0.5	A	122	
269	166	N24E9		椀	— 高台径 5.8	(12.2)	—		176	塗り構造 内外面ともⅠ
270		N23E8		椀	— 高台径 7.0	13.4	高さ 6.9		191	塗り構造 古Ⅱ・外Ⅲ 内面赤色漆、外面黒色漆塗りとし 跡様あり
271	166	N22E8	3	椀	— 高台径 6.0	12.4	高さ 8.2		186	塗り構造 内外面ともⅠ
272		N22E8	3	椀	— 高台径 6	11.6	高さ 10		189	塗り構造 内Ⅲ・外Ⅳ 内面赤色漆、外面黒色漆塗りの後 紋を入れる
273		N23E8		椀	— 高台径 2.0	(8.2)	高さ (3.5)		177	塗り構造 内外ともⅠ 内外とも黒色漆塗り
274		N18E5	3?	椀	— 高台径 6.0	(3.5)			165	塗り構造 内外面ともⅠ
275		N23E8		椀	— 高台径 8.4	(13.4)	高さ (8)		167	塗り構造 内外面ともⅠ
276		N22E8	6	椀	— 高台径 7.4	17.2	高さ 9.6		197	塗り構造 内Ⅰ・外Ⅲ 内外とも一部黒色漆残存
277		N24E9	3	椀	— 高台径 6.8	11.5	高さ 6.5		161	塗り構造 内外面ともⅠ
278		N24E8		椀	— 高台径 7.6	(10.4)	高さ (2.6)		152	塗り構造 内外ともⅠ 内外とも黒色漆塗り
279	166	N21E6		椀			0.3	織 木取り	168	塗り構造 内Ⅲ・外Ⅳ
280		N19E5	3	椀	— 高台径 6.4	(11.8)	高さ (7.7)	織 木取り	190	塗り構造 内Ⅰ
281		N21E6		椀	— 高台径 8.4	15.0	高さ (1.7)	織 木取り	168	塗り構造 内Ⅲ・外Ⅳ
282		N26E8	3	椀	— 高台径 7.8	(14.3)	高さ (3.2)	織 木取り	160	塗り構造 内外面ともⅠ
283		N22E7	3	椀	— 高台径 4.8	(7.6)	高さ (2.0)	織 木取り	151	塗り構造 内外面ともⅠ
284		N19E5	3	椀	— 高台径 5.6	(10.2)	高さ (2.5)	織 木取り	149	塗り構造 内外ともⅠ
285		第1河邊		椀	— 高台径 6.0	(10.0)	高さ (2.5)		182	塗り構造 内Ⅲ・外Ⅳ 内外とも黒色漆塗り
286	166	N19E5	3	椀	— 高台径 8.2	(15.0)	高さ (5.5)		169	塗り構造 外Ⅰ 内面は黒色漆塗り、外面は漆剥落
287		N25E8		皿	— 直 14.0	19.0	高さ 2.2	織 木取り	179	
288	166	N22E7	3	椀	— 高台径 6.4	13.6	高さ 6.0	織 木取り	187	内面赤色漆・外面黒色漆塗り
289	166	N23E8	3	椀	— 高台径 5.2	(12.6)	高さ (5.0)	織 木取り	188	塗り構造 内Ⅰ・外Ⅱ 外面薄駆か

掲番号	図版 ページ	出土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取 査番号	備 考
					全 長	幅(横)	厚 さ		
290		N21E6	6	楕	—	17.0 高台径10.4	高さ 6.2	154	盛り構造 内外面ともⅢ
291		N24E9	6	楕	—	(13.0) 高台径 8.0	高さ (3.2)	192	盛り構造 内外面ともⅠ 内外面とも黒色漆塗り
292		N23E8		楕	—	高台径 7.0	高さ (1.3)	185	
293		N18E5	3	楕	—	17.0 高台径 7.2	高さ 5	166	盛り構造 内外面ともⅠ
294		N25E8 灰茶色 芯上層		楕	—	20.4 高台径 9.4	高さ 5.5	181	盛り構造 内外面ともⅠ
295		N17E5	6	楕	—	(11.5) 高台径 8.6	(2.0)	150	盛り構造 内外面ともⅠ
296		N24E8	3	楕	—	(14.0) 高台径 9.0	高さ (3.4)	156	盛り構造 内外面ともⅣ
297		N24E8 表土 剥離層		楕	—	16.0	高さ (3.4)	175	盛り構造 内外面ともⅠ 内外面とも黒色漆塗り
298		N25E8 灰茶色 粘土質		楕	—	14.2	高さ (4.0)	164	盛り構造 内外面ともⅣ 擦損 265 と同工の手になるか
299		N24E8	6	楕	—	20.0	高さ (5.1)	159	盛り構造 内外面ともⅠ
300		N25E9 川底 砂層		楕	—	15.2	高さ (4.2)	158	盛り構造 内外面ともⅠ 内外面とも黒色漆塗り
301		N18E5	3	楕	—	5.0	高さ (4.0)	C?	88
302		N22E7	3	楕	—	(16.6) 高台径 10.6	高さ (6.2)	155	盛り構造 内Ⅰ
303		N23E8		楕	—	(13.5)	高さ (7)	157	盛り構造 内Ⅰ
304		N26E6 淡灰色 砂質 土帶		楕	—	—	—	153	盛り構造 内Ⅰ・外Ⅱ
305		N23E8 川底 砂層		楕	(2.5)	(2.5)	(0.2~0.1)	184	盛り構造 内Ⅰ・外Ⅱ
306	166	N23E8		楕	(4.8)	(5.5)	(0.4)	162	盛り構造 内Ⅲ・外Ⅳ 内面赤色層、外側黒色層地に抹除
307		N22E8	3	楕	—	10.0	高さ (3.8)	163	盛り構造 内Ⅰ・外Ⅳ 内面赤色層、外側黒色層地に抹除
308		N22E7	3	楕	—	14.0	高さ (2)	172	盛り構造 内Ⅲ・外Ⅳ
309		N18E5	3		14.6	2.6	2.1	138	盛り構造 V
310		N23E8			8.1	8.1~7.9	0.7~0.3	A	73
311		N24E9	6	曲物	—	10.2	0.6	A	57
312		N25E9		曲物	—	12.0	高さ (4)	A	21 側板は極度止
313		N21E7	3	曲物	—	120.0	0.8	A	134
314		N26E8		曲物	—	16.0	(0.6~0.4)	B	135 側板の圧痕あり
315		雨 鋼柵区 排水溝		曲物	—	15.0	0.8	A	142

捲回 番号	岡版 ページ	山土 地点	層位	器種	法 量(cm)			木取 実 番 号	備 考
					全 長	幅 (径)	厚 さ		
316		第1河通	3	曲物	—	26.0	1.0~0.7	A	74
317		N26E9	5	曲物	—	28.0	0.5~0.2		72
318		N22E8 川底面	曲物	—	36.0	0.9	A	125	
319		N23E8			(11.8)	—	(0.8~0.7)	A	54 正円となる可能性あり 木釘残存
320		N20E6 淡灰色 砂質 土層	曲物	—	30.0	1.0	A	30	側面に木釘残存
321		N26E9	6	曲物	—	37.0	0.8	A	44
322	166	N25E9		曲物	(13.2)	(4.1)	(0.5~0.4)	A	59 内面が火受ける
323		N25E9	6	曲物	(87.0)	2.0	0.2	A	42
324	166	N23E8	2	曲物	(44.5)	(1.9~1.7)	(0.4~0.2)	A	62 径約20cmの容器
325	166	N25E9	3	角物	(11.1)	(3.4)	(0.4~0.3)	B	58
326	166	第1河通	3	曲物	(18.1)	(6.2~5.2)	(0.2~0.5)	A	71
327		N26E9	3	曲物	11.6	6.2	0.4	A	36
328		N26E9	3	曲物	(20.2)	(8.9~3.9)	0.4~0.3	A	36
329		N18E5	3~6	曲物	(15.2)	(5.2~4.8)	(0.4~0.2)	A	102
330		N19E5	3	曲物	(9.9)	(3.9)	0.4	A	133
331		N20E6 淡灰色 砂質 土層	曲物	(26.2)	(7.0~6.8)	(0.5~0.7)	A	49	
332		N24E9		曲物	(21.7)	(2.9~0.5)	0.3	A	195
333		N24E8	3	曲物	(32.4)	(1.3~2.0)	(0.5)	A	45
334		N24E8	3	曲物	(25.5)	(1.4~1.1)	(0.6)	A	91 折敷縫のコーナー
335		N23E8	6	曲物	(21.7)	(0.9~0.7)	(0.5~0.3)	A	104 折敷縫のコーナー
336		N24E8	3		19.6	(3.6~2.6)	0.2	A	103 折敷縫のコーナー
337		N18E5	3		22.0	2.0	0.8	B	87 折敷の底板の一部か
338		N22E8	6	曲物	(22.5)	2.6	0.5		67 折敷縫の一部
339	167	N21E6	3	曲物	28.0	27.1	5.0	A	39 斧敷
340		N22E8		曲物	23.1	(2.6~2.0)	0.5~0.6	A	99 折敷の縁か
341		N22E8	3	曲物	30.6	3.7	0.7	A	41

掲 番 号	図 版 ペ ージ	出 上 地 点	層 位	器 種	法 量(cm)			木 取 A	実 測 番 号	備 考
					全 長	幅 (径)	厚 さ			
342		N20E6	3	曲物	31.4	(4.8~4.4)	(0.4~0.2)	A	50	折敷の鉢か
343	167	N25E9	3	曲物	(24.2)	(4.5)	(0.7)	A	28	折敷の鉢
344	167	N22E8		曲物	(32.6)	(6.5~5.5)	(0.4~0.6)	A	43	折敷の鉢
345	167	N18E4	3	橋	(20.0)	(13.6~13.0)	(1.2~1.1)	A	63	橋の側板
346	167	N23E8		橋	12.3	(3.6~2.8)	(0.7~0.5)	B	105	橋の側板
347	167	N22E8	3	橋	(7.6)	7.6	1.2	A	250	橋の側板
348	168	N22E8	6	錐柄	(14.0)	(3.7~2.7)	—	C	114	
349	168	N23E8		錐柄	32.2	2.9	2.5	A	26	
350	168	N24E9	川底 砂層	錐柄	(34.1)	3.0	1.4	A	38	
351	168	N21E7	6	短刃柄	30.9	3.0~2.0	—	A	80	
352	169	N25E9	3	下歯齒	6.0	(5.0)	0.7~0.5	A	113	
353	169	N23E8		F歯齒	(6.7)	(4.9)	1.5	A	107	柄部欠損
354	169	N24E8	3	下歯齒	(9.6)	(17.0~14.6)	2.0	A	108	2枚柄欠損
355	169	N23E8		下歯齒	(4.7)	(8.0~10.2)	1.7~1.5	A	86	
356	169	N18E4	6	下歯	(16.3)	(9.8)	1.2	A	129	左足用
357	169 170	N22E8	3	下歯	(15.1)	7.8	2.4	A	106	左足用
358	169 170	N19E5	3	下歯	22.2	9.5	0.9	B	25	右足用
359	169 170	N23E8	3	下歯	23.0	8.0~6.0	3.9	A	22	左足用・鼻緒残存
360	169 170	N25E9	3	下歯	16.9	(5.6)	2.0	A	132	右足用
361		N25E9	3	下歯	(10.0)	8.6	(2.0~1.5)	A	85	
362	169 170	N22E8	3	下歯	21.9	9.0~8.0	2.5	B	20	左足用
363		N21E6	4	馬	(99.7)	2.2	2.0	C	242	
364		N22E6	5	鍔	35.0	18.5	(1.5~0.5)	A	199	未完成品
365		N23E8	3		(47.5)	8.0	(1.9~0.2)	A	76	
366		N26E9			(31.0)	20.0	20.0	A	53	
367	170	N19E9	6	ゾゾコ	11.9	4.4~2.2	—	A	263	